

ぶどうの木

第 25 号



基督伝道隊

八幡前田教会
大濠公園教会
戸畑教会

目次

巻頭言	榎本利三郎	1	昨日から待っていたとよー	石井勝三郎	30
信仰告白	榎木さなみ	2	山頂の売り達		
「主に委ねて」	新谷知恵子	3	「信仰と葬式」(新聞投書で問答)	久保田宮子	35
早天に導かれて	中島 恵子	4	「ゴミゼロの日」にささげる	伊規須太郎	36
早天祈禱会に導かれて	大田 邦子	7	表彰式	伊規須太郎	37
説教テープの文章起こし	上田喜美代	11	片付け	伊規須太郎	38
感謝しています	小正路節美	13	我が思い出(七)	鈴木 一幹	39
黙想の中に	伊規須太郎	14	わが定年退職の記	正野 眞宏	49
晩秋の光にさそわれて	上野 米子	15	カナダからのおたより	李 文江	63
主のご計画	上野 米子	17	榎本牧師全快感謝会		70
牧師夫人	上野 米子	19	金生伝道師任命感謝会		83
「感謝、感謝、ありがとう」	久保田宮子	21			
妻、泰子の現況報告に代えて	伊規須太郎	22			
木のぬくもり	伊規須太郎	23			
主によって歩行ができる喜び	廣田 寿	24			
インド紀行	池田 操	26			
	松山 智昭	28			

卷 頭 言

榎 本 利 三 郎

主の祝福は人を富ませる、
主はこれになんの悲しみをも加えない。

(箴言 一〇・一二)

今年も「ぶどうの木」二五号が出来ました。世の中でも「桃栗三年柿八年」と言われて居ます。ぶどうの木も十五年になり、主の御祝福によって、色々な果実が豊かに実りました。新鮮な果実、まだ味の淡いことから、充分熟成した、芳潤な香りと味で人を喜ばせる果実が沢山稔りました。

毎年収穫の時に想うことは、あの出来事・あの問題で苦闘して、主が勝利と驚くばかりの豊かなめぐみを注いで下さった事を記録しておけば良かったと云う事です。弱い私共人間の記憶は年と共に消えてしまいます。記録があると、読む度に実感を与えられ、いつまでもいつまでも主の恵みを新鮮に味わせて頂けます。
次号にも沢山の果実が結ばれる様祈ります。

一九九八年二月



信仰告白

榎木 さなみ

私が聖書と出会ったのは、婚約式の時に、プレゼントとして頂いた時でした。聖書と賛美歌の本を頂き、とっても難しい本だな、と思いました。

昭和五十五年十二月一日、前田教会にて、皆様の祝福によって、素晴らしい結婚式を挙げて頂きました。木曜日、日曜日は家族で礼拝に出席し、神様は目には見えないけれど、色々な所で支えて下さっているという事が少しずつ分かってきました。

昭和五十七年一月二日、一番元氣のよかった父が胃ガンで体をこわし、あっという間に、天国に召されてしまいました。その後、母も糖尿病から体調が悪くなり、長い入院生活が続き、なかなか礼拝に出席する事が出来なくなり、家で榎本先生の説教テープをいつも聞いていました。昭和六十二年二月、胆のうと乳ガンの手術をして、少しずつ元氣になっていきましただけれど、熱が出たり、おなかに水がたまったりし、毎日一生懸命がんばりましたが、平成六年五月十六日に天国に召されました。

父と母の病を通して、神は愛であるということに分からせて頂きました。苦しみに会った私は、よかったと思います。これによって、私はあなたのおきてを学ぶことができました。（詩篇一一九篇七一節）

「あなたの御言葉の全体は真理です。

あなたの正しいおきてのすべては、

とこしえに絶えることはありません。」

（詩篇一一九篇一六〇節）

私は聖書の御言葉に従って、信仰をもって歩いていきたいと思えます。よろしくお願いします。お祈りありがとうございます。



信仰告白

新谷 千恵子

私の家族、親戚も皆、創価学会です。私も誘われ、女子部に籍を置いていました。

私は十年程前から、精神分裂症という病気にかかり、精神病院へ何度も入院しました。

父は亡くなり、母も肝硬変、私は病気、兄は一人で職人さん達と、畳屋を営んでいました。そしてやっと母の目に適ったお嫁さんが来てくれました。そして二人の孫の顔を見て、母は肝臓癌で亡くなりました。

私も一人ではいけないと、ある人と結婚しましたが、姑ともうまくいかなくなり、病気が出て、離婚しました。

私にはもう何もないと思いつつ、兄の家族と行き来して、仕事を探して、仕事につきました。一つの仕事は、結婚前働いていた病院の厨房の仕事、また二つ違う仕事にもつきましたが、職には就くのですが、その度、病気が出て、長く続きません。そして心が不安定で、平安がありません。

そんな時、ある人が「信仰が悪いのでは」と言ったのです。そうかもしれないと電話をとり、どこか教会へ行こうと考え

たのです。前田町に教会がある。「そうだ、前田町の教会へ行こう」と電話で牧師に「誰でも教会へ行けるのですか」と聞くと、「いいですよ」との話で、通い始めました。

何も知らない私でしたが、「神は唯一人で、神様に信じて祈れば、叶えて下さり、責任をもって下さるのです」というお話して、私は自分でも自分の責任を取れないのに、取って下さる方がいる、何てありがたいことだろうと思ひ、私みたいな者でも教会へ通っていいのだろうか躊躇しつつ通いました。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたをたを選んだのである。」

「十字架の言は、滅びゆく者には愚かであるが、救いにあらずかるわたしたちには神の力である。」

「神の子とされるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったか、考えてみなさい。」

何の価値もない者をあえて選んで、恵んで下さる。

「神は恵み深く、その慈しみはとこしえに絶えることがない。」

これからは、何も出来ない罪人ですが、自分の十字架を背負って、主イエス・キリスト様に従って行きたいと思ひます。

平成九年五月

「主に委ねて」

中島 恵子

私が神様を知ったのは、四歳の時でした。というのも、カトリック幼稚園に通っていたからです。十字架に張りつけられたキリスト様をガンと見せつけられて、幼心になんでこんな残酷なものを私たちに見せつけて、その上、祈れと言っているのだらうと、よく思ったものです。その時点で、私は十字架の意味を知ろうとはしませんでした。三日後に、その十字架の上のイエス様を生き返らせた神様の方がすごいと思わずと、神様にお祈りしていたのを覚えています。

私の家は仏教で、これまた、仏様と神様のどちらにお祈りすればいいのかと幼心を悩ませました。私はどーんとふとつちよな仏様より、スマートな感じのする神様の方がいいという理由で、神様派でした。それも小学生まででした。

中学生になり、「神様なんていないんだよ」という友達の一言で私の中の神様の存在を疑うようになっていきました。何かあるごとに「神様」とお願いしていたのに、そのお願いを聞いてくれる存在がなくなってしまったのです。その頃から、私は自分の心のバランスを保てなくなっていた気がし

ます。

神様がないという事は、自分で全てをしきってやっつけていかなければならないということです。お願いを聞いてくれる方はいないというのですから。「自分で…」「自分で…」という思いが私を追い詰めていきました。

高校生になり、自分で人生を切り開いていかなば…、という思いにかられ、勉強ばかりの毎日を送っていました。でも高校二年生の後半ぐらいから、なんだかいろんな事がむづかしくなってきました。それは死という事を考えるようになってからです。「自分はいつかは死ぬ。ならば、好きなこと…。」と思い、それまで必死に頑張った勉強をやめ、絵画の道へと進む決心をしました。

美大受験を志望し、見事にすべりまくり、遂には三浪してしまいました。美術を勉強する間、生きる事の意味が知りたく、いろんな本を読みました。中でも、仏陀の思想を私は信じようとしていました。

人は魂を浄化するためにこの世に生まれ、浄化するまでこの世に何度生まれ変わるといふ仏陀の考えをです。生きていく意味がわかったという喜びの反面、こんなつらい人の世をまた何度も生きていかなければならないのかという思いもありました。

しかし、それも三浪目に郡さんに出会ってくつがえされま

した。初めて知り合ったその日に、彼女の口から、神様という言葉が出てきた時、自分の耳を疑いました。まさかこの人の口から「神様」という単語が出てくるとは思っていなかったからです。噂によれば、彼女は半年前には、確か髪の色はみどりに染めていたとかいう噂が頭にあっただからです。

ある日、彼女が私のアパートに泊めてと訪ねてきました。その時、彼女が行っている教会に行ってみたいと思い、彼女に「いつか教会に連れて行って」といったら、驚いて私を見て、「今日は教会へ行くためにここに泊めてもらおうと思っただ」と返事が返ってきました。

さっそく、次の日に教会へ行ってみることにしました。

牧師さんの説教に胸がいっぱいになったのを覚えています。「私を本当の意味で助けてくれるのはこの教えではないのか」という思いが頭をよぎりました。郡さんと教会へ通っているうちに、郡さんがそれまでの彼女と違う彼女になっていくのを不思議な思いで見えていました。人生に迷っているという暗い表情を時々見せる彼女ではなく、「何かに守られているから大丈夫」という落ち着いた表情を見せる彼女になっていったのです。「これが神様の力なのだ」と思いました。けれども、私にはまだ彼女のように、イエス様の救いにあずかったという確信が持てませんでした。

三浪目、また美大受験に失敗して、これからどうしようか

と、何かにすがりたく、しばらく教会に通っていました。それでも、親の元において、何の変化もなく時が流れていくという状況に耐えられず、私は京都の専門学校へ通っている妹の所に行きました。

何をするでもなく、有名な寺へ行ってみて、お坊さんと話をしてみたりもしましたが、心になんかの感動もありませんでした。にも関わらず、「もしかしたら、神様は私に尼になれといっているのでは」と、今考えるとバカな事を思ったりしていました。

なんとか、自分の人生の方向を決定したく、私は福祉に興味があったという事もあり、大阪の老人介護福祉学院へ入学する事にしました。本当にこれでいいのかな？と思いつながら九州に帰りました。その日、私は不思議と教会へ行かなければならないという思いにがられました。半年ぶりに牧師さんと会って話をしました。が、半年間、京都で完全に自分を神様にしてしまっていた私ですから、なかなか牧師さんの話には耳を傾けられません。しまいには、「私には、もう牧師さんの話はわからない」と言いだす始末です。そんな私に牧師さんが「この世は神様が支配なさっている。神様に身を委ねればいい」と言ってくれました。

牧師さんが言ってくれた、たったその一言が私の頭から離れず、福岡から地元へ帰るバスの中で「身を委ねる」という

事はどういう事なのだろう…とずっと考えていました。

私は自分の今までを振り返ってみると、「自分がこうするんだ」と自分がやろうとしてやった事はどれ一つかなくなっていません。逆に、祈ったことは時にかなってしまいました。この私の目がいい例です。

私の目は二歳の時、病気の為に失明しました。失明はしなかったものの、すごく厚い、まさに牛乳ビンの底のようなメガネをはめていました。「メガネをかけないでいいようにしてください」と小さい頃、ずっと祈っていました。今、私の視力はメガネを使用しなくてもいい程に回復しています。神様はいない、と心に思ったあの時から、神様はいろんな事を通して、もう一度、神様の存在を私に知らせようとしていたのだとやっとそのバスの中で気づきました。

神様はいないと言ったこの重い罪、神様はいないと思い、何に対しても善を行うという事を忘れていた心を今更どうやって神様に許してもらえばいいのだろうか、と思った時、やっと十字架の意味、そして有り難さが分かりました。イエス様が私の罪の身代わりとなってくれたのだ、という事がわかりました。牧師さんに神様に身を委ねるといふ事の意味が分かりましたとお話した時、牧師さんは私にイザヤ書の四六章四節の「わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」とお言葉を教えて下さいました。牧師さんを通して神様

が私のために聖書から選びだしてくれたお言葉だとその時思いました。

それから私は満たされた思いで、大阪へと向かいました。大阪での暮らしが始まり、知っている人が誰一人、本当に誰一人いないので、寂しい思いをするのかな…と思っていました。神様が見えて下さると思うと、少しもそんな事はありませんでした。

「神様に委ねればいい」とわかってから、本当に生きることが楽になったからです。「私が、自分が神様」という考えを捨てて、神様に立ち返っていくという努力も、実は自分を楽にし、解放していく事なのだという事を知りました。

大阪では、聖書を学ぶ時間も神様が与えて下さいました。それまで、私は聖書を自分の都合のいいように使っていました。苦しい時、自分が楽になる言葉を見つけるまで探す、という読み方です。聖書の中の神様を知ろうとはしませんでした。

エレミヤ書、イザヤ書と読み、神様の愛の深さ、厳しさを知りました。そして、もし、旧約聖書の時代の民の中に私がいたならば、私は間違はなく「クシャッ」と殺されてしまっているだろうなと思います。神様を神様として認めていなかった罪のためです。そのような罪深い私が今も生かされているのは、イエス様のお陰なのだという事もわかりました。

自分は意志が弱く、情けない存在であること、一人では何もできないことを、嫌というほど、ここ何年かで思い知りしました。今までの罪を認めて、そして悔い改め、神様に委ね、そして従う生き方を神様にさせていただく事を今は願っています。いつも見守ってくださる神様と、自らの死によって、祈ることを与えて下さったイエス様に感謝する事を常に忘れないように生きていこうと思います。



早天に導かれて

大田 邦子

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなた方に求めておられることである。

テサロニケ第一 5・16-18

五月四日、聖日礼拝に出席『みぎわ』に目を通させて頂く。
報告欄に

「今週から早天祈禱会を始めます、お祈り下さい」が目飛び込んで来ました。

わーっ、近づかせて頂きたい、でも早朝、残念だけれど私にはとても無理、あまり気にも止めず礼拝が始まりました。

この日の聖言、

主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。

聞き馴れた聖言です。榎本先生の説教が始まります。

「私達がどの様に、イエス様を信じているでしょうか、神様が私達に何を求めておられるか、真剣に考えているでしょうか……」の問いかけから始まりました。

「曖昧でなく、本当に信じること、今の生活から立ち返って、イエス様を救い主と丸呑みに信じなさい……」と。

その中、

「あなたは主イエスを信じなさい」と、「あなたは……ですよ」

先生の語句に力が入ります。ハッと迫られ叱咤された思いで、新たに自分に問い直しました。背筋を伸ばし大きく息を吸い、神様の前に姿勢を正しました。

勿論信じているつもりです。でも御言に馴れ、恵みに馴れ侮っている自分が刺されます。神様に生かされ、こんなに愛され、顧みて頂いておりながら、神様中心にと願い祈りながらも、自分中心に走ってしまいます。聞くだけでなく、唱えるだけでなく、行う者になりなさい。と細い声で呼びかけられます。早天が朝六時からと報告がありました。

そうだ、近づけて頂こう。私に語って下さっている聖書を読み、神様のみ思いを知らせて頂き、確信をもって信じる事の出来る様、真剣に求めようと。「今は恵みの時、見よ今は救いの日である」イエス様、まず一步踏み出しますから力を与え道を開いて近づかせて下さい、と切に祈りました。

具体的にいろいろ問題がありますが……。

先ず時間です。一日二十四時間も神様から頂いている時間、その中で今日までどれだけ神様のために割いているだろうか。今、若い家族と一緒に恵まれた処におかれている時だけに、朝先ず御言を聞いて出発、一日の生活のサイクルを神様中心に変えようと、心に決めました。

朝六時の集会、それに間に合う足は？、帰宅して調べる、何とドンピシャリのバスが、しかも我が家から前田町まで直通があるではありませんか。普通急ぐ時は黒崎駅で乗換え、バス代も三七〇円かかるのが、二〇〇円で、我が家から二十分で教会に着きます。何と感謝でしょう。祈りに応えて道を開いて下さいました。イエス様有難うございました。恵まれたスタートです。後は私次第。

実は昨年一美から言われていました。

「ババもう少し早く起きて……、二、三十分でいいから、食事を早くすませてくれると助かるけど……」。

私の一番辛いところ、

「あなた達、先に食事を済ませて、後の片付けは私がするから……、もうこの年なのだから我が儘させてよ」

孫の盾の学校や、信夫さんの出勤が早くなり、片付けが早く終わると家事の手順が違うことはよく分かっている。主人は

もともと朝に強く朝型、私は朝は絶対駄目、低血圧で朝の目覚めも悪く、夜になると仕事が捗る夜型、起床が七時過ぎ、朝食が八時頃、早起は特別な用事のない限り仕方ないと決めています。 斉が帰省した時も、

「母さんが、もう少し早く食事を済ませてくれたら助かるけど…と言っていたよ」と。

それでも、かたくなに拒み続けていた私でした。今にして思えば本当に申し訳なかったと。神様は全てご存じで、どうしても改めることの出来なかった私のかたくなな石の心を取り除いて下さいました。

家族に早天に出ることを告げると、「ババさん、絶対に続かないよ」と一笑、さもありません。私自身もどうなるかわかりませんが、全てお委だねして祈りました。

いよいよスタートです。集会が六時なので、枕許に目覚まし二個置いて、五時起床、三十七分に家を出る。神様の隣れみで朝毎に御言をもって心の目を覚えさせて頂き、今も一回一回真剣です。

お付き合いがもう五十年近くなりますM姉が、「あなたが早天に?…全く考えられない…」と。

神様は本当に真実なお方です。

榎本先生が、よくおっしゃっておられます。「三度の食事

をする様に、霊の糧なる聖書を読み、祈って、主とのお交わりを持ちなさい、これが勝利の道ですよ」と。

もう年を重ね、物忘れがひどく、頭も動作も緩慢、しっかり老いを感じるこの頃ですが、日毎に渴きを与えられますことが感謝で本当に嬉しいです。

初めて味わう早朝の街のたたずまい、美しい日の出が見られました夏から秋、今は真っ暗、木枯らしが吹いています。日毎に季節の移ろいを感じ、神様のみ手のわざを実感、主を崇めさせて頂いています。

早天では、金生先生の若さとさわやかさ、短い時間ですが一章一章教えられる感謝のひとつです。「私達が救われたのは行いではなく、恵みです」と。人の無力さ弱さを、先生のご経験を通して熱をこめてお話しして下さいます。真実な主の語りかけを心から感謝しております。

通読させて頂いている中、改めてパウロの信仰の姿勢と、榎本先生が一つに重なって来ます。

主イエスから賜った神の恵みの福音を証しする

任務を果たし得さえしたら、この命は自分にとって

少しも惜しいとは思わない。 使徒行伝 20・24

この世と妥協することなく、聖書にある信仰に立って、この福音の伝道に命をかけていらっしゃる榎本先生の熱意に心を

打たれます。又この信仰に導かれている私達、心から神様に感謝致します。

今我が家は三世代同居の日々、あっという間に過ぎる一日です。見えるところの価値感、時間帯は異なりますが、ただ一つ、主の憐れみで生かされている者として、主に目をとめ、

「いつも喜んでいなさい……」

どんな中にあってもこうありたいと常に祈り願っております。処が私自身信仰が問われます。つい見えるものに動かされ、老婆心も手伝って己が頭をもたげます。「私はキリストと共に十字架につけられた、生きているのはもはや私ではではない……」と、御言に立たされるのですが、なかなか十字架に死に切れず、失敗だらけ、悔い改めの連続です。

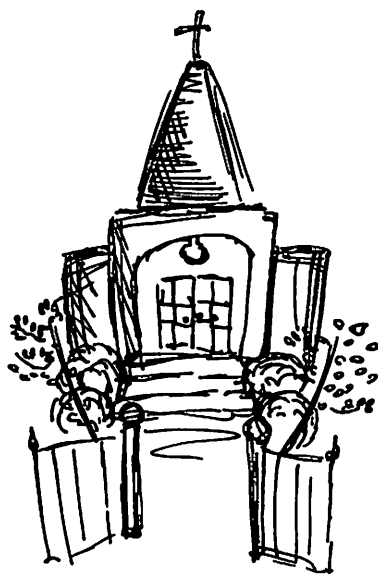
でも、早天のお陰で、朝毎に恵みで包まれ、素直に引き返し新しくされて、一日一日が大変楽になりました。主にあって張り張りのある毎日を感謝しております。

立っていると思う者は、倒れないように

気をつけるがよい コリント第一 10・12

榎本先生ご夫妻、金生先生、皆様の陰にあってのお祈りを心から感謝申しあげます。

主のいつくしみは絶えることなく、その憐れみは尽きることがない。それは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい。



早天祈祷会に導かれて

上田 喜美代

早天祈祷会が始まると聞いたけど、祈祷会というからには、人前でお祈りが出来ないと思いましたが。しかし先生に聞いたなら、お祈り出来なくても聖書通読があるから、一日でもいらっしゃいと。それで是非出席させて頂きたいと思ひ、主人にはどの様に話して許可を得たら良いのかとお祈りしていました。その時与えられたみ言が、

主はわたしの光、わたしの救いだ。わたしは誰を恐れよう。
主はわたしの命の岩だ、わたしは誰をおじ恐れよう。

詩篇二十七篇

「そうだ。全て主におまかせすれば、主が許して下さいさるのだ」。そう信じて、強気になって頭ごなしに主人に「明朝から早天祈祷会に出席するから」と云ったところ、「何をのぼせているのか、たいがいにしておけ」と手が出て、大目玉を喰いました。「左の頬を打たれたら右の頬を向けよ」、このみ言には従えませんでした。

二、三日小さくなって祈っていました。水曜日に主人の顔色を伺いながら、弱気になって、「明日木曜会に出席させて欲しいのだけ」と許しを請うと、「教会に行くなと云っても、お前は行くだろう、黙って行け」と云ってくれたので、「ヤッター」と思ひ、神様に感謝しました。その時、与えられたみ言が、

神は高ぶる者はしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜うからである。
ヤコブ4・6

主人は信仰をもつことに反対し、怒りを発したのではなく、わたしが主人に対して横暴であったことに気が付き、主人に詫び、神様に悔改めのお祈りをしました。すると、

人を恐れると罌に陥る。主に信頼する者は安らかである。

箴言二九・二五

のみ言が与えられました。

早天祈祷会には、先ず朝一番に神様のみ前でみ言を頂くことの素晴らしさに感激感謝です。押し出されるままに初めて人前でお祈りが出来た時の嬉しさは、忘れられません。市場に行っても皆さんに早天祈祷会にいらっしゃいと叫びたいよ

うな思いでした。今迄は、血圧も低く、夜ふかして一時過ぎ二時頃寝つかれずに本を読んだりして、朝は八時頃まで寝ていたので、三日坊主でとても続くことはないと思っていたけど、神様は不思議な様に健康を支えて下さり、力を与えて下さいました。血圧も正常になり、体調も整えて下さって感謝です。「今は恵の時、救いの日なり」と、明日をも知れぬ身、一日一日が喜びに満たされて、全てが許し合える思いです。一日中が嬉しいです。

そしてこの思いをエステル会でどの様にして感謝の気持ちを表したらいいのかなあ、話し下手だから、と思い巡らしていると、神様は七月も八月もエステル会には出席を許してもらえませんでした。

そこで神様は、

あなたは神に喜ばれようとしているのか

人に喜ばれようとしているのか

人の歓心を買おうとしているのか

を、示されました。そうだ、人の歓心を買おうとして、必死に筋道を立てようとしているんだと教えられました。そして九月のエステル会において一言感謝をさせて頂きました。

また大田姉の『振り返ればただ一筋の道』をお聞きして、

神様の証し人となることを学びました。

地の果てまでわたしの証人となるであろう。

使徒行伝一・八

あなたがたはこれらの事の証人である。

ルカ二四・四八

自分自身の体をもって神の栄光を表しなさい。

コリントI六・二〇

神様は至る所で、証人となる様求めておられます。自分が大きく恵まれた時を証しする事と思っていました。自分が事々に具体的に一つ一つの物事の小さい事にも神様が目を向けて感謝しておられる姿を見せて頂きました。

榎本先生がいつも神様を手触る様に知る事と、おっしゃっておられる奥義が少し分かった様に思いました。

主に感謝せよ

そのみ名を呼べ

そのみわざをもちろもろの民の中に伝えよ

そのみ名のあがむべきことを語り告げよ。

イザヤ書一一・四

説教テープの文章起こし

小正路 節美

【まる一年を振り返って】

◆今年九月で、戸畑教会説教テープの文章起こしのお手伝いを始めて、丸一年が過ぎました。思えばあれは昨年九月頃の事です。戸畑教会の伊規須牧師から何気なく、「良かったら、テープの文章起こしをやって見ませんか？きっとあなたのためにもなりますよ」と言われ、二、三本ずつ戴いて始める事になりました。私は簡単に考えていましたけれども、いざ始めてみると、「こんな難しいとは……」と思い、どのようにやれば良いのか、戸惑いも色々と感じられ、悩んでもいました。そうしているうちに、テープの方も次第に増え、先生からも色々なアドバイスを受け、自分なりにやっていますと、段々出来上がるようになって来ました。

【私なりのやりかた】

◆私なりのテープ起こしは、まず、最初にテープを聞き、それを手書きの文書にします。そしてこの文章をワープロで打ち込んでフロッピーに記憶します。それからDOS変換し

て（先生のワープロと機種が違うので）、毎週日曜日の礼拝後、先生の方に手渡します。先生は私から受けとったフロッピーディスクをご自分のパソコン（ワープロ）で見られ、「ここが良い！」とか、「ここが悪い！」とかアドバイスを下さいます。そういう手順で私はテープ起こしをしています。私も自分なりに修正はしますが、それ以上に先生の方も修正が多いのではないかと思われまます。

【み言葉をニレハム素晴らしさ！】

◆色々やっているうちに月日もながれ、その間に私の未熟さで先生には大変ご迷惑をおかけ致しましたが、これを見て、「私は神様から本当に恵まれたなあ」と思ったのです。それは神様の事がやっと分かり始めたからです。今まではただ、教会へ行ってその日の説教を聞いて帰り、お話しも分からぬまま過ぎ去っていました。でも今では、神様が私たちに對して何を言おうとされているのか。何を望んで、何を求めていらっしゃるのか分かるようになって来ました。そして、お言葉の意味までも分かるようになって来たのです。本当に素晴らしい事でありました。

【国語力も付きました】

◆また文章起こしをやっていると、自分なりにですが、

文章の力、国語の力、漢字の力なども付きまじり、ワープロの実力も付いて、「神様のお力を本当に戴いたなあ」と思いました。今、思えば、先生からあの時、テープ起こしのお話しがなかったとしたら…、またお話しを頂いても自分が断って投げ出していたとしたら…、神様の事は勿論いま以上に分かる事はなかったと思いますし、自分にも今のような自信は付いてはいなかっただろうと思います。

【やってて良かった！】

◆「やってて本当に良かった！この一年間、辛い事もあったけれども、途中で投げ出さなくて良かった！」これは素晴らしい事だと思い、神様に本当に感謝をしています。あれからテープ起こしも一年が過ぎ、テープも今では五〇本を越えました。これを私なりに記念として、今回、ぶどうの木に投稿する事に致しました。文章起こしでは、まだまだ先生に沢山ご迷惑をおかけする事になると思いますけれども、私は神様に祈って、神様と共に歩んで、神様と一緒に頑張ってください、そのように願っております。皆様のお祈りをお願いします。

以上

(一九九七年一〇月記)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

感謝しています

伊規須 太郎

【み言葉には命がある】

◆繰り返しみことばを味わうことは素晴らしいと思います。「キリストのうちには知恵と知識との宝がいつさい隠されている」(コロサイ二章三節)とあります。

【ご用にあずかる恵み】

◆小正路さんは内なる人が恵まれただけでなく、いろいろな力が増したと思います。何よりこの文章をごらん下さい。

【私にも大きな力になります】

◆私にも大きな力になります。お話が記録に残っているとえば、「天よ聞け、地よ耳を傾けよ」と大胆に語る事ができます。

【あと処理が出来ません】

◆沢山の一次原稿がたまりましたが、仕上げ(発行する)ことがなかなか出来ません。申し訳ないと思っています。

(おわり)

黙想の中に

上野 米子

一、四月の窓から

花の便りも遠く色あせる今日この頃、庭の木々は御復活の主に由って命の衣を以て、新しく装い、きらきらと目に沁みるような緑の光が窓辺に輝く朝方、物の造り主なる神を覚え、「ああ、万軍の主は生きていらっしゃる」とわが心に訴え、主の御業をほめたたえました。「私は命あるものの神である私に出来ないことがあるだろうか」と主はお言に語っておられます。時を持ち、備え給う主は、その時その時に御わざを以て、私達小さき者をお諭しいただきますからありがとうございます。いろいろな痛みが多い世相の中に、時には落ち込むような時もありますが、私達には「主が共に居られます」と主を覚えさせていただき、主を呼び求める時に、命の水が流れ出てうるおして下さいますから感謝です。「神よ、私をお守り下さい。私はあなたに寄り頼みます。」日毎に主を呼び求め、主が共に居られます安き日々の生活に生かされている自分を省みて、父なる神様を覚え、御子イエス様の御血に

予り、生かされて居りますこの恵み、今日もどうぞ主をほめたたえる一日でありますよう、力なき弱き者をあわれんで、私の今日の道をお導き下さいますように。「我生きるはキリスト、我がうちに在りて生きるなり」

一九九七年四月

二、試練

一九九六年九月、息子、成理兄は出張中のため、会社規定の精密検査を受けることが出来ず、民間の総合病院にて改めて検査していただきました。通院検査の結果、十月六日、即刻入院の決定がおりました。学生時代は運動を好み、日頃は健康体を以て自負しておりました。病名は肺腫瘍でした。本人は元より家族も一言のことばもなく沈痛な思いでした。言いかえれば、がん、です。この病気は快癒よりも死につながる方が多いございます。其の時、私は造り主なる神様からいただいた体であるから、御旨でしたらどうぞと、お返ししないでとは心に決めました。「神与え、神とり給う」とのお言葉にゆだねました。そしてその時、残された二人の孫を息子に代わり背負わねばと、老の身を忘れ、戦中戦後時代の自分がオーバーラップした悲壮な思いが心に走りました。

神様の大きいなるあわれみと、教会、牧師先生、兄弟姉妹の

熱き祈りに支えられ、又主は病院の先生の執刀の技を祝され、六時間に及ぶ大手術も無事にお守りいただきました。又御看護いただきましたナースの皆様、又会社社友の御温情をいただき、何と感謝してよいかわかりません。主はすべてから臨んでいただき、「主は生きていらっしゃる」と大能の御手を畏れ、感謝申し上げます。五カ月に及びました入院生活も神様に守られ、三月六日、無事退院致しました。一カ月の家庭療養を備えていただき、会社の御温情に由り四月半ばからリハビリを兼ねた出社となりました。

試練を通し、御真実なる主の御身にふれまつり、心から感謝をお捧げ申し上げます。

そして私は悔い改めを主に申し上げ、お許しをいただきました。二人の孫を背負う等と神を忘れた思い上がりを申し訳なく、「我が信仰いづこに在りや」と反省致しました。重荷を負う日々がづづきましたが、今はお許しを信じ、平安をいただいております。

この度、息子を通していただきました試練は、主の栄光をほめたたえる大きな恵みとなりました。新しき命をいただきまして、生かされました原点を忘れることなく主の御愛を覚えまつるよう祈っております。

主は申されました。「あなたがたは我が証人、私が選んだ我が僕である」

この度、いただきました大きな試練は主よりいただきました主の愛と恵みであることと信じて感謝申し上げます。

「我と我が家は主に仕えます」

「すべての恵を心にとめよ」

一つ一つのお言葉が迫ります。

一九九七年四月

三、冬の蛙

或る日の午後、お茶のひと時に主人と交わされた言葉です。

「お父さん、私、こんなことを考えて居るんですよ」主人は平素言葉少なく、寡黙の人でした。その主人が「おまえは何時も冬の蛙だね」と私に言葉が返りました。私はその意味がわからず、何のことだろうと考えました。主人が考えますには考えるの「かん」を寒い時の「寒」に置き換え、これを冬に通じさせ、考えるの「かえる」を「蛙」に置き換え、冬の蛙となったのでしょうか。主人は時折、落とし話のような諧謔な言葉を云いますので、私は面白いことを云う主人だなあと見直し、有りがたさを覚えました。そして主人が申しますには「人には幾ら考えても結末はただけない。僕はその日のことはその日枕してよくねむると、すっかり忘れる僕達には考えて下さる方が何時もお出になるのだから、お委ねする

よりほかはない。先ず祈る事だよ」と云われました。

「明日のことを思いわずらうな。明日のことはあす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞はその日一日だけで十分である」主人は仕事の都合で、礼拝もこと欠くことの多うございましたが、魂に沁みついた信仰の恵を以て言わず語らず家族の一人ひとりに何気なく、語り導いて下さる主人に深い深い感謝を覚えました。

主人も今年八月、九回目の召天記念の日を迎えさせていただけます。平安を以て御國に住まわせていただいで居りますことを信じて、感謝申し上げて居ります。

「冬の蛙」、この言葉は、私にとって終生忘れることない言葉となりました。

時折、この冬の蛙はとび出して思い出話に色を添えて、楽しい時を持たせていただいで居ります。



一九九七年五月

晩秋の光にさそわれて

上野 米子

教会の御集会の帰途、晩秋の暖かき日和にさそわれて、愛姉二、三名の方と大濠公園に秋をたずねました。池の周辺を赤と黄を以て彩る木々の美しさ、遠く市街地もはっきり見え、しばしの憩いをいただきました。雲一つなく高く澄み切った大空。

詩篇一九・一「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみてのわざを示す」

全くおことば通りです。くれないのわくらばが風もないのに地に落ちました。神様は冬ごもりを木々にお知らせしているのでしょうか。万物の造り主は御臨在をはっきり私達に示されています。やがて十二月、待降節がまいります。御聖誕を覚えます。私はこの時、昨年大きな大きな試練に想を馳せ、主のあわれみを感じました。昨年十月、息子が検診の結果、「ガン」の宣告を受けました。一週間の検査の結果、即時入院、手術となりました。日頃は病も知らず、健康が祝されておりました。突然のことで私は病名のおそろしさに心も体もおののきました。再起不能と自分で決め、「と

らばとりね」と心に律し、主に祈りを捧げました。(後日私は自分で心に決め、主の御旨と問うこともなく、何と傲慢な者であったことを悔いました。)主のあわれみ、教会先生、兄弟姉妹の熱き熱きお祈りをいただきまして、難関を突破、五カ月の入院生活も主の御愛に守られ、退院の運びとなりました。

主は十字架の御血を以て、息子を買ひ取り、その恵は新生の魂となつて、新しく立たしめて下さいました。そして私達は人の世に生きて苦難に会わねば、御真実なる主を握りしめることは出来ない事を、体験させていただきました。主のおことはは毎々に生きて働いておいでになることを痛感致しました。

コリント第一六・二〇「あなたがたは代価を払って買はれたのだ。それだから、自分のからだをもつて、神の栄光をあらわさない。」

苦難と恵は表裏一体、どんな中にも主の御臨在を覚えます。そして後日、息子は私に語りました。「痛かったよ」背中には右半径に「メス」が入り、其のあとが、くっきり刻まれております。見る度に私の心は痛みます。イエス様は十字架に御自身を捧げ、肉をさき、血を流して、私達を御あがない下さいました。主の痛みは如何ばかりか想像もつかない痛みであったこと、自分の痛みを思いおこし、涙をにじませて語つ

て下さいました。

詩篇一〇三・一「わがたましいよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。」わたしはこの新生の原点を忘れることがないようにと、事ある毎に、共に語っております。

使徒行伝一二・五には、牢獄につながれたペテロが教会に在る信徒一同の神に捧げた祈りに由り、手錠の鎖が解かれ、鉄の門もひとりでに開かれたと語られております。祈りの如何に大切であるかを示され、感謝申し上げます。私の心にもやわらかい晩秋の光が注がれ、心が温まりました。

エレミヤ三二・二七「見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。わたしにできないことがあろうか。」と語られております。

主の御聖誕近きを覚えて、主の御愛を心をかみしめ、心から感謝申し上げます。

或る晩秋の日に(平成九年十一月十一日)

「その日 その日」より

主のご計画

上野 米子

春雨の名に遠く、藪椿の二点・三点赤き顔をのぞかせる寒い雨の朝、過ぎ去った日々を思いを馳せ、神のみ前に反省の時を与えられ、主に立ち返らせていただきました主のご愛を感謝いたします。

一月下旬、息子夫婦は友の友情によるハワイ旅行のご招待を受け、出掛けることになりました。これは平成八年十月、息子が肺ガンの宣告を受け、五カ月にわたり試練の時を主より賜りました。主の限りなきご愛を賜り、また教会の先生、並びに兄弟姉妹の熱きお祈りに支えられ、自力で歩くまでに健康を回復せしめていただき、聖日礼拝にも出席させていただくようになりました。神様のご愛を身に沁みて覚え、感謝申し上げます。この友情は病後の回復を強めんとしての友の愛の現れでした。恵みの神様のお働きでございます。心から感謝申し上げます。

このことは一方において、私に対する試練でもありました。自分の考えでものを量る心小さき者でございます。ひたすら神に祈り、おすがりしました。実は出発四・五日前、夜分室

内で転び、横腹に打撲の痛みを受けました。軽くみて、湿布をして痛みをおさえておりましたところ、湿疹となり、それに加えて痛み、起き伏し、手の上げ下げ、起き返り、呼吸咳も苦しくなり、医師の門を叩きました。私は骨の痛みが多く、何回治療を受けたことでしょうか。医師はやさしく治療に当たってくださいました。この病で果して留守を守ることが出来ましようか。成人としての過渡期の年齢の男孫二人、平素は母の愛を満身に受け、甘え切った生活でした。私もすっかりお世話になっている身分です。その時、聖言が与えられました。

「神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」第一ペテロ五章七節。

そして、出発の翌日、神様は教会の先生御二方を送って下さいます。家庭の一切をみそなわして下さいました。

教会では御講壇に尊い御器として御使命をお持ちの先生方、野に下り一つの家庭に僕の姿をもって私ども家族のために働き下さいますお姿、私はどのようなお言葉をもって感謝を現してよいか、言葉がありませんでした。

奥様は食事に使う食材の不足を購入、わが家に着くなり、エプロン姿となって、夕食の準備、手さばきのよい運び、軽やかな音を立てて包丁とまな板とのハーモニー、私もかたわ

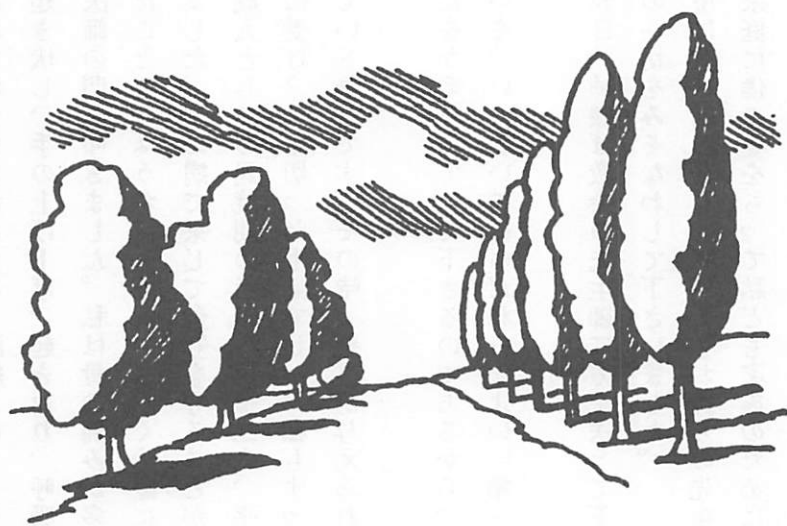
らに立ち、奥様の働きと手順を学ばしめていただきました。
食後は一切の後片付け、朝の準備、何からなにまで教えられ
ました。孫達もよく働いてくれました。

食後は食卓を囲み、主の御愛、現今の世相、学校の学び等
を語り、これは一対一でなければ得られない尊い尊い神様の
お恵みの時でした。「そのすべてのめぐみを心にとめよ」詩
編一〇三篇二節。このみことばは私の心の重しです。先生を
お通ししていただきましたこの一週間の歩みは、私の心のア
ルバムに消えることはないでしょう。

そして、私が大きく大きく教えられたことは、結果をもた
らす方は主御自身であることを教えられたことです。自分の
知識に頼って、自分で結果を造らない事でした。

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識に頼ってはなら
ない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの
道をまっすぐにされる。」箴言三章五節―六節。

平成十年二月二十四日記す



牧師夫人

久保田 宮子

大好きだった泰子先生が去る四月に入院、本当に驚いた。その後、早天と金曜会がお休みになりました。特に私にとっては早天が一番恵みを覚える時間だったのですが、仕方ありません。速いと思いつながら六月に見舞に行く事が出来ましたが、すぐわかってくれたので嬉しく思いました。何しろ遠い門司ですので、足の悪い私にとっては大変です。しかし先生が車を購入され、よく見舞われて、その都度様子を伺えますので感謝です。

しかし信仰の厚い夫人は私達と違って、本当に平安を与えられ、落ち着いて、係の方も一番良い模範生と言われました。聖書にもこう記されています。「本人が罪を犯したのではなく、またその両親が犯したのではなく、ただ神のみわざが現れる為」と、全くその通りだと思います。

私達もこれから迎える高齢化、何時病気になるかわかりませんが、本当に信仰を持つ事が出来た我が身に感謝して、日々を送って行こうと思います。どうぞ泰子先生に平安があります様に祈り通させて下さい。入院する五日前まで克明に日

記をつけられ、「かんしゃかんしゃありがとう」と書いてあるのに涙しました。また牧師先生も「わかれ」と記され、最後に「主の御名をほむべきかな」と結んでありました。



「一九九七年四月一日（月曜日）」

◆かんしゃ、かんしゃ、本とうにかんしゃ、かんしゃということでした。ありがとうということでした。ありがとうということでした。よかったです。

かんしゃ、かんしゃということでした。ありがとう、かんしゃ、かんしゃということでした。ありがとう、かんしゃ、かんしゃということでした。ありがとうということでした。

以上

（参考。詩篇一三六篇、同一五〇篇）

妻、泰子の現況報告に代えて

伊規須 太郎

1998年年初にあたり、命の確かさと使命の重さを思い身が引きしまります。皆様のご健康を祈念しつつ、新年のご挨拶をお送り申し上げます。さて、妻泰子は数年前(?)から痴呆症となり、徐々に生活に支障を生じ、私の手を取り頭を悩ませ、皆様にも種々ご迷惑をおかけしてまいりました。通常の対応では手に負えなくなって、北九州市小倉南区の蒲生病院痴呆疾患センターに受診したのが1996年6月はじめでした。この病気が進むのはやむを得ない事ですが、その進み方は一様ではなく、悲喜こもごもの1年でした。その間、西島院長からじきじきに懇切なご指導を受け、私どもの新生活の方向が定まりました。◆さて、心が揺れながらも在宅で踏ん張っておりました私も、ふとしたカゼを引きがねとして倒れ込み、よろよろと起き上がっては弁当を買いに行く状態がしばらく続きましたが、最後は二人とも絶食状態となり、ついに昨97年4月19日、同上病院(センター)に緊急入院しました。◆その後、同じ市内(と言っても遠い)門司区に新設された特別養護老人ホーム「豊寿園」に入園し、現在まで比較的平穩に過ごしております。入園者はすべて痴呆症であり、日本赤十字社(福岡県支部)の運営のもと、先進的な介護を受けております。また莫大な公費の援助を受けていることから、全国民・全市民の連帯を強く感じております。私の住居(の半分)は門司区であると思ひ、ある時は、ほとんど連日面会に行っていますが、妻は過去も家も持ち物も言葉も一切を失いました。しかし当人は世の煩いから離れてハッピーとも言え、私は長い時間をかけて別れをしているつもりです。彼女が最後の日記に、「かんしゃ、かんしゃ、ありがとう」と記したのが大きな慰めです■

木のぬくもり

廣田 寿

木のぬくもりに魅せられて、写真のような、木工品を作っています。孫の玩具箱①と、サイド・テーブル②、そして、わたしの便利棚③です。①と②は、概略寸法を知らせてきた注文品で、工夫しながら仕上げたものです。

玩具箱は、手作りの車と、名前の彫刻、把手のひもをつけて”おもしろく”しました。サイドテーブルは、ソファの横に置き、引出しはリモコンスイッチなどを入れ、フタ付きの方は、雑誌や新聞を放り込みたい希望でした。フタは蝶番で開閉したかったのですが、孫たちが遊んでいて、指でも挟むと剪断される恐れがあり、安全上、いる時にフタをしめる式にしました。

③は、手元において毎日使う「父さんの便利箱」のたぐい、小物入れの引出しと横がファイル立て、行事予定の日誌、教會週報、信徒会のテキスト、機器取扱説明書、園芸メモなどを入れています。上面は電話もおけます。いまは、寸法に合わせて追加作成した、A4判が入るトレイを忘れな盆とし、横にペン立てをつけて、定規、ハサミなど文具を入れ、使い込んでいきます。

外装は、白木のままの手ざわりもよし、好みにより、雰囲気に合わせて着色するもよしとしています。

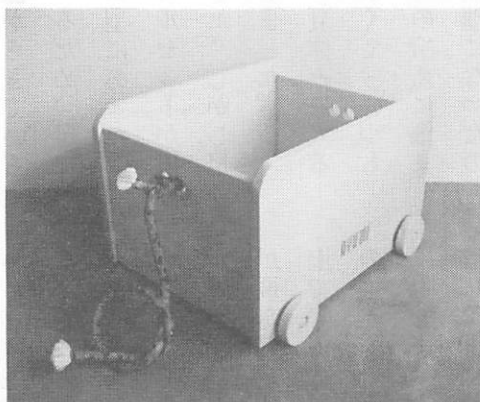
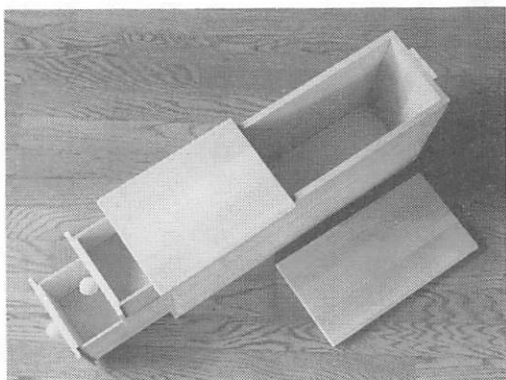
小物は時々作っています。わたしの小さな工房では、これらは大物の部類です。最近、電動化された工具が使えるようになって、早く、キレイに、らくにできます。

幾つになっても、モノを作る楽しみは、時を忘れて夢中にしてくれるところがいいものです。少々頭をつかい、指を動かしていると、体のためにもいいようです。

しかし、毎日やっているわけではありません。時が過ぎ易くて短い、貴重な与えられた人生、ほかにもやりたいことがたくさんあって、自分なりに楽しみながら、忙しくしております。無くてならぬもの（ルカ10・42）を覚えながら。

MINIATURE PAINTBOX

2015年



主によって歩行ができる喜び

池田 操

昨年の出来事でした。春の肌寒い朝、風邪をひいたせいもあってか、何時もと様子が違う、腰の痛み、足にそって走る痛みがありました。神経痛の痛みには慣れていましたが、我慢できなくなるばかり、そして教会へも病院へも歩行困難になったので、主治医の先生の紹介で、年金病院の整形で診て頂く事になりました。心臓の悪い事とたくさんの薬を飲んで

いる事を話しました。その日はちょうど部長先生で、レントゲンを撮りましょうと言われ、その結果、脊髄からきている、尾骨の上の第四、五の骨が変形して横に出ているため、足に神経がさわっているのせいでと説明され、体型にあったコルセットを注文して下さいました。数日後、コルセットが出来上がり、暫く様子をみましようとのことでした。しかし足の痛みは増すばかりで、六月二十六日に入院しました。

若い人から老人まで、患者さんの多いこと、夏休みに入ると学生さん達の入院、友達の見舞客、元気がよくて、いつも笑いが沸きます。私は相変わらず冷房で下半身の冷えに悩まされてきました。毎日、検査の連続、歩行が無理になったの

か、足のふくらはぎが腫れて、固く青じんできました。私が一番気を付けなくてはいけない事として、また打ち身を作らないように、血栓ができやすくなるので、と注意されていました。主に祈るだけです。素早く車椅子にかえました。心臓に人口弁を入れているので、ワーファリンの薬を飲み、血液をサラサラにしていますけれども、異物なので、心配になるのは当然の事です。

入院して一カ月以上たちました。主治医の先生から呼び出しがあり、八月八日に手術をしますとのことでした。姉と兄にも話しておきました。今まで何度も手術を受けては、死の谷を越えさせて頂き、神様に命を与えられてきました。平成八年の新年聖会の御言葉、「わたしは神である、今より後もわたしは主である。わたしがおこなえば、だが、これをとどめることができよう。」（イザヤ書四十三章十三節）が支えとなりました。

手術の前夜、麻酔担当の先生が訪ねてこられ、「実は、貴女の心臓の上部に血栓が出来ておりますので、手術中に血栓が飛ぶ可能性が十分にありますが、どうしますか。承知した上で、誓約書にサインをして下さい」とのことでした。内科の主治医の先生からも話を聞かされていたものの、心の動揺は隠せません。「あなたがたは心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」（ヨハネ十四章一節）を与

えられました。手術をしないと、今後歩けなくなるか、車椅子を使う事になってはと、思いめぐらせましたが、たとえ半身不随になっても歩行は出来ると希望が湧いてきました。

「わたしがおこなえば、だれがこれをとどめることができますよう。」私は主の御愛と、御言葉に信頼して委ねる事にしました。手術の朝、榎本先生がお出で下さり、祈って下さいました。兄弟姉妹方の祈りの内に手術が行われ、無事終了しました。麻酔から覚めました時、手足を動かしました。動きまです、感謝と感激でいっぱいでした。腰の痛み止め注射をさしては眠る、その繰り返しうちに、朝を迎えました。病室へ帰り、ベッドで十日間の辛抱、忍耐、暑い中を、榎本先生や、姉妹方の訪問を受けては励まされ、祈って下さり、何時も心の平安を保つことが出来て、感謝していました。歩行訓練が始まり、腰椎体操の指導も受けました。そして九月十七日、退院致しました。杖をつきながらの病院通いでした。三回目の心臓手術から、今年は十年目です。ペースメーカーも入れているせいか、以前のように苦しみもなく、順調です。礼拝にも、家庭内の仕事も、家族の協力があって、なすことが出来ます。昨年、もし血栓が飛んでいたら、と思うと、主の恵みであり、支えられ憐れみです。後で内科の先生が、「きつと血栓が固まっていたので、多分、飛ばなかったのでしょう」と話されました。

主はわたしには出来ない事はないと、とどめる事も、またおこなう事もなさる主に感謝し、先生方、看護婦さん、榎本先生、兄弟姉妹方のつきない祈りに支えられております。深く感謝して、お礼を申し上げます。



インド紀行

松山 智昭

〈インド行きの目的〉

今年の一月の始めに、インドのカルカッタへ行ってきました。目的は、マザーテレサの施設へ医療品を届ける事と、マザーテレサに会い、そして各施設を見学する事でした。

〈貧者の為に生涯を捧げた人〉

私達一行は、初日の早朝礼拝に参加しましたが、その時にマザーテレサに会う事が出来ました。心臓手術の後の経過が、あまり良くなく、車イスに乗っていました。思ったより小柄で、やさしそうな人でした。マザーテレサは、「最も貧しい人の中に生けるキリストを見る」と、その生涯を、貧しい人々の為に捧げました。しかし彼女は、「朝のお祈りなしには一時間も奉仕する事は出来ません」と、本にも語っていました。

〈施設見学〉

各施設を見学しました。

老人の家では、身寄りのない老人、精神疾患の人々が生活していました。

孤児の家では、三百人余りの孤児達が生活していて、中には乳児もいました。ここでは食べ物のない人々に給食を与えていました。また無料で薬も、与えられていました。

ハンセン氏病患者の施設では患者達が、自ら建物を造り、作物を育て、家畜を養い、魚の養殖をしたり、布を織ったりして自給自足の生活をしていました。

死を待つ人の家では、人として暖かく看護されていました。各施設では、シスターの他に世界中からのボランティアが、手伝いをしていました。

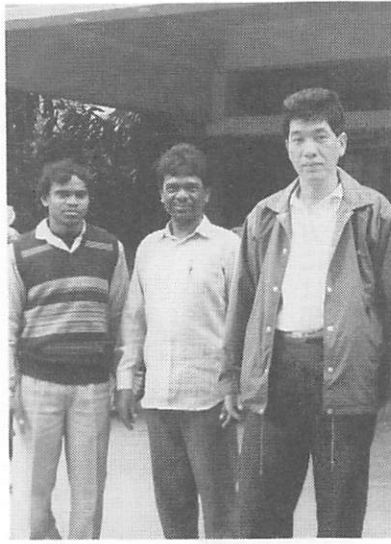
〈日本の豊かさを痛感〉

今回このように、主の恵みによりインドを訪問する事が出来て本当に良かったと思います。「何事も思い煩うな。ただ事々に感謝して主に祈りなさい」——日本での生活が、普通と思っていました。現実には貧困の状況を目にする事で、いま与えられている生活がどんなに恵まれているかを教えられました。

〈心の貧しい国？〉

また日本のように、物質的に恵まれていても、マザーテレ

サが言っていたように、心の貧しい国では、本当の豊かさは生まれて来ないと思いました。インドの旅行で、いろいろな体験をさせて頂き、今一度、主にあって歩む事の大切さを教えて頂いたような気が致します。主に感謝いたします。以上
(一九九七・一〇・三〇記)



昨日から待っていたとよー

山頂の売子達

石井 勝三郎

久し振りに暇になった。

「お母さん、阿蘇に登ってみよう。」こんな会話は、不思議にまとまりが早い。

「今から走っても、夕方には帰り着くバイ」

と、もう出かける用意を始めている。

「今年の夏休みも、大勢の孫たちが押しかけて来て、長逗留で忙しかったけんなあー。」

と、慰勞ともつかぬ言葉を投げかけ、女房の財布の紐のゆるみ具合を横目でうかがい、「観光も若返りに必要バイ」と必殺技の止どめの一撃に、あえなく女房殿は、コロリと車中へ、と書くと、常勝の亭主の様ではあるが、実体はその様に簡単なものではない。

丁丁発止と切り結び、ようやくにして三度に一度の一本を取るまで、臥薪嘗胆四十年の歳月を要するスローモー振りである。

四十年前の五條の大橋での大立ち回りの末、不覚にもおくれをとっての主従の誓い、いまだに勝率三割三分三厘、残念至極なことである。

気の変わらぬうちにと、後片付けもそこそこに、九州縦断道路を一路南下！

それにしても、私達夫婦の他愛ないドライブ、小旅行のつもりハシヤグ様が、可哀そうな位可愛いではないか。

熊本インターを出て、国道五十七号を東へ、もっと離れる、もっと離れる、と別の私げしかけける。

なんとなく、ルンルン一気に立野をかけ登り、阿蘇山へと右折、更に山路へと分け入る。足早に遠ざかる夏の季節、山路のススキはもう中秋の顔を展げている。

整備された山道、「アア、イイナア」と山頂へ。

ところがである。何処の行楽地も口ハで遊ばして呉れるところがない。

先ず第一の関門、有料道路の料金徴収の関所が、「ニュー」と、目の前に現はれる。

「アジャー。」

アワテて懐をまさぐり、勸進帳(わたしのからさいふ)を握りしめる。いきなり阿蘇の眺望権を振り廻されて、いささか気分がコワレル。

「アイヤ、しばらく」と、大きな手を差し出し、「千弐百

四十円也申し受け候」と、当然の如く言われれば、こちらは貧乏弁慶だ、「我等主従決して怪しき者に非ず、少々負からんかねー」と、値切りたくもなる。

駄目もともとでからかうが、相手は恐い程真剣だ。千貳百四十円を貰はねば通されんと、糞おもしろくもない。

安宅の関ならぬこの阿蘇の富樫殿とのやりとりを、女房はハラハラしながら固唾を飲むようにして見守っている。

関守殿も突破されてはかなはぬと、仲々要心深い、車の前輪に片足を置いて、それとなく備えている。

こうまでされては、得意の勸進帳を読みあげる訳にはいかぬ、「払ふよ、払うよ」と、降参。

かくして弁慶と義経ならぬ老人二人、関所を通過、一寸したレジスタンスを試みて、ささやかなアヴァンチュールを楽しむ。

やがて草千里の眺望も開け、値千金の眺めを満喫、ようやく元金を取り戻した気分となる。

一息入れて、山頂火口へと向かう訳だが、ここで注意しないでほならないことがある。

一昨年のことだった。ごった返す登山客の車の行列に従って行ったのはよかったが、つい手前の食堂街の駐車場の料金所の行列の中に上手に誘い込まれて、「シマッター」と思っただが跡のまつり、数珠つなぎで引返しもならず、心ならずも

高い駐車料を払わされ、不味い(まずい)中食を注文する羽目になった苦い思い出があらためて思い出される。

桑原クワバラ、二度とその手は喰いませんよと、左の窓辺の駐車場へ、「アカンベー。」 走る約二軒米(キロメートル)、遂いに山頂火口行のケーブルカー発着所へと着く。ところがここで、老人二人又もや立往生ならぬ一悶着が起きるのである。

火口縁まで歩いて行く人が一人もいないのである。

当然の如く、ケーブルカーに乗るものと定めてあるかの様だ、でなければ乗用車の乗入れに限定されている。

立て札の横の番人共は、「銭々々々。」

あまりの浅ましさに、労弁慶、怒髪天を突く勢いで、「阿蘇を焚いてる者は誰れかし アレは確か地獄の釜焚共の筈 お前達が金をほしがるのは筋違いじゃろがァー」……と文句をつけようと張切るが、「もうよさんねー。」

と女房にたしなめられて、正気に還る。

「アッ！ ウン。車を降りてケーブルにするーそれとも車を走らせか。」

「この儘、車が早かよ。」

の女房の声に励まされ、右手の料金所へと、車を廻す。

「いくらだぁー」と労弁慶はいつも渋賃である。

「へい、五百四十円でェー」

「何で四十円の半端がつくとー。チョッキリ五百円に負けんねー。」

「町の定(きまり)なんです。消費税も入っとりますモン。」

「畜生、おもしろくもない、横の女房も身を乗り出して、「帰れりも取るとねー。」と、思はず口を出す。考えてみれば道路を走るだけで再三お金を支払って来ている、女房にしてみれば、「又かァー」の思いに違いない。」

「この小父さん、気が小さいのか、気の毒そうに「いや、往復分でございます。」といやに丁寧だ。」

「こうでられては仕方がない、「お母ちゃん、五百四十円だと。」

「親父が親父なら、女房も四十年のキャリアがある。何時の間にか馴らされて仲々芝居がうまくなっている。」

「小銭をチャラチャラと鳴らして、十円足りぬと言ひ、相手のおぢさんをハラハラさせておいて、夏目漱石(せんえんさつ)がようやく顔を出す。」

「気の毒そうにしていた小父さんの顔が、「パッ」と輝く、気持ちには「お釣りは不要よー」と、がっちりとお釣りを受け取り、ハイスタート、車は排気を噴き、一気に頂上へ、五百米足らずの舗装路だ。「アッ」と云う間もなく、到着、煙の如く消え去る貳百七拾円、云い得て妙である。」

山頂にたどり着くと火山特有の亜硫酸ガスがあたりをただよう。

「スピーカーが繰返し、注意をうながす。」

「登山客の皆様、只今、アリユウサンガスが発生しています。ぜん息、心臓の悪いお方は、火山口へ近付かないで下さい。」

「何に！ 馬鹿にするな！」思はず癩癩の虫が破裂しそうだ。

「何故下で止めぬ。」

「やっとここまでたどり着いた者に、こんな案内があつてたまるものか、しかもこの案内は韓国語も中国語も英語も、どこの国の言葉も発していないのである。」

「これだけ銭を取っていないながら、なんて失敬な奴らだ。」

「周辺に中国語らしき集団が見物に来てゐる。その集団に向かって、山頂の物売りのおぼちゃんの、手慣れた声が聞こえてくる。」

「昨日から待っていたとよー。」

「そして、あたり構はず火口の深さ、広さを、得々と話す、その集団は「ニン」として聞いている。」

「飛び込んだ人は、まだ一人も助かった人がなかけん。ハッキリしたことは判らん。バッテン、深さは六糎米(キロメートル)位あるそう、石を投げ込んで音の反響で測るとバイ。」

とまるで自分が投げ込んで、測って来たかのような話しぶりである。

「一度ためしに飛び込んでみんネー。貴重品は私が預かってあげるけん。」

とくると、お客は「ドゥー」と大笑いの筈だが、この集団から笑声がわいてこない。

売子のおばさん、ハテナ???…

「ワツハハハー、おばちゃんこの人達は、中国の人バイ。

通訳さんが一人判ただけタイ」によりやく事情が呑み込めて、「一寸も、日本人と変わらんもん、オカシカネーとは思っちゃったが。」と、一人芝居に、損したように言い、自分の商売に早変わり。

「昨日から待ったとよー。」

この様なお山である。

久し振に訪れた山は悠大だ、だが今日の阿蘇はなんだか様子が違う、おとなしく構へて、音もたてていない、「シーン」としている。

火口の中は、雨水の溜場になって薄緑色の湖と化し、水蒸気とも煙ともつかぬ気体がただよって、無気味な位に静まっている。

あの中国人の集団は、この阿蘇をどう受け止めたであろうか、私に判らぬ早口にまくしたてているチンペンカンペン、

察するに次の様な、会話ではなからうか?

「火口ちゃあーこげんかもんねー。たいしたことはなかったね。もちっと煙がふいとると思っちゃたとよー。」

「ホンニほんに、案内のブックには、モクモクと煙が登って、恐しか山の様に思ってた来たのにー、あん写真は、ウソじゃうたろかい、何だか、だまされたみたいねー。」と訳するならば…。

イソツプ寓話に盲の人達が、象をそれぞれ触り、その姿を語る話に通ずる。

似ても、似つかぬ姿の山が、展開することであろう。

今日の中国人の登山客の期待に應えてくれなかった、あそはひらかなで書こう、怒れる時に阿蘇と冠そう。

頭を廻らせば、焼けただれた岩肌は惨として、聖書申命記第九章、第十章の十戒の光景の思いが浮ぶ。雷鳴轟き、暗雲垂れこめ四十日四十夜の苦しみの祈りが映る。

エジプトの地を出て、ようやくこの地に留まるに、四十年、荒野をさまよい、神の御声に従うも、神の恩愛に感謝と背信の日々が続く、指導者モーセをしても悩み給うたであろう。

四十日四十夜の祈りに、主は契約のしるしとして、神の火矢もて書かれし石板二枚を授け給ひしとき、主はいわれる。

「モーセよ、山を離れよ！お前がエジプトから導き出した民は悪を行なったからである。彼等は、わたしが命じた道を

早くも離れて、鑄た像を自分たちのために造った。」さらに主はまた言われる。

「この民を見るのに、これは強情な民である。わたしを止めるな。わたしは、彼等を滅ぼし、彼等の名を天の下から消しさらん。」

主の御言葉に、身をひるがえし、急ぎ山をかけ下りぬ。

モーセ下りて見れば、四十日四十夜の祈りむなしく、酒池肉林の有様、偶像を鑄て主の道はずれる様に、神より戴き給ふ契約の石板二枚民衆の前にて、粉々に砕き給えり。

しかる後、モーセ、イスラエルのため、さらに四十日四十夜、主の御前にひれ伏し、祈り給いぬ。

その間パンも食はず、水も飲まず、これはあなたがあが、主の前に悪を行ない、罪を犯して主を怒らせたすべての罪に由るのである。そして、わたしはさきにひれ伏したように「主なる神よ。」

翻えて、近日、忍びよる世情不安、末世的天候の異変、樂觀的材料は何一つとてない。こんな世情に、刹那的感情がはびこる。浅ましき所業、正にエジプト脱出から四十年の姿が彷彿と浮ぶ。

誰れぞ日本のモーセたる人、おはさぬか、再び神の恵を受けることが、出来るであろうか。

神より出ずる、御言葉を印す石板二枚を、その石板を納める木箱を、私奴に作らせ下さいと願ひ出たい気持である。気が付けば、はや、日は西に傾き、下山の刻である。

中秋の顔で迎え入れたスキの穂は、この夏の終りを惜むかのように、ザワめいている。阿蘇山は、エネルギーの漲る山である。

詩篇第一〇四篇三二節

主が地を見られると、地は震い、山に触れられると、煙をいだし。

青白き炎と、凄音をこだまし

夜空をこがし、力を示す。

いくたび登っても、「いいなあー」

どうか主の栄光が、とこしえにあるように、主がそのみわざを喜ばれるように、主に感謝して山を降る。



「信仰と葬式」 (新聞投書で問答)

久保田 宮子

毎日、九七・一〇・二四

「私だけクリスチャン」 (久保田宮子)

「信仰はお金に左右されるもの？」の投稿を読んで、私の感じたことを言わせていただきます。

実は、私は家族の中でただ一人クリスチャンです。夫は何の信仰もありません。無宗教です。すべてうまくいってありますが、葬式のことだけは意見が違い、困っています。

私はクリスチャンになったことは本当によかったと自負しておりますが、夫は自分が死んだら盛大に仏教で葬式をしてほしいと子供たちに申しております。

私はただ神に祈るだけと信じています。そのうちに、家族全員で日曜礼拝をささげることができるよう、祈らずにはおられません。

もしも私が死んだ場合には絶対教会で葬式をしていただく覚悟しております。もうすでに、教会のなかに立派な納骨堂ができています。

たまに仏教の葬式に出席することがありますが、何を言っているのか、仏教語はさっぱり分かりません。おわり

毎日九七・一〇・一九

「信仰はお金に左右されるもの？」 (Yさん)

―― (前略) ―― 自分に宗旨を持っていても、結婚すればどちらかの残された方のお寺で、葬式を出されるのも理解できません。キリスト教徒の友人が亡くなった時、配偶者の家のお坊さんが呼ばれました。クリスチャンの信仰はどうなるでしょう。

また、屋根がわらを寄付しなければ葬式を出してやれない、と言われた話もあります。本来の信仰の姿とは、何なのでしょか。おわり

「ゴミゼロの日」にささげ

伊規須 太郎

明るい沢見をつくる会／すこやか青少年部会員

「プレス530」第四号で取り上げていただいた

「おそうじだいすきおじさん」です

ゴメンなさい 毎日毎日ゴミが出てしまう
収集に出すたびに頭をさげる

環境事業局の皆さん 毎日ご苦労さまです
ゴミ収集の無くなった町なんて 考えられません
有り難うございます よろしくお願いします

これだけのゴミがどこへ行ってしまふのだろう
どんなに皆さんにご苦労をかけているだろう
どんなに地球をよごしているだろう

もっと少なくする工夫をしよう
もっと小さくする工夫をしよう
もっと扱いやすくする工夫をしよう

もっと資源を生かす工夫をしよう

僕たちも 町をキレイにしようね

一緒にお掃除しようね

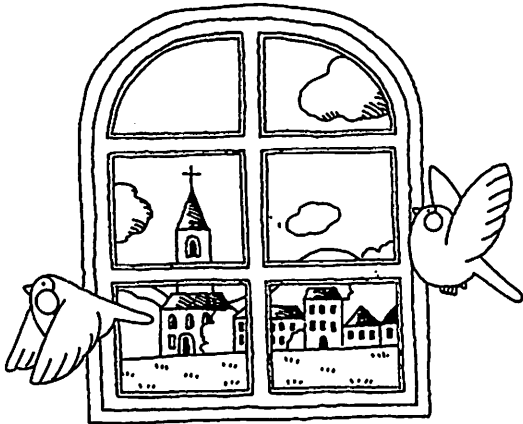
拾ってみると もう捨てられないよ

僕もそうだった

このゴミ一つが僕の生き方を変える

世界のこと地球のことをわかってくる

(環境事業局広報紙より)



表彰式

伊規須 太郎

金メダルに泣いている 叫んでいる

喜んでいる 抱き合っている

国旗があがる 国家が流れる 世界中が見ている

しかし記録は破られるためにある

天の表彰式では

遙かにまさった永遠の栄光がある

※国旗は「主はわが旗」(出エジプト一七章)

※国家は「小羊の歌」(黙示録一五章)

※観衆は「信仰の義人たち」(ヘブル一二章)

我らはどれほど 感泣し喜び踊り 歌い叫ぶだろうか!

その時まで 信仰のたたかいを 立派に戦い抜こう

目標を目指して走ろう

モーセは 八〇歳で召されて一二〇歳まで用いられた

「老いさき短い」かどうかは 誰にも分からない

しほむことはない 使命があるあいだは支えられる
日々 主に従い 待ち望むのみ

(注) オリンピックで日本選手が連日金メダルを獲得

(一九九八年二月二一日作)



片付け

伊規須 太郎

彼女が出て行ってから 一年がやってくる
ひたすら片付け・模様替え・改造に努める私
もともと工作はお手のものだ

着られなくなった衣類の山（注）！

見たこともない小物の数々！

靴箱の底には靴・靴・靴！

どこを見ても彼女の物ばかり

ホコリもヨゴレも……

バケツの濁り水も……

みんな涙腺を目掛けて攻めてくる

早く片付けたいが はかどらない

（注）在宅介護の終わりごろ、「適量」という観念がなくなつたか、彼女は肥満した。机のカドにメジャ



―を貼ってスカートを選別する。どれもこれも大幅
アウトである。

（一九九八年二月二一日作）

我が思い出(七) 旧満州(現中国)編

一、食事当番

鈴木 一幹

夜の人員点呼時、中村兵長殿より「明朝から一週間、川上二等兵と鈴木二等兵は食事当番をせよ、わかったか」と命ぜられました。

食事当番の任務は一日中班内に勤務し、馬舎にも、訓練にも行かず、班室内および廊下の清掃、ペチカの灰捨ておよび燃し付け、食事の運搬、配膳および後片付け、食器の洗浄、食缶返納等の仕事がありました。

各班から二名ずつの食事当番兵八名は、舎内週番上等兵殿(中隊内の各班の交代制で上等兵が一名、一週間勤務する)の指揮に従いました。一行は第一班から出ていた中谷舎内週番上等兵殿の引率で、各班二名中一名が檜丸太の天秤棒を持ち、連隊本部横に併設されている炊事場に連れられ、炊事場から、食缶(アルミ製の蓋付大形バケツ)十六本を受領し、一個班二名で四本の食缶を檜棒で担いで運びました。雪道を兵舎まで約五百メートルを運ばねばなりません。積雪が凍り付き、滑りやすい道を食缶を担いでふらふら歩く姿は

異様に思えました。担ぐ前に皆がジャンケンを始めました。なぜだろうかと思っていると、勝った方が後を担ぐとのことでした。

私は川上君とジャンケンをし、負けたので前を担ぐことになりました。担いで歩き出すと、中身の入った食缶の重さが右肩に食い込み、引っ張るように歩かねばならず、ふらふらと真直ぐに進めず、これは確かに前担ぎより後担ぎの方が幾分楽かなと思いました。

一行は一列になって週番上等兵殿の引率で歩きました。約二百メートル位進み、道路の四つ角の近くに差しかかりました。その時前方から、他の中隊の週番士官殿(少尉)がこちらに向かって来られるのに出合いました。一行の先頭に居て引率の中谷週番上等兵が直ちに次のとおり号令をかけました。

「歩調取れ」「頭右」



と言って歩きながら挙手の敬礼をし、我々初年兵は食缶を担ぎ歩きながら顔だけを週番士官殿に向けました。週番士官殿も我々に対し挙手で答礼をされました。中谷上等兵殿の「なおい」の号令を聞き、通り過ぎようとしたとき、「おい、とまれ」と週番士官殿が我々一向に停止を命じました。一同は食缶を担いだまま停止しました。すると週番士官殿は、最後尾で食缶を担いでいた第一班の後担ぎの当番兵に「貴様の口から何かぶら下がってるぞ」と注意されました。先頭で引率していた中谷上等兵殿が急ぎ足で戻って来て「申し訳ありません。以後嚴重に注意します」と答えると、「貴様からよく注意しとけ」と言って足早に立ち去りました。

中谷週番上等兵殿は、「貴様は運搬中に食缶から盗み食いするとは何事か」とどなり付け、同時に平手打ちが頬に飛びました。その瞬間に担いでいた棒が肩からはずれ、食缶四本とも雪の中に転がりました。四本の食缶中、飯の入った食缶二本と副食一本は蓋が取れずに中身もこぼれなかつたのですが、味噌汁の一缶だけは全部こぼれてしまいました。一同どうなることかと心配しながら帰隊しました。中谷上等兵殿は、各班に分配の時、第一班の汁を他三ヶ班の汁から間引き補充をし、無事に配分を終えました。一時はどうなることかと思っていました。やっとほっとして川上君と我が第四班を持ち帰りました。

彼が食べていたのは副食の玉葱の掻揚でした。また担ぐ前にジャンケンをしたことも、なるほどなあ、と分かる気もしました。

夕食も終わり、食器の洗浄をしていると、中谷週番上等兵殿の声が出て「食缶返納、食事当番集合」とのこと。

食缶の洗浄もあわただしく済ませ、川上君と四本の空食缶を持って中隊前に集合しました。

日はとっぷり暮れて、外灯をたよりに歩きました。雪は小降りでしたが、防寒帽の垂れを下げていたのでそれほど寒くは感じませんでした。やっと炊事場に到着し返納口に食缶を返納しようとした時、窓の中から炊事係の上等兵殿が「食缶の蓋をはずした中を見せろ。合格した分は引き取るが、不合格の分は洗い直せ」と言われました。

川上君と私は四本の食缶の蓋を取って見せましたが、四本中飯を入れていた一本のみが不合格で飯粒の固まりが付着していました。

これを見た炊事係上等兵殿は「お前等二人、この返納口に食缶の代わりに頭を出せ」と窓の中から言われ



ました。二人は致し方なく、恐る恐る頭を前に付き出ししました。すると、まだ飯の付着している大形のシャモジで防寒帽の上からなぐり付けられました。「申し訳ありません。直ぐ洗い直します」と言って、建物横の流し場に行きました。

そこには既に不合格になった他中隊の食事当番兵が居て、ごった返し、一本の水道蛇口に何人もの兵が集まり、到底すぐには洗えそうにない状態でした。しかも冷水ではなかなか固まり付いている飯粒は取れませんでした。その時横で「兵隊さん、一円で食缶洗ってあげるあるよ」と言っていて沸きたての湯の入った大薬缶を持った苦力（クーリー、満州人の労務者）が私の腕を引っ張って言いました。私は川上君と顔を見合わせ、ポケットから一円出して与え、洗浄を頼みました。

彼は一円を受け取ると「謝々（セイセイ）」と言って、ポケットからタワシを取り出し、薬缶の熱湯を食缶に入れ直ぐに洗浄しました。熱湯で洗ったので直ぐにきれいになり、誰よりも早く返納することが出来ました。内地から入隊の時に持参した金は五円でしたので、あと四回たのめば無一文になるわけです。一同集整合整列し、帰隊の途中、外灯の下を通過する時、川上君の頭を見ると防寒帽のてっぺんにご飯粒が真白に付着しており、自分に付いているのも忘れて一人苦笑しました。その後も食缶返納の度に何人かが不合格となり、その都度満人苦力に一円支払って洗ってもらっていたようです。

古兵殿の話では「あの苦力等は炊事場のボイラー用の石炭運びや雑役のため炊事係が雇っている人夫で、給料が安いので炊事係の連中が彼等にアルバイトをさせてやろうとの配慮から、食缶返納時の検査を厳しくし、彼等の臨時収入に協力しているのだ」とのことでした。

二、怒鳴ったら相手は兵長殿

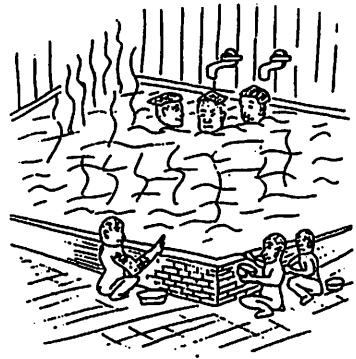
風呂にはなかなか入れなかったが、今日の午後の訓練が早く終わったこともあって、久し振りに風呂に行くことになった。炊事当番兵を残し、初年兵全員、中村兵長殿の引率で中隊前から二列縦隊に並んで歩きました。手にはそれぞれタオル一本持っているだけで、石鹸、カミソリは持参しませんでした。それは身体から油気を除くと凍傷にかかりやすく髭も剃らぬが良いとのことで、ただ湯につかることを目的としていました。

途中で他中隊の上等兵や、一等兵にすれ違っても、中村兵長殿の引率のため、相手の方が先にこちらに敬礼して通り過ぎるため、小気味よく風呂場に到着しました。

脱衣場には左右の壁側に仕切棚がついていたが、先客のためほぼいっばいになっていたので、脱衣篋を使うことにした。下着は着替えて来たので、他の兵に見られても心配はなかつ

た。

浴室に入ると皆裸であるので階級がわからず、相手が古兵でも敬礼をする心配もなく、一同は桶を持って浴槽に近づき、湯を汲み身体にかけたが、少し熱いなと思いました。浴槽の奥には五・六人の古兵が頭をタオルを乗せ静かに漬かって



々は中に入ろうとしましたが熱いので入れないでいると、トビ職だったという威勢のよい緒方君が、浴槽の奥で漬かっている古兵殿に向かって「おい湯が熱くて入れん。貴様の横にある蛇口を開けて水を出してくれ」と言いました。しかし古兵殿はじっとして動こうとはしなかったので今度は「うめろと言おうろが、聞こえんのか」と怒鳴りました。すると古兵はしぶしぶ蛇口をひねり水を出しました。

しばらくして皆はやっと浴槽に入りました。私は暫く湯に漬かった後、浴槽から上がり掛り湯の方に行き、椅子に腰掛け、蛇口から掛り湯を出そうと前のカランを回した時、いきなり上部に付いていたシャワー口から冷水が飛び出し、私の

頭や肩にかかり一瞬冷たさに「ヒャー」と声を出しました。その時丁度後ろを上り口に向かって通っていた古兵殿の上半身にもかかってしまいました。しまったと思ひ、カランを元に戻し後ろを振り向くと、なんと浴槽の中でしぶしぶうめ水を出した古兵殿が私をにらみ付けているではありませんか。私は「どうもすみません」と言って頭を下げました。「ばかやろう、気を付けい」と言って上って行きました。私も拭き終わり、緒方君等を脱衣場に上り衣服を着ようとしてひよいと横を見ると、さっきの古兵殿が上着を着るところでした。そしてその時衿章を見て驚きました。その古兵殿の衿章は



なんと兵長でした。これはしまったと思ひ、急いで私の横に居る緒方君の腕を引っ張って再び浴室に引返しました。緒方君にも引っ張った理由を説明し、しばらく掛り湯の腰掛けに腰掛け、後しばらくして戸口から脱衣場を覗くと、もう兵長殿の姿は見えなかったのでやっとの思いで再び脱衣場に戻りました。

初年兵一同外に出て整列し帰路につきました。身体は温ま
ってはいましたが、外の冷氣は肌を刺すようで防寒帽の垂れ
を下げてはいるが、出ている鼻頭が痛い、吐く息は白く霧状
になり、髭が白く霜が付いているようでした。

タオルをぶら下げて歩いていましたが、その内、棒でも下げて
いるように固く真直ぐになっていました。皆は鉄砲でも担ぐ
ように上を向けて肩に担いで歩きました。

三、一銭呼集

私の所属する内務班の第四班は第四中隊の建物の一審端に
あって、その先が一段下って下屋続きの別棟で、洗面所と便
所、洗濯場、物干場等になっていました。そのため他の班の
者が洗面所や便所等に行く時は、必ず当班の前の廊下を通ら
ねばならず、廊下と班室は扉や壁等の区切りがないので、班
内から廊下が丸見えで、便所等への通行には必ず挨拶をして
通っていました。

従って第一班の初年兵は大変で、第二班、第三班、第四班
と三か所で挨拶をしなければならなかったわけです。例えば
「第一班田中二等兵は厠に行くため通らせていただきます」
と言うと、班内から古兵が「よし」と声がかかり通っていま
した。中には「声が小さい、よく聞こえん。もう一度言うて

みよ」等とやり直しを求められることもしばしばありました。
また我々初年兵が便所等に行く時は廊下への出口の所で班
内に向かつて「鈴木二等兵は厠に行きます」と言うと同時に
室内に向かつて一礼して行っていました。また帰った時も同
様に、廊下で室内に向かつて「鈴木二等兵厠から帰りました」
と言って一礼して入っていました。

昨日から第四中隊の予備室が急に騒々しくなったよう
でした。朝の点呼後の班長殿の説明では「昨日午後、内地から
当連隊に甲種幹部候補生一行が一カ月間の予定で、現地教育
実習のため着任し、当中隊にも十名の候補生が配属されたの
で知らせておく」とのことでした。

そういうえば、今朝洗面所で見かけた数人の伍長殿は、服装
も新しく、襟に座金の星が付いていたのを思い出したが、そ
の方々の事だったのかと思いました。

いつもどおり馬舎での水銅飼付、馬糞捨等の作業を終えて
帰隊し、管内靴から上靴（手縫いの皮のスリッパ）に履き替
えている時、緒方君が「しまった、おれの上靴が無い。困っ
た」と言いながら、靴下のまま内務班室に帰って来ました。
この様子を見ていた陣内上等兵殿が「お前がぼやぼやしと
るけん、ギョされたとやろう（ギョされる＝盗まれる）困っ
たなあ」と言っていたが、「よし心配するな、おれが員数を
付けてやるでなあ」と言って、二階から自分の上靴を緒方君

に投げ渡しました。

緒方二等兵は「ありがとうございます。お借りします」と言って、陣内と名前の入った上靴を履きました。

夕食後、陣内上等兵殿が「緒方、これを履け」と言っていて、まだ新しい新品同様の上靴を一足緒方君に渡し、貸していた分と交換しました。そして「墨で早く貴様の名前を書いておけよ」と言っていて二階に上って行きました。

それから二日後の夕食後、中隊内に一銭呼集が掛かりました。第一班の方から「一銭呼集」との大声がし、二班、三班、四班へと連鎖的に伝わり伝達されました。一銭呼集とは、中隊内で所持品を紛失したり、また盗難等が発生した時に、中隊長の命令により中隊全員を各班毎に集め、被害者は各班を回って調べることに

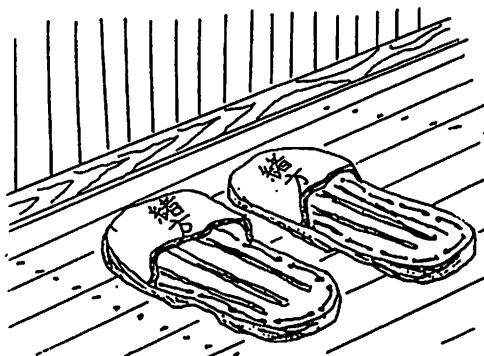


なっているものでした。第四班も一銭呼集の命により、佐藤班長殿が部屋の一番奥の窓側に位置し、全員が向かい合って寝台前に整列し、被害者が来るのを待っていました。その時

中隊付の山崎曹長殿が来られ「今度の調査品は上靴であるので、各自自分の上靴を履いて待つように」と告げて行かれ、私はその時、とっさに緒方君の上靴を見ました。驚いたことに彼がさっきまで履いていた新品の緒方と名前の書いてあった上靴が、いつの間にか再び陣内上等兵殿の上靴に代わっていました。そして陣内上等兵の姿が班内どこにも見当たりませんでした。

どうしたことだろうかと考える間もなく、廊下の方から眼鏡をかけた甲種幹部候補生の伍長殿が入って来ました。

そして、そのまま端の方から皆の足元を見て回り、自分の上靴が無かったのを確認すると、そのまま班内から廊下に出て行こうとした時でした。突然奥に立って一部始終の様子を見てい



た佐藤班長殿が「おい候補生、一寸待て。こっちに来て」と呼び止めました。候補生殿は振り返り、そしておそるおそる佐藤班長殿の近くまで進み寄りました。班長殿は次のとおり

注意しました。

「貴様は他人の部屋に入る時、何の挨拶もなく、また退室の時も何も挨拶をしなかった。気を付け、おそれ多くも陛下より軍人に賜わった軍人勅諭に、一つ軍人は礼儀を正しくすべしとあるのを知らんのか、知らぬとは言わせんぞ。貴様は甲幹で将来兵の指導に当たる将校になる身ではないか、軍人の基本の一つである礼儀についてよく反省をせい」と言うと同時に平手打ちを数発与えました。「我々は貴様のために大事な時間を潰し、甚だ迷惑しとるのだ、わかるか」「よし行け」と言いました。

候補生殿は「申し訳ありません。自分が悪くありました」と一礼して、そそくさと帰って行きました。

我等初年兵は一瞬の出来事を眼の当たりにして、同じ伍長殿でも我が班長殿の実力の程につくづく感心させられました。

消灯ラッパが鳴る頃（午後九時頃）、陣内上等兵殿が奉公袋を持って帰って来ました。「古兵殿は一銭呼集時には何処に行かれていたのでありますか」と川上君が尋ねると、「おれか、おれはなあ、馬舎に行っとったよ」「おれの馬の後右足の馬蹄が浮いていたので、蹄鉄工具兵にたのんで修繕してもらったよ」とのことでした。後で緒方君の話では、一銭呼集が掛かった時、二階から陣内上等兵殿が降りて来て、「お前の上靴をもう一度おれの上靴と交換しておけ」と言っ

て、緒方君の新品の上靴を奉公袋に入れて何処かに持って出で行かれたとのことでした。

四、演芸会出演

初年兵は毎日の激しい訓練で、身も心も疲れていました。夕食後の班長殿のお話では「来る土曜日、午後一時から恒例の中隊内、各班対抗による演芸会があることになった。当班の出演希望者は手を挙げる、誰かいなか」と言われました。誰も挙手する者がいなかったところ、佐藤班長殿は「石橋上等兵」「はい」「お前は例の歌でもやらんか、前回は三番じゃったが、あれから大分上達しとるじゃろう」と言われました。他の古兵達も「そうや、石橋上等兵、出たらどうや」とすすめ、結局出演することを承諾しました。次に、これも古兵達にすすめられ、野口一等兵殿が舞踊をすることに決まりました。それで二人が決まり今度は中村兵長殿が「おい初年兵、誰か出る者は居らんか。十二名も居るのだから一人位は何かやらんか」と言われました。この時私は、今度の演芸会に出演すれば中隊中に顔を覚えてもらえる良いチャンスかもしれないと思いました。

私は思い切ってひょいと手を挙げました。これを見た中村兵長殿は「おお鈴木二等兵か、貴様は何をやるか、歌か」と

尋ねられました。私は「いや、歌ではありません。落語をやりたいと思います」と答えました。すると佐藤班長殿は「お落語か、それは面白い。今まで中隊の演芸会に落語をした者は誰も居らんやった。これで三名になった。しかも歌と踊りに落語か、よし決まった」と大はしゃぎでした。

そして「よし三名は後でおれの部屋に来て、それぞれやって見せろ。中村兵長ご苦労やが世話役をやってくれ」と言って退席されました。班内は急に活気付き、賑やかになりました。川上君や初年兵達が「早く見たいなあ、鈴木君にはそんな芸があったのか。驚いたなあ」と話していました。

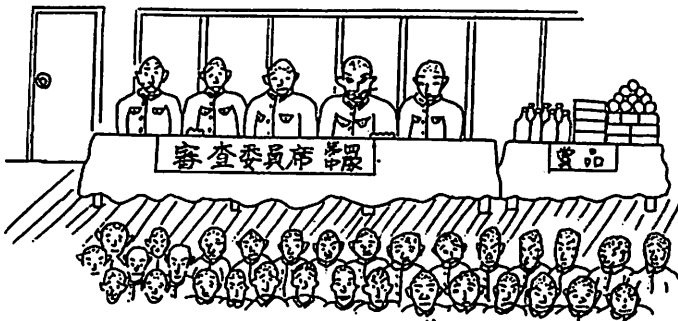
しばらくして三名は中村兵長殿に伴われて班長室に行きました。石橋上等兵殿の歌は、せりふ入りの「臉の母」で、野口一等兵殿の踊りは「旅笠道中」で唄は石橋上等兵殿が唄われるとのことでした。鳴り物なし、伴奏もなしで、二人共なかなか手慣れて上手でした。私の番に鳴り、中学時代にクラス代表で学芸会に出演した時の落語「ガマの油売り」を思い出しつつはじめました。班長殿始め、在室の古兵殿達が腹をかかえて笑っているのがよく判りました。佐藤班長殿が「なかなか三人共良くできた。おもしろいやなかか、よしこれならうちの班は今度は優勝間違いなしや」と言ってご満悦でした。そして「ガマの油の落語は羽織に袴が似合うと思うので、中村兵長、ご苦労やが金曜日までに東寧の町に行った時に借

りてきてやれ」と命じました。

そうしていよいよ土曜日が来ました。朝の点呼後、佐藤班長殿より「今日の演芸会は午後一時から行われるので、出演の三名は午前中の訓練には出なくてよいから、午前中、三人で充分に練習しとけ」とのこと、石橋上等兵殿以下三名は中村兵長殿に従って班長室に行き練習をすることになりました。私は中村兵長殿が東寧の町より調達して来た着物を着用し、刀は班長殿が大神少尉殿から借りた日本刀を使わせていただくことにしました。

会場は中隊事務所の大広間で、にわか造りの舞台が設けられ、引幕は窓用カーテンが張ってありました。今朝から各班の大工経験の兵が四名使役に出て用意したとのことでした。

野口一等兵は何処で用意したのか、三度笠に黒のマント、しかも脚半にワラジまで用意し、刀は石井見習士官殿から借用したとのことでした。



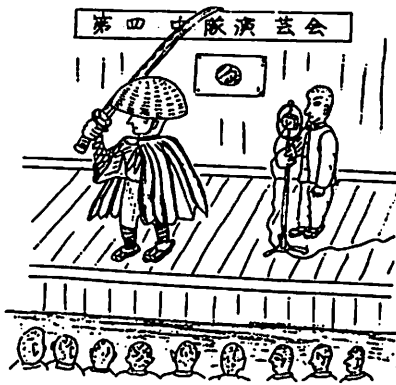
会場には既に各班毎に兵達が舞台前に座り、賑やかな話し声がしていました。

舞台の真正面には審査員席が設けられ、審査員には前田中隊長殿、大神少尉殿、宮崎少尉殿、石井見習士官殿、山崎曹長殿の五名がなつて居られました。

出演者は各班から三・四名で、全員で十五名、ほとんどが歌を唄いましたが、歌以外では私の落語と野口一等兵殿の舞踊と二班の一人で手品をやる人の三名でした。

プログラムに従つて開演されました。審査員席の横の机の上には入賞者への賞品や参加賞が置かれ、いやが上にも会場を盛り上げました。出演者には洩れなく賞品が与えられるとことでした。一番は他班の方の歌から始まり、石橋上等兵殿の順番は割りに早い方で、

唄い終わってから四班を中心にかなりの拍手がありました。中頃、野口一等兵殿の踊りが始まりました。勿論石橋上等兵殿の唄う「旅笠道中」の唄声に乗つて、マントを肩に掛け三度笠を被り、刀を差し、脚半にワラジを履いた姿が舞台に現



れると、会場の兵達から拍手と「待ってました」と言う掛け声が掛かり、何度もヤンヤの拍手が沸きおこり、終わつてもアンコールの声が続き、これは入賞間違いなしだなどと思ひました。私の番は終わりから三番目でした。

舞台の中央に机が置かれ、半紙と刀と私の所持品の薬のメソソレータムの缶一個が机の上に置かれていました。

幕が開けられ拍手の中、一礼の後早速はじめました。

和服の袂から紐を取り出し襷をしながら「さあさあお立ち会い、ご用とお急ぎでない方はそばに寄つて、とくとご覧じろ。ここに取り出しましたる缶入りのこの薬は、軍中膏はガマの油、そこいらにもここいらにもあるという薬とは、いささかその効用が違います。さてお立ち会い。このガマの生息するところは、ここより遙か北の国、手前が生まれ故郷は丹波の国は大江山の麓に生息しております。さあお立ち会い、このガマを四六のガマと言います。何で四六のガマと言うかと申しますと、前足の指が四本、後ろ足の指が六本あるから四六のガマと言う」と言いながら気分も幾分落ち着いてきたので辺りを眺めると、会場を埋めた約二百人の兵達は皆、かたずを飲んでじつと話に聞き入っていました。

審査員席では中隊長殿が笑顔で、しきりに右手に口髭を吸つておられ、その隣の宮崎、大神両少尉殿もびっくりした様な顔で聞き入っておられる様子でした。

私は更に話を進めました。「この四六のガマを捕え、四角四面の鏡の箱に追込みますと、鏡に写りし己が醜い姿を見て、タラーリ、タラーリと油汗を金網越しに下の器に受け取り、この油を柳の小枝で三七二十一日間トローリ、トローリと煮つめて作り出したのが、このガマの油。この薬の效能を申しますと、火傷、切傷、赤切れ、しもやけ、……（以下略）」と言って終わりました。その間約十分位だったと思いましたが。

会場の兵達や審査員達、皆割れんばかりの拍手が続き、笑い声の中で私の番は無事に終わりました。舞台の袖の方で心配そうに見守っていた中村兵長殿が、私の手をにぎり、背中をたたいて良く出来たぞ、良かったなあと涙を出さんばかりの喜びようで迎えてくれました。

全プログラムが終わり閉会式と審査の発表があり、審査員の山崎曹長殿より発表されました。

「一等、落語ガマの油売り、第四班鈴木二等兵」とのことです、思いもよらず驚きました。「二等踊り、旅笠道中、第四班野口一等兵および石橋上等兵」となり「従って本日の優勝は第四班である」と発表されました。

中隊長より賞品の授与があり、私には煙草（満州の極光という煙草）二十本入りを五十個、二等の兩人には羊かん二十本が、優勝の第四班には清酒（月桂冠）五本が代表の佐藤班

長殿に与えられました。

そして前田中隊長殿は全員に対し「本日の演芸会は前回より更に新しい芸や一段と磨きのかかった歌や踊り等、大変楽しい一時を諸君と過ごすことができた。これを機に更に明日から新しい気持ちで軍務に精励してもらいたい」と挨拶し、閉会解散となりました。

帰班後、第四班では夕食後消灯まで優勝祝賀会が開かれ、食卓の中央に私と石橋上等兵殿、野口一等兵殿の三人が座り、周囲に全員が座り、夜遅くまで賑わいました。私はこの時期までは煙草を吸っていなかったため、中村兵長殿より班内全員に一人一個宛配っていただきました。

それ以降中隊内では私を知らぬ者はいなくなり、他の班の古兵殿や下士官殿からも声を掛けられ「もう一度聞きたいよ」と言われる等、皆笑顔で話しかけてくれる様になり、また日曜日外出した時に買って来たからと言って、ロシヤ飴や飽頭等をもらう等、その反響は我ながら驚くばかりでした。

（以下次号）

わが定年退職の記

正野 眞宏

一 はじめに

私は、平成九年三月三十一日、北九州市役所を定年退職した。正式の定年は六十歳であるから、五九歳で辞めた私は正確には定年退職とは言えないのかもしれないが、管理職は再就職を斡旋するので早く辞めて欲しいという市の要請に応じたのである。これは選択というよりも、命令に近いものであり、事実上五九歳定年と受け取られているので、敢えて定年退職したと理解している。

私が入職したのは、昭和三二年九月二日であるから、三九年七ヵ月勤めたことになる。役所に入った時、二十年、三十年勤めている先輩たちを見て、よくも辛抱しているもんだと感心したものであるが、いつの間にかその年数も越えてしまった。

「光陰矢のごとし」、過ぎ去れば昨日のような感じで、感慨深いものがある。

今、ふりかえって、主がここに至るまで、実に懇ろに導いて下さったと、心から感謝している。定年退職を機に、主の

恵みを記録し、主を崇めたいと思う。

二 入職まで

〈大学進学の問題〉

私は福岡にある進学校と言われる高校へ越境入学したこともあって、当然、大学へ行くものと進学コースを選択していた。しかし、受験勉強をするにつれて、親に苦勞をかけてまでなぜ大学へ行くのか、その意味が分からなくなってきた。その疑問を解決することもできないまま、勉強にも身が入らず、ズルズルと月日が経ち、大学受験にも失敗し、浪人生活となった。当時は、予備校が整備されている今と違い、高校四年生格として別クラスで面倒を見てもらっていたし、浪人帽をかぶって自ら落第生のレッテルを貼るという日陰の人生だった。それでも、人より一年遅れたら、一年長生きすればいいのだと自らを慰めていたのを思い出す。そして、親の期待に比べて頑張ろうと思う一方では、悶々と自分の人生の進路を考え迷っていた。そういう風で、中途半端なまま再度受験したが、見事に失敗した。その頃、我が家の経済状態が悪くなったこともあり、これを機会に、私は一大決心をしたのである。もう、大学受験は止めよう、大学に行くことばかりが人生ではないはずだ。たとい大学へ行かなくても、立派に人生を送れるはずだ。人間にとって大事なことは、神様を

敬うことであり、立身出世や立派な家に住むことではない。たとえ工場の片隅で油まみれになって働く工具でも構わない、神様に従って人間らしく生きることが大切なことである、そう考えてそのことを両親に話した。私としては勉強が好きでないということもあるが、一生懸命働いている親を少しでも助きたいという思いが強かったと思う。両親は私に対する期待も大きかったようである。残念な表情を見せたが、許してくれた。

〈就職探し〉

それから、就職探しである。学校に頼んでみたが、卒業生まで面倒は見れないと断られてしまった。就職については、実は大学受験前に、親戚から八幡製鉄事務員の入社試験があるから受けてみないかと言われ、受験したことがあった。私としては自信があったのだが、これも見事に落ちてしまった。後で聞いたら、わずかな点数が足りなかったとのことであるが、神様の不思議な導きがあったと思う。また、Tデパートの入社試験があるとのことを受けた。一次試験は合格し、二次試験の面接に臨んだ。面接が型通り終わってから、面接官が私に「君はここには来ないほうがいいよ」と言う。私は働ける所であれば、どんなところでも構わないと思っていただけ、「ぜひお願いします。一生懸命働きますから」と頼んだのだが、結果は不採用だった。その面接官は高校の先輩だっ

たと聞いた。恐らく私の将来を思っただけの計らひだったのである。ここにも神様の不思議な導きを思うのである。

そして最後に受けたのが、八幡市役所であった。幸い一次試験をパスし、二次を受けたが、結果は補欠であった。つまり年度中に欠員が出れば採用されるが、無ければパーと言う訳だ。文字通り首の皮一枚繋がった状態である。不安ではあるが、待つほかない。それまで臨時職員として働きませんかと言うので、保健所の結核検診で各地域を巡回する仕事に従事することになった。

待つこと五ヵ月、遂に欠員が私の番まで回ってきて、その年の九月二日晴れて正規職員として採用され、同じ保健所に配属されたのである。

まだ高校生の時、福岡で行われた博覧会で、コンピュータによる性格診断と適性職業鑑定を受けたことがあったが、その時の適性職業は第一が教師、そして第二が公務員であった。それで思い出したが、高校の先生から教師にならないかと勧められたことがあった。その時、私は人前で話をするのが苦手なのでそれを断り、手に技術をと理科系を志望したのだが、見事に失敗したと言う訳である。

〈最下位人生〉

私は大学受験と就職試験を通じて五回も失敗し、たった一回しか通らなかつた。しかし、神様は私の特性をよくご存じ

で、私に一番適した仕事を用意して下さった。一勝五敗の最

下位人生だが、主によって最高の人生として下さったと思っ

ている。もう一つ、思い出すことがある。それは、私が臨

時職員として働くようになった時、「課長に頼まにゃきゃ」

と言つて、母が付いてきた。母は親としての当然の務めと思っ

ていたし、世間知らずの私は、そういうものか何の不思議

も感じなかったが、後で「自分は何十年も役所で働いている

が、たかだか臨時職員ぐらいで親が付いてきたのは初めてだ」

と職場の人から笑われたものである。小柄な母親の後から、

背の高い若者が不安気にノコノコと付いていく姿は、過保護

でひ弱な男の典型を見るようで、十分目を引いたに違いない。

このような気の小さい、頼りない私であった。こんな見込

みのない者を、この四十年、神様は色んな所を通して信仰の

訓練をしてくださり、職員としては最高の局長ポストまでな

らせていただいた。当時はとても考えもしなかったことであ

る。私は家内と結婚する時、神様には従うが、この世的な立

身出世はないからと断言したほどである。

神様は、「強いものをはずかしめるために、この世の弱い

者、……無きに等しい者を、あえて選ばれたのである」(第

一コリント一・二七)とあるように、意気地なしの者を用い

て、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、こ

れらのものはすべて添えて与えられるであろう」(マタイ六・

三三)との約束を成就して下さった。

決して私の能力ではない。石橋を叩いても渡ろうとしない

小心者、おそるおそるの信仰であった。このようなカラシ種

以下の信仰を、「煙れる灯心を消すことのない」主が懇ろに

導いて下さったと感謝するのである。

三 四十年の職歴の概要

私の職歴を経験順に整理すれば、次の通りとなる。

保健行政(主として母子保健) 十四年

児童福祉行政 三年

産業医科大学設立準備出向(東京) 四年

生活保護行政 八年

同和行政 二年

障害者福祉行政 四年

高齢者福祉行政 三年

地域福祉(社会福祉協議会出向) 二年

市役所の業務は、市民の生活全般にわたるので、働く分野

が民間よりも非常に広いという特性がある。産業医科大学出

向が終わる頃、市役所を辞めてこのまま大学に残ってくれな

いかと頼まれたが、いろいろなことが経験できる市役所の魅

力に未練があり、お断わりしたことがあった。

市には代表的な戸籍や税金関係のほかに、環境、建設、経

済、病院、交通、消防、港湾もあり、局の数が二五ぐらいはある。ところが、私はその内の保健局と民生局の二つしか経験していない。しかもこの二つは統合され、保健福祉局となったので、実質一つの局で終ったことになる。特に民生では福祉六法といわれる全部を経験した。つまり民生局が入っている本庁九階をほぼ一回りしたことになる。私自身、あそこにいきたいという異動希望はほとんど出さず、神様の導かれるまま任せたこともあるが、こういう偏った人事は極めて珍しいことである。しかし、実に楽しい役所人生だった。さて、四十年のあゆみ全部を書き表わすことは難しいので、印象に残っていることだけを記すことにする。

四 生活保護行政

昭和五三年四月、産業医科大学出向が終わり、市に帰って最初に配属されたのが、八幡西福祉事務所管理係長だった。三年の後、民生局保護課医療係長に異動するのだが、一貫して医療扶助を担当した。

〈本市の生活保護行政の状況〉

当時の生活保護行政はまだ混乱期にあり、全国平均よりも際立って高い保護率の適正化を図る渦中にあった。昭和三十年代、石炭産業の衰退や鉄鋼不況等が影響して被保護人員が急増し、これに合わせて、被保護団体による集団陳情の激化

等で、一時は六九%（人口千人中六九人）まで上昇した。このような異常事態を改善するため、保護の適正化に乗り出したのである。

私が本庁に異動した昭和五七年は、第二次適正化の端緒にあり、保護率は四四%で全国平均よりも三・六倍高い状態であった。関係団体の強い陳情攻勢は続き、福祉事務所における暴力事件も起こるなど、適正化は困難を極めていた。異動後しばらくして同和団体幹部の土地転がし事件が発覚し、また暴力団員の保護費不正受給事件が起き、マスコミに大きく報道され、市民の行政批判が集中した。

市では、これを機会に同和行政の見直しとともに、生活保護行政の適正化に向けて不正受給者の告発を含む厳正な処置に乗り出した。警察の協力を得ながら、職員一丸となって取り組んだ結果、保護率は徐々に低下し、現在では十%台までになっている。当時の状況からすれば、考えられないことで、感慨深いものがある。

〈医療扶助の適正化に取り組む〉

私は、保護費の半分を占める医療扶助の適正化を担当した。多額の交通事故賠償金を受けていながら申告せず、保護費を不正受給したという事件に関連して、入院していた医療機関の医療費不正請求事件もあった。大した怪我でもないのに、被保護者が賠償金を多く取るため入院したことし、医療機

関は入院費を請求したのである。立入検査といって警察まがいの事情聴取、事実関係を把握するために、不正受給した暴力団員を刑務所に行って接見したこともある。医療機関側が雇った弁護士とも渡り合った。そして、法に基づく処分をした。被保護者と医師が癒着した事件である。

医師と被保護者との関係では、特に栄養が必要な患者に支給される在宅栄養加算というのがあって、医師の診断書に基づいて一定の金額が支給されていた。この支給件数が全国平均からも異常に高いこと、特定の医師に集中していることから、この適正化にも取り組んだ。

医師が必要と書いているものを福祉事務所では切りにくいということがある。まず、医師会と協力して当該医療機関を呼び出し、本音の話をした。医師としては、患者のためになると思ってやっていることや頼まれれば駄目だとは言いにくい立場にあることなどが話されたので、そういう場合は加算が必要と書いてもよろしい、後は行政が医療扶助審議会の意見を聞いて主体的に決めることにしたいと話すとほとんどの医師は安堵したような表情を見せた。福祉事務所でも責任は本庁が取ることにしたので、安心して指導できるようになった。そういうことで進めた結果、支給件数は驚くほどのスピードで減少していった。その途中で何回か、加算を切られた被保護者から脅しの電話を受けたこともあったが、折りつつ

前へ進んでいった。

この他にも、長期付添看護給付や通院移送費の適正化にも取り組んだ。

生活保護制度は、国民の生活を守る最後の砦としてすばらしい制度ではあるが、性善説に立っているということもあり、人間は安きに流れやすいという弱さのゆえに、安易にこれに依存し、自立性を害なう一面もあることも事実である。それだけに、その運用を誤ると制度そのもの、引いては社会全体の将来にも影響を与えかねないものであり、行政の役割は極めて大きいと思う。要は、これに携わる人も、これを受ける人も、人間としてどう生きていくかという基本がはっきりして初めて、この制度が生きてくるのではないか。もっと言えば、人間は神様から創られ、生かされている存在であり、神様の前に平等である。生活保護を担当する人は神様の御用として携わり、これを受ける人も神様の導きとして感謝して受ける。すべてのことがそうであるように、それぞれが神様の前に分を尽くすところに、調和と平和があると思う。

五 同和行政

〈同和問題の認識〉

昭和六一年七月、同和保育担当主幹の辞令を受けた。

実は、それまで居た保護課のすぐ隣であり、この職務の難

しきは日頃から話を聞いて感じていた。市政の最重要課題ということもあって、歴代の主幹を見ると、そうそうたるメンバーである。弱虫の私にはとてもできる仕事ではない。担当することはないだろうが、もし担当すれば多分つぶれるだろう。だから、そうならないようにと願っていたのに、神様は皮肉なようにそれをせよと言われる。

当時の同和行政は、土地転がし事件以来、市は行政の主体性を発揮して適正実施を図るべく、「実施計画」を策定し、計画的に推進することとしていた。その中には廃止する事業もあり、これが難儀な仕事で、同和保育関係にも難しい課題が残されていた。

私はまず、同和問題とは何かについて勉強しました。本を読み、研修会にも出席して問題の本質を探ろうとした。

同和問題と聞くと、集団でやってきて糾弾するといったことが取り沙汰されて、怖いというイメージを持つ。私もその一人だった。しかし、勉強もし、地域の人たちと接するうちに、私の認識不足がはっきりしてきて、彼らがそういう行動を取らざるを得なかった訳が、少しずつ理解できるようになった。同じ人間として生まれながら、基本的人権を阻害され、就職や結婚などで差別されている。これは放置できない問題である。神様はこの人たちも愛しておられるのだから、自分でできることをしてみようと思うようになった。

〈同和保育に取り組む〉

そもそも同和保育とは、差別の結果、貧しさのゆえに教育を受ける機会を得られず、今日的な社会情報からも取り残され、保育環境も十分でない状況の中で、地域の人たちが子供たちには十分な保育と教育を与えたいという気持ちからできたもので、特別対策の保育所として整備された。それだけに、地域の人たちの同和保育所に対する期待は大きく、解放運動と相俟って、保育に対する考え方が地域側と保育所（行政）側とで違うことがあり、しばしばトラブルが発生した。同和担当主幹はその調整に当たるのが、主な役目であった。

異動後間もない当時の日記をひもとくと、次のような一文があった。参考までに掲載してみる。

「同和保育の関係で、いろいろと問題が起こっている。二つの団体の対立とその背後にある政党が絡んで、保育所が巻き込まれそうになっている。商業紙にも行政批判の記事が出た。本会議でも質問が出そうだ。

問題の中にあつて 悩んでいるわが魂よ

早く解決し 解放されることを願っているわが魂よ

あなたは自分のことだけを考えている

神があなたに期待し あなたを恵みの高みに

引き上げようとしている神の思いを忘れている

大事なことは あなたの思いではなく

神の思い如何である

見える結末ではなく 見えざる神の御手である

主はご自分の思いではなく 父なる神に従われた

それ故に 十字架の死をもいとわれなかった

問題の中にあつて 悩んでいるわが魂よ

深く 神の御旨にすべてを委ねよ

全能なる神は 一度でも失敗したことがあるうか

たとい政治的に大きな問題になつたとしても

世界の歴史を導かれた神なれば

恐るるなかれ おののくなかれ」(S六二・九・一)

私は何でも本音で行こうと思つた。その場限りの問題解決は本当の解決にはならない。しかし、それは勇気の要ることだつた。弱気になろうとする自分の心を奮い立たせなければならなかつた。団体との交渉の時、発言に対する追求に、思い切つて言えなかつたこともあつた。

そのような失敗をしながらも、今後の在り方を提言していった。しかし、それはこれまでの行政責任論に影響を与えかねないものであつた。私としては、このままの行政依存では地域の人たちの自立心を害なう、目覚めてほしいという願いがあつた。

保育所の保母は、専門性を生かし、地域の期待に應えて頑

張っている。しかし、問題の本質は違ふのではないか。子供は保育所が育てるのではない。親が育てるのである。親が保育所頼みではないけない。保育所は親が育つ手助けをすべきだ。親は子供を保育所に預け、自分は遊びに行つてゐるようでは、何のための同和保育か。私は同和保育所長会で説いていった。徐々に理解され、加配保母をクラスから外し、母親に接するようにした。そのためにカウンセリング研修も受けさせた。時代も、自立の支援とか一般との調和ということが言われだしたことも幸運であつた。

〈難問題の解決〉

この職にあつて、忘れられないことがある。それは同和施策の見直しの一つに、同和保育所に地域の人が雇用されている職を廃止しなければならぬことがあり、ある地域の保育所だけが残されていた。雇用は同和問題の内での最大の課題である。それを首切をしなければならぬのであるから難しい。地域の猛反発は当然である。このため、この問題は十年近く解決しないまま、引き継がれてきた。しかし、一般との均衡を考慮すれば、市民の理解は得られず、廃止すべきである。

私は何度も地域の代表と会い、話し合いを持った。このまま継続しても同和問題の解決にはならないことを話す。会長は少しずつ理解を示しながらも、現実問題として地域の人が職を失ふことや勝ち取つた権利が奪われていくことに対する

住民の反発がある。結局、住民全体の総会で論議するから、主幹が来て話してくれと言うことになった。

さあ大変なことになった。これまでそんな経験がない。この気弱な男に何ができるといふのか。局長は、ここで吹き上がるのと市政全体に与える影響が大きいので、無理をするなど言う。しかし、私はやるだけやらせてくださいと頼んで、係長と二人で行くことにした。

当日の夕方、職場の者に見送られて出掛けた。多分、紛糾するだろう。そうなれば、その日は帰れないかもしれないという覚悟であった。私は、会場に近い公園で、叫ぶようにして祈った、「主よ、私は今から出掛けます。どのような状態になるかわかりません。ただあなたを見上げます。イスラエルの歴史を導き、ダビデを困難から救い出されたあなたが、僕を導いてください」。

その時与えられた御言葉は、「あすのことを思い煩うな。あすのことは、あす自身が思い煩うであろう。一日の苦勞はその日一日だけで十分である」(マタイ六・三三)であった。そうだ、私は今日一日精一杯やれば良いのであって、後のことは神さまがなさること、こちらの手の内にはない。心配しても仕方がない。ただ任せて行くだけで。そう思うと、気が楽になった。

会場に着くと、すでに大勢の人たちが集まっている。多く

の強い視線が集中する。四面楚歌の渦中にポツンと投げ込まれたようで、心細くなる。誰も助けしてくれない。ただ神様だけが頼りである。開会が宣告され、私の出番となった。思い切って話そうとしたが、緊張してか、声が思うように出ない。いささか頼りない説明だったと思うが、事業の見直しの趣旨を説明し、理解を求めた。

さあ、いよいよ火の矢が飛んで来るぞ、と身構えたその時に驚いたことが起こった。副会長が立ち上がって発言した。「今晚は会長は都合で出席できないが、言伝があった。それは今日まで頑張ってきたが、状況も変わってきており、これ以上やることは得策ではない。主幹も来て頼んでいるのだから、ここは引くべきだと考えていると言うことであった」。

会場から反発が起ころうと思いきや、会長がそういうなら仕方がないと、それで治まってしまった。その間わずかに二十分。これまで十年近く解決できなかった問題が、二十分で解決した。私はしばらくその場を立てなかつた。涙が出るような思いだった。後で聞いたが、その夜は、名立たる闘士が、急な用事ができたり、病気であったりで来れなかつた、もし来ていたら大変だった、主幹は付いているとのことであった。しかし、私はそうではない、神様がそこまで届いてくださったのだ、そして会長と住民の皆さんの心を導いてくださったからだということがよく分かっていた。

このことを通して、私は、神様の導きに従っていきさえすれば大丈夫だ、見えるところは困難があり、不安に思えても、とにかく行けるところまで行けばよい、倒れるなら倒れるところまで行けばよいのだ、後は神様がやってくださる、そう思うようになった。

六 障害者福祉行政

次に辞令を受けたのが、障害福祉課長である。これもまた、すぐ隣の課であった。後で聞いた話であるが、前任の課長が昇任することになり、後任をあちこち当たって探してみたが適当な人がいない。ふと横を見ると、いたいた、福祉に詳しいのが、灯台下暗しとはこのことだ、という訳で私にお鉢が回ってきたらしい。便利屋みたくに使われる私は、喜んでいいのか、悲しむべきか分からないが、これも神様の導きと信じて、取り組むことにした。

この時に与えられた御言葉は「主の道を備えよ、その道筋を真つすぐにせよ」(マルコ一・三)であった。大役で足がすくむ思いであるが、私のすることは、主の業が行えるように、主との道筋を真つすぐ備えることだけである。そうすれば、後は神様が責任持って業を行ってくださるのだから、このことを私の基本姿勢とすることにした。

〈重度障害児にショック〉

まず障害者を理解する必要があるとのこと、最初に案内されたのが、重症心身障害児施設「やまびこ学園」であった。ここには重度の精神薄弱と重度の肢体不自由を重複して持つ最も重い障害児が入所している。ここでのショックは忘れられない。同じ人間として生まれながら、あまりにも大きなハンディキャップを負わされて生きなければならぬ。「神の栄光の現われるため」ということは知っているが、この時ばかりは疑問符がついてしまった。中には無脳児といって、医学的管理を受けながらただ息をしているという子供もいた。何の楽しみがあるというのか。私は胸が詰まってしまった。我々が住んでる同じ地に、このような歩くこともできない、ものも言えない子供がいたとは……。頭をガンと殴られた思いだった。

後日談だが、新任の局長が来た時、一番にここに連れてきた。その時、局長は絶句して「おまえの神様が愛なる方だと言うなら、どうしてこんな不幸な子供がいるのだ」と詰め寄せられた。私は答えに窮し、「私は神様ではないから分からない」と答えるしかなかったことがあった。

私はベッドに横たわる子供に語りかけたが、何の反応も示さなかった。横にいた職員が手を握り、名前を呼んで語りかけると、かすかに反応したようだった。生きている！この子

は意志を持って生きているのだ。私は、神様が与えられた命そのものに触れたような思いがした。そして、多くの人に支えられながらも、懸命に生きていくこのような障害者のために働かせてもらえる有り難さを思うと同時に、その責任の重さをズシリと感ぜざるをえなかった。この時の思いが、障害福祉課長としての出発点になった。

〈障害者施策は幅広い〉

障害者といっても、その範囲は広い。大きくは身体障害者と精神薄弱者（知的障害者）に別れる（最近はこの精神障害者が加わった）。身体障害者は、更に肢体不自由、視覚、聴覚、音声言語、内蔵機能障害等多岐にわたり、重さに応じて等級が決められている。施策の範囲も、生活支援から、教育、雇用、社会参加、スポーツ、街づくりなど文字通り揺りかごから墓場までの生活全般に亘るので、実に多い。正確な数を把握したことはないが、自分たちは除夜の鐘と同じ百八あると言っていた。これだけあっても、まだまだ十分とは言えず、障害者からの要望も強いものがあつた。毎年、新規事業の取り組みがあり、職員も増えないので、みんな連日遅くまで働いていた。

〈議会答弁に苦勞〉

ここでの印象は、議会関係で苦勞したことである。障害者

問題は福祉の原点といわれ、与野党共に関心が高く、選挙公約にもなっていたので、議会での質問が多かった。本会議で十数回一度に出て、徹夜で答弁書づくりをしたこともあつた。本会議は市長や局長が答弁するので、我々は答弁書きで終わるが、委員会となると、一義的に課長が答えなければならぬ。本会議では事前に質問が出され、じっくり考えることができるが、委員会では何が飛びだすか分からない。したがって、何を聞かれてもよいように、事前に資料を揃え、勉強していなければならぬ。学校時代の試験の比ではない。失敗は許されないのである。しかも議員の追求は厳しい。それは緊張の極みであり、物凄いプレッシャーとなる。

私がいる時は、今のように高齢化問題が関心事となつておらず、障害者問題と生活保護が双壁であつた。ある時の委員会では三分の一ぐらい質問が集中し、ほとんど立ちっぱなし状態だつたことがある。そういうときは頭の整理ができないまま、「その件につきましては」と言いながら、手の方は資料のページをめくっているとといった風で、まさに綱渡り答弁である。これもコツがあつて、一度に全部を答えると、二の矢、三の矢が来るともう何も答えるものがなくなるので、少し取っておかなければならない。それともう一つは、心をこめるといふことである。同じ答弁でも冷たい言い方をすれば、必ず反発がある。野党といえども市民の代表である。立場や

考えを理解しながらも、できない理由を述べなければならぬ。私は決してうまい答弁ではなかったが、心がこもっているといわれたことがある。祈りながらの答弁ではあったが、そういうことでどれだけ守られたことであろうか。

七 高齢者福祉行政

〈市政の表舞台へ〉

平成四年四月、私は昇任して、社会福祉協議会事務局長（民生局参事）に出向した。これからの福祉は、住民自らの福祉活動が大事になると、張り切って住民による支え合い活動の取り組みを始めていた矢先の一年後に、高齢化社会対策室長の辞令を受け、本家に呼び戻されてしまった。本市は全国平均を上回るスピードで高齢化が進行しており、高齢化対策が市民の市政要望の第一位を数年占めている状態で、市政の最重要課題となっていた。ちょうど、高齢化社会対策総合計画を策定したばかりで、これを実施に移す重要な時期であった。いきなり衆人環視の表舞台に引き出された感じである。注目されるのが苦手な私の性格には合わない、と、神様に文句を言いたくなる。

再び当時の日記を開いてみよう。

「『先生、わたしたちは死にそうです』『あなたがたの信仰はどこにあるのか』（ルカ八・二四〜）

◎高齢化社会対策室長の内示を受けて、自分にはできないというろたえているわが魂よ、

なぜ、あなたは弟子たちと同じように『私たちは沈みそうです』と言うのか。主が共におられるのに、なぜ、自分の状態ばかり見て、ことを決めようとするのか

◎主は言われる『あなたの信仰はどこにあるのか。私は死んだ神であると言うのか』と。（日五・三・二六）

「『あなた方の手で食物をやりなさい』（同九・一三）

◎五千人の人に食事を与えよとは、無理難題な。主がこんなことを言われた真意は何だろう。

◎もしかししたら、あなたの持っているその信仰で、このことをしなさいと言われたのかもしれない。主は、弟子たちの信仰をもう一つ成長させるために、そのチャンスを与えられたに違いない。

◎とすれば、今も同じではないか。今私は高齢化社会対策室長として難しい役に取り組もうとしている。主は信仰持ってやってご覧なさいと言われていると思う。

◎私達はなかなか自分から信仰を働かせようとしなない。だから、主はそのような環境（チャンス）を与えてくださるのであろう。

◎もう一つは、これくらいの信仰では何もできない、自

分は信仰がないと思って、働かせないことが多い。いやその信仰には大きな報いが伴っており、働かせれば、こんなこともできるのだよをおっしゃっておられるのだ。

◎そうだとすれば、今ここで臆してよいだろうか。与えられている信仰を大いに働かせていきたい。」

(H五・四・二)

〈高齢者福祉の取り組みと挫折〉

このようにして、御言葉に導かれながら、正野丸は船出した。しかし、その航路は決して順調ではなかった。

高齢化社会対策は市を上げての事業である。市長は局の垣根を越えろと言うが、現実には縦割り意識は強く、他局に亘る調整は困難を極めた。特に民生局と保健局の統合は簡単には行かなかつた。相手局の局長から立入禁止を受けたこともあった。対内折衝だけでなく、対外的にも要求に対する対応があり、政治的に動かねばならない時もあった。この世の駆け引きとくに疎い私には、重い仕事である。うまく行けばよいが、行かないことが多い。実力以上のことをやらねばならぬつらさに、ついつい、モーセと同じように「私一人では、このすべての民を負うことはできません。それは私には重すぎます」(民数記十一・十四)と愚痴も言いたくなる。こんな泣き言にも、主は真実に聞いてくださり、「今の道を耐えがたく思うのは、わが愛より離れしゆえなり。わが愛におれ」

と、その都度励まされ、力を与えられてきた。

このようにもがきながらも、全国に先駆けて「住民との協働による新しい地域福祉システム」の構築や「年長者相談コーナー」も少しづつ動きだした。

本市の取り組みは市民にも評価され、NHKでも取り上げられて全国放送された。各都市からも視察が相次いだ。全国に情報発信しようと本市の取り組みを本にして発売もした。

高齢化社会対策は、単に高齢者福祉対策だけではなく、基本は行政と住民が協力してシステムをつくり、すべての人にとって住みやすい街づくりを進めることにある。私はその基礎づくりをさせてもらったと思っている。

能力のない者には確かに荷の重い仕事ではあったが、失敗しながらも、とにかくやり遂げることができた。信仰なくしては、歩めなかつたと思う。父が寝たきりとなり、母が痴呆となつて、その介護に関わつた経験は、家族介護の大変さと限界も分かり、システムづくりに役に立った。神様は無駄なことをなさらないお方である。また、幸いだったのは、よき部下に恵まれたことである。こちらがいちいち指示しなくても、期待以上のことをしてくれた。これも神様のお恵みである。

これらのことの後、平成八年四月、私は民生局理事となり、再び社会福祉協議会常務理事として出向し、ここで定年退職

を迎えたわけである。

(退職後も、そのまま第二の職場として在職している)

八 おわりに

先輩たちが退職の時によく使う言葉に「大過なく」というのがある。私はこの言葉が事なかれ主義のように聞こえて、あまり好きでなかった。同じ人生、困難があり、大過があったほうがおもしろいと思っていた。

今考えてみると、本市のその時々的重要課題の所ばかり歩いてきたように思える。実に大過ある役所人生だった。そういう中を、小さなカラシ種のような信仰しかなかったが、とにかく一生懸命、苦しいからと逃げないできた。というより、祈らないでは前に進むことができなかった。祈りの中で御言葉が与えられて、導かれたと思う。仕事の中で信仰が整えられてきた。神様の真実なお取り扱いに感謝する。

私は福祉行政が長かったが、福祉の原理は法律や学術書よりも、聖書にあると思うようになった。聖書を知ったがゆえに、福祉を理解することができた。なぜなら、神様の私たちに對するお取り扱い、福祉そのものであるからである。福祉の語源は「神から受ける恵み、幸せ」とある。十字架を通して注がれる神様の愛と恵みは私たちを真に生かし、真の幸せを与える。そこには福祉で言うところの「自立の支援」の

思想があり、「ノーマライゼーション」の理念や私たち一人ひとりを大事にしてくださる神様の「人間尊重」の精神が脈々と流れている。

私自身、神様に従うことは小心者には難しいと考え、自分の性格を嘆き、神様の恵みを受ける資格がないと失望したことがあったが、迷える一匹の羊のために心くだき、探し求められる主のご愛(福祉の心)を思うと、神様の前には、こちらの状態や性格が問題ではなく、よき羊飼いなる方に従っていか否かの信仰の問題であることがよく分かった。とにかく理屈抜きに従いさえすれば、後は神様が責任持って導いてくださる。そこに真の幸福がある。私たちは神様の福祉なくして生きていくことができないからである。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ六・三三)と約束されているが、正にこの通りである。神様に従わせていただいたこの四十年の間に、仕事以外でも、恵みに恵みを加えていただいた。結婚して家庭を持ち、子供も与えられ、それぞれの道を歩むようになった。長男は、私がチャレンジして果たし得なかったその大学に行ってくれた。神様の不思議な導きと格別な祝福をいただいていると思えてならない。両親も天国へ送らせていただいた。

この四十年は、私にとってはイスラエルの荒野の旅のよう

に思える。いろんなことがあったが、それはつらい旅ではなく、主が共にいて懇ろに導き、その恵みと福祉を知る四十年でもあった。

そうであれば、これからの残された生涯は、靈的に乳と蜜の流れるカナンの生活とさせていたただかなければならない。そうありたいと、心から願っている。



カナダからのおたより

信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。

一九九七年六月八日、カナダのエキュメニカルチャーチで奉仕されて居た 李龍基師が召天されました。主の聖旨を私共では測り知る事は出来ません。何時も皆様も祈って下さった御家族の皆様が主に在る希望と平安を与えられ、心一つ、思い一つに、全力を尽くして李師の看病に当たられた証詞を頂いて、私共も悲しみを越えて、慰め、励まされます。

一九九六年

榎本先生、百合子先生

長い間ご無沙汰いたしましたして申し訳ありません。その間、「ぶどうの木」やその増刊号などを、お送りいただきながら、お礼も申し上げますことをお詫び申し上げます。

又、今年は先生の米寿のお祝いのお喜びを申し上げる機会

も逃してしまいました、心苦しいばかりです。改めて、米寿のお祝い、心からおめでとうございました。神様の御祝福に依ってこそ八十八才になられた今も御健在で、主の御用に當っていらっしゃいますことを感慨無量に思います。神様がみそば離れずにお守り下さいます様にお祈りしています。

叔、私共の事ですが、今年が多難な年でしたが、こうして又家族そろってクリスマスを迎えることが出来て感謝にたえません。四月に主人が肝臓癌と診断されて以来、家族一同共に死の陰の谷をさまよって参りました。主人が癌にかかろうとは夢にも思っていないませんでしたし、とりわけ至難な肝臓癌にとりつかれようとはそれこそ想像もつかないことでした。余りの恐しさと主人の苦しみには私は毎日泣いてばかりでした。それでも神様の御慈悲にすがって一日一日を支えられこまごまで至ることが出来ましたことがすでに奇跡の様です。空のすずめのように、又野の百合のように、一日一日を生きる毎日でした。今年は又暑い夏でしたが、四月から六月迄の一月半の入院で、衰弱しきった主人にはすこしの微風も冬の寒風のように耐え難く高熱を引きおこす始末なので、冷房を入れるどころか、窓を全部閉めきって一夏を過ごさねばならない状態でした。高血圧症の私が熱気の為に先に倒れるのではないかと思っておりました。この様な中でハンナは主人と一刻でも一緒に過ごしたいとウインザーからトロント大学の法学

部に転学し、朝夕主人を慰めております。お陰で今年は久しぶりに家族が皆揃って、励まし、助け合って、過ごしております。主人の診断がちょうど学期末試験の時でしたが、事態の余りの重大さのためにサムエルは主人の病床から一時も離れない決意をし、試験を受けなかったため、大学の学籍失格となりました。「ママ、勉強はいつでも出来るよ」と私を慰めてくれました。後に主人がこのことを知って大変落胆したことは言うまでもありません。(サムエルは昨年トロント大学の工学部に入学しましたことはお知らせしましたでしょうか)

死の陰の谷をさまよっている主人の病床をとりかこんで皆でお祈りをささげている時は神様が手のとどかない遠くにいらっしゃるようで、一体私達のお祈りを聞いて下さっているのだろうかと不安になりながらも、どうぞ御慈悲によって助けて下さいというお祈りをつづけておりました。こうして家族揃ってクリスマスをお祝い出来て、唯神様の一方的な御愛のかたじけなさに家族一同ひれ伏して感謝をささげております。多難な年でしたが、ハンナもサムエルも今年が生涯最良の年だったと言っています。神様は道のない所に道をもうけて、ここまで導いて下さいました。どうぞ主人の癒しの為に
お祈り下さいませ。

文江

榎本先生

先日は電話で取り乱して申し訳ありませんでした。お手紙を戴き、またイザヤ書のみことばをいただき、家族みんなでくりかえし読ませていただいております。一月の末以来、一難さってまた一難という状態でも、水の中を通っても溺れない、火の中を通っても焼きつくされないとおせられる主を依り頼んで、明日のことも分からないような状態の中で、今日まで来させて戴きました。

「あなたを救う」との御約束を頼んで主の御慈悲にすがって参りました。何がおこるか、一寸先の予測もつかない毎日でしたが、ようやくこの一週間、主人の状態がおちついて来たように見えますので、かいつまんで近況をお知らせいたします。

まず先生をはじめ教会の方々には熱い熱いお祈りと信仰によってここまで支えられて来ましたことを切に思い、心から有り難くお礼を申し上げます。

昨年四月二十三日、すい臓ガンの手術後、主人の体力が回復するのを待って、七月から化学療法と放射線療法がはじまりましたが、副作用が強すぎ、害の方が利益よりも多すぎる
ことが分かり、八月に中止をお願いしました。

その後、家庭での療養が始まり、クリスマス頃までには序

々に体が回復したかに見え、私共もほっと安堵の胸をなでおろしておりました。クリスマスデコレーションを家の中も外も主人がすることが出来て、皆で大喜びをしていました。ところがトロントの冬の寒さの為でしょうか、一月末に主人の状態が唯の私共の心づくしの家庭内の看護では追いつかないことが分かり、入院いたしあんした。脱水状態からの回復にと思ったのですが、二月の末頃迄には水ももどす程に悪化し、医学的にはこのままだと一カ月もたないと言われました。先生にお電話を差し上げたのは、多分、この前後の頃と思います。総合病院とガン研究所病院とが隣同志になっており、ガンの専門家が総合病院の外科医と提携して対策がとられることになりました。原因は多分、すい臓ガンが大腸小腸に移り、拡大して、腸をふさぎ、食物が通らなくなっているからとのことでした。はじめは、外科医に相談して、何とか手術によってすこしの間でも生命をとりとめることが出来るかもしれないとガン専門医は話していましたが、テスト、テストで時間がかかり、三月はじめにはもう四十日近くも主人は食物と水を口にしていなくなっていた為に、体に残っているのは骨と皮ばかりで、リンゲル注射の場所を探すのも困難をきわめるようになりました。

ガン専門医もたとえ外科医が手術によって当座の問題解決が技術的に可能と言っても主人の体力では手術自体をのり切

ることが出来るが疑問だと言うようになりました。

先生方のお祈りによって、神様のみ手にしっかりと支えられていたと思います。和子ちゃん、通成さんは遠くから絶えまなく訪問してくださり、祈りと言葉とで私達をいつも励ましてくれておりました。私達が食事を作る暇もなかうと、毎週毎週文字通り、私共の家族を養ってくれております。主ちゃんはこちらに帰って来るたびに（モントリオールで博士課程に入る準備をしています）、せつせと主人の病室にお花を飾ってくれたり、清書のみことばを書いてくれたり、まるでわが家の牧師様のように私共を導いて下さっています。主人が本気に「主ちゃんは牧師になるか、宣教師になればいいね」と言っている位です。看護婦さんやお医者様まで「一番美しい病室」と主ちゃんや和子ちゃんが飾って下さる花を楽しんで下さるようでした。

この様な中で外科医からは「時を争う時なので、一刻も早く手術にふみ切るかどうか、決定するように」と言われ、みことばにすがって神様の右手を一生懸命にゆさぶるように皆で祈って祈って、とうとう手術をしていただくことに決まりました。フランス人の外科医でしたが、自分が患者ならば手術を選ぶと言われたのが決定の要素ともなりました。神様が彼をして道を示して下さいましたと信じ、皆で背水の陣をしいて前進することになりました。

三月末に真夜中すぎに緊急の手術となりました。去年の四月の手術に比べ、何倍も危険をとまなう手術でしたが、早朝六時半、主人は手術室から生還することが出来ました。その時の感謝と喜びは表現の仕様もありません。その後、予測された様に、手術後の経過に困難がつきつきと続き、三月十七日、手術を受けたシナイ山病院からオンタリオ癌研究所付属病院に移され、三月二十二日には、まだ回復もほど遠い時に退院させられました。と言うのは余り沢山のガン患者が待っている為に手術が終わった後はホームケアというものに変わるのだそうです。それでも主人の状態がかなりの看護を要し、又予断を許さないので養護の病院に移ることも相談されましたが、皆で出来るだけの看護を家でしたいと意見が一致し、三月二十二日、日曜日、帰途につきました。とは言っても、まだまだ重病人の主人をどうやって家庭で看護ができるのかと、又もし万一私共の失策で取り返しのつかないことになったらと暗たんたる気持ちでした。ところが家についてびっくりしてしまいました。病院から一切の主人の闘病に必要な品物がすでに送り込まれ、設備されていました。

昼間が今は主人の病室となり、車椅子、シャワー椅子、椅子トイレ、ベッドテーブル、電化ベッドはもとよりリンゲルのスタンドは三本も送られて来ていました。薬局からは痛みどめのモルヒネをはじめ医療品が何箱も送りこまれて病院の

病室がそのまま家の中に運び込まれた様でした。その後は医者や看護婦さん達、それにホームメーカーまで入れかわりたちかわりに訪れて、主人は平和なわが家の中で治療がうけられるようになりました。このようにしてようやく希望の火が見えはじめたと訪れて思ったのもつかの間、四月六日、日曜日は、私が教会に行く為に一時間半程、家を留守にしている間に（ハンナとサムエルは家で主人を助けておりました）主人が又原因不明の高熱をひきおこしてしまいました。脈拍一四〇、血圧五〇／二〇、熱三九

、二度、私共が医者に連絡して右往左往している時に、又和子ちゃんと通成さんがちょうど訪問して来てくれました。早速皆で主人をかこみ、お祈りが始まりました。（この間のことは、主人は何一つとして覚えておりません）その後、医者、看護婦が来て、リンゲルを始めようとなりましたが、主人の血管が弱すぎて、不可能と分かりました。リンゲルの専門家が来て、二カ月はとりはずさないですむという特別の操作が取られ、実際に液体が注入されはじめたのは、もう真夜中近くでした。それでも、これも先生方のお祈りの賜物を思います。が、翌朝までには全く別人の様に主人の状態が回復して、医者の訪問の時には主人が微笑をたたえる程になっていました。医者も手をたたかっぱかりに喜んでくれました。イエス様が「私は生ける水である」とおっしゃった意味がつくづくと分

かりました。水が体から不足すると私共の体は即座に死んでしまうのです。イエス様の知恵は二千年前にすでに現代医学の知識をこえて、あまりあったのでしょうか。その後、今日まで、毎日毎日何かと新しい問題が頭をもたげ、まるでうすい氷の上を歩くような生活でしたが、振り返ってみますと、それでも神様のみ手の中にしっかりと支えられておりました。ひとえに先生方のあついあついお祈りのお陰と心の底から感謝致します。

振り返ってみますと、昨年四月以来、長い旅路の間、主は本当に真実でいらっしゃいました。信仰の薄い私共をひとえに憐れんで、ここまで導いて下さったことを思い、心から感謝を捧げています。

先生、百合子先生、それに教会の皆様、ほんとうにありがとうございます。主人と一日ごとに「今日もまたポーナスの一日」と喜び合って、感謝のうちにすごしております。

明日のことも分からない毎日の中で、「空の鳥をみなさい」とおおせられるイエス様に従わざるを得ない日々を経験させていただいています。

皆様の御愛をいつも思い、神様に感謝し、皆様の上に主イエス様のお恵みと御祝福が豊かに豊かにそそがれます様にお祈りいたします。

文江

おなつかしい榎本先生、教会員御一同の皆様
主のみめぐみが皆様の上にゆたかに、そしてかぎりなくふりそそがれますように祈りつつ

毎日毎日電話の前でダイヤルをしようと思っは、又泣き出して、お話しが出来なくなつたらと思いとどまって、今日になつてしまいました。お手紙でお便りすることにしました。永い間、主人のためにお祈りをいただいて、ほんとうにありがとうございます。主はご計画に従つて、六月五日に主人を召されました。私達は皆、いづれは召されるものと分かつてはいても、最後まで希望をすてずに、祈りつつけておりましたが、主は御計画を変更されませんでした。主の御旨を今知することは出来ません。そのうちに分かつて来るようになるのか、又御国に入れていただいた時にイエス様から直接に何うようになるのか、今は分かりません。六月八日、日曜日に主人の奉仕していた *Evangelical Church* の方々の告別式につづいて、六月九日、月曜日、私共の母教会である *ノックス (Knox)* 長老教会で告別式をしていただきました。主一、ハンナ、サムエルが何から何まで準備にあたり、通成さん、和子ちゃん、朝な夕なにつき伴つて下さつて、感謝でした。 *Evangelical*

ca i Churchでの式次第は韓国語で書かれていたので、Knox Churchでの式次第を同封いたします。カナダ在住二十七年の間、忙しいばかりで、まともな写真をとるゆとりもなかったのかと悔やまれますが、この式次第の中の写真は彼がまだ二十代の独身の時のものらしいです。

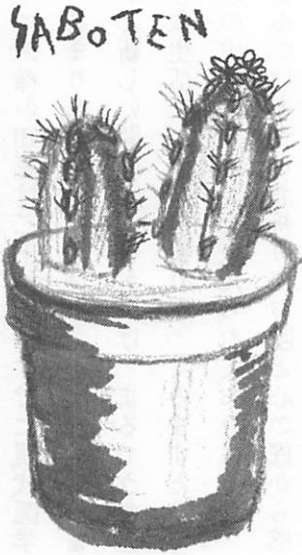
主人が召されて後、一カ月余りは気落ちのせいでしょうか、朝起きる元気もない毎日でしたが、ようやく最近何とか気力をとりもどして来ました。

お祈りしていただいているのですから、早くお知らせをしなければと思いつながら、悲しいお知らせを届けることが出来ませんでした。

先生、百合子先生、会員の皆様、ほんとうに長い間、お祈り下さいますと、ありがとうございます。

かしこ

文江



李龍基師の召天とサービスをお知らせする新聞記事

LEE, Rev. Yong-Ki — On June 5, 1997, began his new life with our Lord and Saviour Jesus Christ. Among those who celebrate his homecoming are his faithful and devoted wife, Mun-Ju, his two children, Hannah and Samuel and Michinari, Kazuko and Daniel Suzuki. Visitation and reception will be held on Sunday, June 8 at Wing On Chapel at 665 Spadina Avenue from 4-6 p.m. Funeral Service to be held at Knox Presbyterian Church at 630 Spadina Avenue on Monday, June 9, at 1 p.m., followed by private interment at York Cemetery. For those who wish, in lieu of flowers, donations to the V.O.N., the Cancer Society, or Knox Church, would be appreciated.

**CELEBRATE REV. YONG-KI LEE'S LIFE AND
TRIUMPHANT ENTRY INTO GOD'S KINGDOM**

ノックス長老教会での告別式次第

ORDER OF SERVICE

Prelude ~ Piano Solo

Chorale Transcription on "Ich ruf zu dir, Herr" J.S. Bach
arr. F. Busoni

Mazurka in C sharp minor, Opus 63 no.3 F. Chopin

Barcarolle in F sharp major, Opus 60 F. Chopin

Call to Worship

Prayer

Hymn: 519 Nearer, my God, to Thee

Scripture Reading: Psalm 23 Peikang Dai

Flute Solo: Meditation Jules Massenet
arr. Claire W. Johnson

Tribute Hannah Lee

Trio: Suite in D major No. 3 Air J.S. Bach
arr. Charles Woodhouse

Tribute Samuel Lee

Scripture Reading: Revelation 21: 1-4; 22:1-5 Peikang Dai

Trio: Jesu, Joy of Man's Desiring J.S. Bach

Sermon: Rev. Bog Yong Eom

Trio: Largo G.F. Handel

Sermon: Dr. John Vissers

Hymn: 86 A mighty fortress is our God

Benediction



**Special Thanks to the Performers for blessing us with
their tribute:**

Daniel Suzuki - piano	Julian Kuerti - violin
Ellen Rae Dai - flute	Sarah Kim - cello
Nichole Anderson - violin	Roger Bergs - organ



Reverend Yong-Ki Lee was born in Pyong-Yang, North Korea on March 6, 1934 and was baptized at Thomas Memorial Church. At 16, during the Korean war, he escaped religious persecution and fled to Seoul as a refugee with the hope of being reunited with his family later. In 1957, he graduated from the Theological Seminary of the Presbyterian Church of Korea.

He was ordained at the age of 24. He concentrated on evangelical activities just north of the 38th parallel. He graduated with a B.A. from Kyong-Hee University before his service with the Korean Armed Forces as a chaplain. In 1968, he began his study at Tokyo Theological Seminary, where he met Mun-Ju Kim who was studying at the International Christian University.

In 1970, he joined Mun-Ju, his fiancée, in Toronto. She was studying at OISE. He worked for Becker's Milk and opened Bay Lee's Supermarket at 700 Bay Street, 1976 to 1986. He came to Knox Church in 1974 when Dr. Owen preached here for the first time. In 1991, he was approached by a group of Korean people who were searching for a pastor. He gladly accepted this "call" and began the ministry under the name of Ecumenical Church. His son Samuel, who accompanied him during this transition, also grew spiritually during those years. He was dearly loved by members of his congregation for the pastoral and personal devotion he gave to them. To him, his congregation was part of his family.

榎本牧師全快感謝会

(一九八七年三月一日)

(榎本牧師)

『わたしの喜びであり、冠である愛する兄弟たちよ、このように主にあって堅く立ちなさい。』

私共の毎日の生活の中に色々と問題がありますが、私共は今日も教えられた様に、主によって生かされ、力を与えられ、命を与えられて居ます。だから主にあって堅く立ちなさいなのです。境遇がいいからとか、あれがいいからでなくて、主において堅く立つのです。

この度の私の病気のために、皆さんが切なる祈りをもって祈って下さった。その祈りに答えて下さって、今日はこうして皆さんと感謝の時を持たして頂いて居ります。もしそうでも無かったら、恐らく今日は告別式でしょう。私は今もそう思っています、皆さんの顔を眺めて居ます。神様がこの楽しい、神様を崇める時を与えて下さった。だからあの祈りに答えて下さった主は、今日も明日も永遠に一緒に居って下さるから、このように堅く主にあって立ちなさい。

これからも私が居る居ないに係わらず、あの時主が祈りに答えて下さった。皆さんが真剣に祈って下さった祈りにこの

ように答えて下さった方がある。このことをしっかりと心に留めて、一つ、主にあって堅く立って頂きたいと思えます。感謝会の時にあたって皆さんにお願ひしておきます。

実は、私の病気が、私自身もびっくりするほど悪化してしまつて、本当に度々和義を通して、報告があつたと思ひますが、お医者さんの方ではもう手遅れで、「処置なし」と言うことだったんだそうです。知らせる所があつたら、皆知らせ、そして悔いのないようにして置きなさいと言われたそうです。私は熱に浮かされていたので分からないんですが、そういう状況の中だったので。言い換えると、人間的にはもう駄目だということなのです。その時に、皆さんが本当に切なる祈りをもって祈って下さった。私もひしひしと感じますが、熱の苦しい時には人様にお会いする事も、物言う事もきついんです。それで皆さんに面会謝絶ということとせひにという方もおられました。皆お断りしたんです。けれども皆さんとの間を隔てられた為に、神様に向かつて祈って下さった。これが皆さんにとって大きな恵みであつたとともに、私にとつても大きな恵みであつたと、今しみじみと感謝しております。私が入院中、皆さんの切なる願ひを断つて、「絶対安静」「面会謝絶」としてしまつたんです。中には面会謝絶で行つたら悪いだろうからと、手紙を書いて下さった方がありました。掟には背くことだけれどもというわけですね。色

々とそうしてお気持ち伝えて下さった方がありません。本当に感謝ですが、返事がかけないで、心の中で苦しく思っていました。そんなにまでして心配して頂けると言うことが、私にとってはイエス様がおっしゃったように、「私の兄弟とは誰か、天にいます父のみむねを行うものが我が母、我が兄弟である」という御言葉通りで、私はこんなすばらしい家族の中におかれているということを何と感謝していいかわからないと思いました。

それで今日は感謝会ですけれども、長い間、皆さんのお見舞いやら、ご意見を断ってしまったものですから、今日は腹一杯皆さんの意見を聞きたい、そういう気持ちでこういう会を持たせて頂きました。どんなことでも構いません。何でも私には言うていいのですから、どうぞ皆さん、目一杯ふだん思っていることをぶちまけて構いませんので、おっしゃって頂きたいと思います。まあ、私の病気の状況は、次々と大体和義やら俣雄やら誠がおりましたので、皆さんの前に断片的にはお伝えできたと思います。そういう状況であったことを思えば思うほど、こうして皆さんと今日お目にかかることができるというのは、すばらしい神様のあわれみ、恵みであったと思います。どうぞ一つ皆さん、遠慮なくふだん思っておられること、その時に感じたことでも、また何でも結構ですから、今日は遠慮なくおっしゃって頂きたいと思います。

(安部タマエ姉)

私の主人は十二月の二十日の午前一時に召されました。その主人に先生が一月頃から脾臓が悪いんじゃないねって言うていました。それで主人に言いますけど、わたしの言うことは聞きません。そして八月まで、毎月月初めにけいれんが来まして、八月におなか痛くなるまで続きました。そしておなか痛くなるとけいれんはなくなって、日増しに衰弱するような様子でありました。それで主人が市立病院でカメラを飲んで調べてみたんですが、別に悪いところはないと言われ、そして今度は不知火病院に診てもらいなさいということ、そっちでも写真でみるとどうもないって言われるんですよ。そして私が二回目に行って、先生に「どうもないんでしょか、こんなして月に一回けいれんがあったのがなくなって、そして腹が痛くて、腰も痛いんですよ」って先生に申しましたら、先生から製鉄病院に診てもらいなさいと言われ、紹介状を頂いて診てもらいましたところ、脾臓が悪いということでした。それで十月の二十八日に入院しました。お見舞金も婦人会から、また婦人会の有志者からも頂きました、私の自動車足になりました。本当にありがとうございます。私も現在まで生かされておるのをお父様のおかげと感謝しております。どうもありがとうございます。

（三好喜代市兄）

すみません、一番最初に。年末になって電話頂いて、初めて先生が入院されたということを知ったものでございますけれども、その時、私が考えましたのは、今日まで先生を通して本当に死んでいたものが生き返らせて頂くばかりか、今から芽を出さんとしている折りに、先生が再発されて病院に入院することとなった。そして状態を聞きますれば、一番最初の状態とはかなり違った状態の中で、私はその時にここまですごいものを育ててくれ、また成長させて頂きましたが、この時になって、今倒れては困る。どうかこの病氣を通してさらに先生に神様の福音のため、さらに大いなる恵みを与えて、ここからもう一度立ちあがらして頂きたい。今芽をふかんとしている者が、ここで泥をかぶされて、また沈んでしまうことになってしまふと大変だと思いました。「どうか神様、あなたは無から有を起し給う方です。今日まで私は神様を信じて参りました者です。それが今になってここからまた迷いの中に入っていくようでは困ります」と、お願いしました。そしてまた先生におかれましても、大分年をとったようです。しかしこれは先生はあまりご無理をなさっては困りますと言っても、先生は私達の言葉では受け入れて下さらないと思えます。なぜならば、神様の福音を宣べ伝えようとして一生懸命今日まで来られた方でございます。しかしながら、私達も

その先生のお言葉を通して、今日まで様々な中を通りましたけれども、本当に喜びと平安を与えられて来たものです。本当に残念だと思いました。「どうかこの中から主よ、哀れんで、もう一度福音を宣べ伝える機会を与えて下さい」と祈っておりました矢先、無事退院というお声をお聞きしまして、心から私は感謝をもって主を崇め、また与えられたこの生涯をどうか主に一生を捧げて歩む生涯であるようにと願っておりました者でございます。本当に先生おめでとうございます。ありがとうございます。

（河本兄）

先生、おめでとうございます。先生の今回のご病氣によって教えられたこと、まず何と言っても主は生きておられ、より頼む者の祈りに答えて下さるという事です。それから二番目に先生の存在があまりにも大きな、精神的な支えであったということ事です。

一月三日に、土曜日でしたが、伺ったところによりますと、病状は非常に悪くて、肺と肝臓にガンの疑いがある、胆嚢や膀胱も分からないということを聞きました。非常に熱が高くて、汗が多く出て、シーツまで汗が通る位にたくさん洗滌物が発生しているということでした。そして一月七日、水曜日には、悪性のビールス性肺炎の診断がออกมาして、院長先生

がさつき先生もおっしゃったように、お気の毒ですが、ということをいわれて、人間的にはもう手立てはないというようなことをおっしゃっておられます。ビールス性肺炎という病気が特效薬がなくて、普通の肺炎でしたら抗生物質で回復もできるのですけれども、この病気には特效薬がない。高熱と体力との戦いであって、非常に激しい消耗が続いているということを伺いました。一月九日になりますと、ちょっと小康状態になって、先生がもう峠は越したから感謝しましょうということをおっしゃったということをお聞いしたんですね。この日に俵雄さんが来られて、ずっと悪かったのが、この時ちょっと上向いたということだったんでしょうか。一月十日の土曜日にはですね、検査の結果、肺炎以外のものはすべて、健康であるということがわかったということをお聞きました。他の疑いは除去されたということですね。

ところが一月十二日の月曜になりますと、朝御飯の後に嘔吐なさったということでした。そういうことを伺いますと、また病状ははかばかしくないという風に聞いた訳です。体力が衰えて、肺炎が広がっている。そしてこの頃ですね、和義先生の奥さんの文子夫人に先生が「もう天国は遠くないようだ」とおっしゃったとか、百合子先生に「どんな時にもイエス様を離れてはいけないよ」とおっしゃったとか聞いた訳ですね。先生はもう遺言としておっしゃっているのではなから

うか。そう感じたことがあります。

一月二十四日になりますと、熱が少し下がって七度台までになった。しかし一進一退を繰り返しておりました。熱の後は大分お苦しい様子であったと伺っております。主治医ははっきり言って、容体がよくなったとは言えない。薬で押さえられているところだから、再発すれば、熱が再び出ると、また危険な状態を繰り返す。体力の回復が急務であると言われたということですね。だから先程先生の話の中にありましたように、点滴でなくて、口から食べるものが体力には必要で、一番効果的であるということをお聞いしております。けれども、点滴のために口内炎がひどくて、なかなか召し上がれないということも聞きました。何とか方法は無いものだろうかとお祈っておった次第でございます。この間、一、二度、私連絡のために伺ったことがある訳ですが、非常に高熱の間、体力の消耗が激しいときにもかかわらず、拝見したところ、非常に平安のうちにおられて、むしろゆとりを先生のお姿に感じたことがあります。毅然とした姿で、昔の武将とはこんなものであったのではないだろうかという感じを抱きました。

一月二十六日の月曜日になりますと、月曜日は検査だったんですね。レントゲンの写真が著しい回復を示して、歩いて便所に行っても良いという許可が出たそうですね。先生が毎日お見舞いに行っておられまして、その堤先生が「人

間の力ではどうしようもないんだ。祈りましょう。私も祈るから、祈って下さい」とおっしゃったと聞いています。そして一月三十日、金曜日になりますと、ずっと良くなって、歩く練習をなさいと言われたそうです。そして先生がここまですべて強めて下さったことを感謝なさった、ということをお聞きしました。

そして二月十五日、二週間程とびまして、二月十五日の日曜日、礼拝の後、祝福のため礼拝にご出席になられた先生のご挨拶をお聞きしました。そして本当に死の淵から、文字通り甦っておいでになったということですね。どんなに私共喜んでかわかりません。そして次の二月十六日の月曜日になりますと、夕方、突然退院が許されまして、もうすっかり病院の治療からは解放されてお帰りになった訳です。

私はこの間、先生に付き添って、昼夜休むいとまもない看病をなさった百合子先生が、こちらの方が弱られるのではなからうか、お疲れが出るのではなからうかと心配しておりましたが、時々お目にかかったり、お電話でお話を伺ったりすると、全くお元気な様子で、感謝致しました。大体看病の最中にはあまりわからないんですが、後になると、疲れが出て、却って看病なさった方が悪くなった、弱ったとかいうことを聞きますので、それがないように祈っております。

今年の新年聖会はこういう訳で大変なことになったわけで

すけれども、正月早々、先生の状態が非常に悪い、もう人間の目からみれば、全く見込みがない、絶望的だということなんでしょうね。それで私は非常に落ち込んで、ものも言いたくないような気持ちで、長女が帰ってきていましたが、ろくに話をする気にもなりません、絶望致しました。三日間というのはこれまで、一日三回の集会に出させて頂いておりまして、聞く方もかなり疲れるんですが、それをお話しされる方はさぞかし大変なことだったんだろうと思っただけです。そして聖会がないんだから、家でくつろいで、楽なのかというところ、決してそんなことはなくて、却って疲れてしまったような経験を致しました。その時ですね、「わたしを尊ぶものをわたしは尊び、わたしをいやしめる者は軽んじられるであろう」というサムエル記のお言葉があるんですね。「先生は全生涯を神様に献げておらっしゃるではないか、その先生でさえ、こんなお取り扱いを受けるとしたら、私はどうなるだろうか、どうしたらいいんだろうか」と思って、腹が立つやら、情けないやらで、身の処しどころがないような思いをしたものです。

和義先生が一月十八日の礼拝です、大濠のあるご婦人の話をされたんですね。和義先生は根本先生のご病気のことについて神様の手に一切委ねようとおっしゃったけれども、私はもう任せる気はしない、とそのご婦人がおっしゃったと

ということなんです。どうか先生を癒して下さいとしか言えないという話をしたということなんです。その時に和義先生は「信仰を信じる力を与えて下さいと求めようじゃありませんか」と話されたそうです。しかしそのご婦人の正直な心がすばらしいと思いました。私も同じように感じたものですから、その方の気持ちがよく判りました。

二月十五日の先生が祝祷にかえて来られて、ご挨拶された時にですね、先生は去年の聖会のお言葉、「我限りなき愛をもって汝を愛せり。ゆえに我絶えず汝を恵むなり」というお言葉と「見よ、神はわが救いなり。我より頼みて恐るることなし」という御言葉によって、大愛力が与えられた、意識がなくなる程の高い熱であったけれども、心と魂がピシャッと平安の中におかれて、動揺することがなかったということでした。そのお言葉を聞いて、今年の聖会は榎本先生が命をかけて、主に信頼する者に答えて下さる神様の証しを私達に見せて下さったんだと思いました。本当にこれによって、どんなに私が力を与えられて、信じて、より頼んでいったら、決して裏切られることはないんだという喜びが一杯になりました。こういう経験は長い間教会生活しておりますが、こんなに現実にも目の当たりに事実でもって示されたのは初めてなものですから、どう言ってよいかわからないほどの喜びがあふれて、感謝した次第でございます。そして先生がまたその

時にですね、長生きしておるばかりが御用じゃないとおっしゃいましたけれども、さっき申しましたように、神様の善かつ忠なる僕として私共に伝道して下さい、お話しをして下さるのもこれも本当に大切な御用じゃないかと思うんですね。だからタレント並の超多忙なお仕事はその辺にちょっとおいてですね、私共、先程三好さんもおっしゃられたように、はらはらして見ておった訳ですけれども、とても言ったって受け入れて頂けるような感じじゃないですね。もう、「サクンよ、退け」と言って、怒り飛ばされるんではないかと思つて、とても出せなかったですね。これはもう、今回を契機にしてせひとも、お大事になさってほしいと思うんです。そしてまたご健康にですね、用心して下さい、また先生を見ることによって私達も強められて、喜びを感じていく訳ですから、先生、ご自分だけの体ではないということをよくわかつて、これからも長く神様の僕として御用して頂きたいと思ひます。どうぞ、よろしく願ひします。

(榎本師)

ありがとうございました。本当に私から主治医さんを招いて病状報告をして頂かなければならないところだったんですけれども、よく順序をおつて、報告して頂いて感謝を致します。今、河本さんのおっしゃった通りの経過をたどって参り

ました。その中でちょっと、一つ二つ私のことについてお答えしておきたいと思ひますのは、いくら一生懸命で信じて神様のために従つても、そんな目に会うなら、信仰が何のためだかわからないっていうような、わたしを敬う者はわたしもこれを尊ぶとおっしゃる、それなのにこんな中を通つてという気持ちになります。私共でも、そうだったんです。しかし「主は愛するものを懲らしめ、慈しむものをむちうつ」とおっしゃる。愛するからその中で鍛えるとおっしゃる。だから決してあの約束を変えた方ではないということをご理解して頂きたいと思ひます。なぜならば水に耐える者は水、火に耐える者は火できよめる」と書いてあります。まあ、火に耐え得ると神様は見込んで下さって、それで火でもって鍛えて下さったんで、耐えられない方は決して火の中で鍛えるようなことは神様なさらないんだということですね。だから、あくまで主は愛なる方で、真実なる方であるということ、これだけをどうぞ一つ、私達の中に記しておきたいと思ひます。それともう一つ、本当に、私自身は先程河本さんが説明して下さったように、私がこの前皆さんに申し上げたように、「我彼により頼みて恐れなし」、主の手に信頼し切つてしまつたから、私自身には恐れがありません。だから生きる、死ぬなんてことを考えなかつた訳なんです。どうなるかは知らない。ただ、この分では、二度と皆さんの前に元気に立て

るかどうかはわからない。そう思つたものですから、まあ、和義が来た時にはその熱の中からとにかくこの五十年、神様がどんなに真実な方であつたか、主はいかに生きて、本当に、ある意味では怖いほどに真実なお方である。そのかわりに、信頼する者にとつては何とすばらしいかということ私共が本当に大事なことは生ける主を主として信頼して、この主の前に歩んで行くこと、人が喜ぼうと喜ぶまいと、あるいは人がどうあろうとこうあろうと、事情がどうあろうとこうあろうと、それは主がまた変えて下さるんだから、とにかく主の前に歩むことが大切だとそういうことを一生懸命しゃべつていたということは私覚えているんですけれども、そういう中を通りました。だから私は生きると思ふことは、一体私自身が生きようとしたってこれは神様の手の内だからどうしようもないんですね、実際は。だから主の手に信頼して恐れはなかつた訳です。家内も今日まで御用させて頂いたから、感謝である。もうここまで、ここまで御用させて頂いたんだからこれから先は主の手のうちだと、思つていたようです。けれどもヒゼキヤ王のことを思い出して、でもヒゼキヤ王は神様からお前もう終わりだから、遺言しておけと言われた時に神様せつかくここまで一生懸命きたのに、今ここで死んではないません、まだこれからですって神様に自分のありのままを正直にお祈りして、神様はその涙を見て、生命を一五年

延ばして下さった。だから私もそう思う。私もみ旨のままに天国に入れて頂いても、感謝だと言うけれども、これは建前であって、本当はもう少し生かして頂きたい。だから神様どうぞ一五年でも二十年でも五年でもいいから生かして下さいというそういうお祈りをしたというんですね。だから神様は正直な本音をもって祈ることが必要だ、ということ、自分のみ旨のままになしたまえじゃおれないって、本音で神様どうぞ命を助けて下さいって祈ったって言うんですね。だから私はこういう戦いの中で主が真実にそういう中でどう信じていくかを教えて下さった。だから家内もヒゼキヤ王のように神様、今ここで、倒れては何にもなりませんからというお祈りしたというんです。そういう皆さんの祈りとそういう祈りに答えられて神様今日を迎えさせて下さいました。だから私もヒゼキヤ王は神様が与えて下さったそういう恵みを忘れたと書いてあります。そのためにとうとう最後になってしまったんです。だから私は忘れないよう早く感謝しておきたい、そういう気持ちがあります。それで本当に先程、河本さんのおっしゃったようにもう医学的には全然見込がない中、そんなに主は真実に信頼に応えて、信頼以上に応えて下さったというその主のご愛に応える残りの生涯を送らせていただきたいと思います。まあ、今懇ろに、色々とお勧め頂いて、心から感謝致します。十分にこれを神様からの声として、心にお

いて、まあ、肉において突っ走らないようにと、今、そのために静かに静まる時を持たせて頂いております。医者からも言われたし、「これからは十分年にふさわしく歩きなさい」と、これは脅しだそうですから、そのつもりでこれから心得て、イエス様にお従いしていきたいと思えます。それでまだ皆さんに申し上げておりませんでしたけれども、だんだん福岡へ行くのを減らして、八幡前田教会の牧師としてもう一度初めの御用を全うさせて頂きたいと今願っています。まあ、福岡の教会も二十年の間、皆さんが中途半端な牧会の中で、神様の導きで、許して頂いたので、福岡の教会の人々の魂が今日に至ることができたんだと私はいつもそのことを思って、神様に感謝しています。まあ、子供は「お父さん、いらんことするから、過労になって倒れたんだから、悔い改めなさい」なんて言っておるんですね。それが原因であるかないかはわからないですけど、私は何にも悔やんでいることはない。神様のみ旨に従って、神様の御用をさせて頂いただけのことであって、だから悔い改めることないと、言った訳なんです。しかし神様が今までさせて下さったことを感謝して、これからは八幡前田教会の牧師として皆さんに今までご不自由をかけたこと、本当に償っていききたいと思えます。それで今しばらく、そういう訳で病院は退院しましたけれども、何分、熱で先程河本さんおっしゃったように体力を消耗してしまっ

いるのです。だからこのままではまだ抵抗力がないから、色々な病気にかかります。ひきこんでしまうとこれは命取りだと言われています。だから十分な体力ができるまでは、用心しなさいと言われている訳ですから、その点神様の導きと違って、今は外に出ないことにしております。だからみなさん、どうぞゆっくりと個人的に話す時間はありませんけれども、今はそのようにして家にいますから、どうぞいつでも電話かけて下さったら、お待ちしていますから、ごゆっくりお出掛け下さいませ。牧師館の方に降りて来て下さるようにお待ちしております。どうぞその点は遠慮なしに、話したら疲れるだろうとおっしゃるでしょうが、来て腰掛けて話すと、楽しくなって、疲れませんかから、どうぞ皆さんよろしかったらいつでも牧師館の方においで下さい。そのことを皆さんにひとつお伝えしておきたいと思えます。いろいろと先程河本さんが順序だって病状の報告をして頂いたのですけれども、はじめガンの疑いで主治医さんがしばらく検査もしたんです。というのは私は知りませんが、俵雄が言いましたのは、レントゲンを撮って比べて見たところが、肺炎の症状にも似ているし、肺ガンの写真とそっくりだったそうです。肺ガンの患者の写真を私の写真を並べて見せて下さったんですね。ちっともかわりません。本当に肺炎の症状と肺ガンの写真がよく似ている。それで主治医の先生は肺炎と言いますが、お

ながか張っているんですね、そして押さえてもピンピンとはねかえってくる。これはガンの末期の腹水がたまっていると見たんでしょう。そういうことで熱は高いし、一応、ガンが転移して、あちこちにガンがあるんじゃないかとそういう疑いをもったようです。それで超音波で調べられました。私は肺炎なのに何で超音波で内臓を調べられるなんて思っていましたら、そういう訳だったんですね。その結果として、何にも異常はない。それでやっぱり肺炎だということでした。それで俵雄に言われたそうですが、この病院で、この老人のウイルス性肺炎で治った人は一人もいません。だからお気の毒だけれども、悔いのないようにしておいで下さいと言われたんだそうです。後から聞いて知ったんですけれども、それ程な病状だったということなんです。そういう中から神様が今日のようにすっかり元気にさせて下さって悪くなるのも急速でしたが、回復もこんなに早く退院できると思いませんでした。二月いっぱいはどうしてもこの回復期としてかかるという訳でお医者さんもそう言っておりました。もう何分気持ちは若くても、体が年ですから、その若い時のようにいきませんから、回復に暇取るからそれを重々心得て頂かないと、また途中でバックしてしまうから、それは十分慎重にやって下さいと言われました。なるほど、今になってそう思

うんですけれども、退院してもう二週間になります。どうもまだまだ退院した当時とあんまり変わらない様な弱さを感じますね。ですから気長に忍耐をもって待ち望んでいきたいと思ひます。幸いにして今、食事がおいしく頂けるようになりましたので、口内炎がほとんどとれてしまったのですから、それを感謝しております。現状はそういうことなんです。色々とお祈り頂いてありがとうございます。

(綾部兄)

ちょっとお証しさせて頂きます。こうして私達を神様お招き頂いて、感謝会をさせて頂きましたことは、本当に感謝でございます。一二月に榎本先生が急に病院に入院なさいまして、今年の正月は私達心から待ち望んでおりました新年聖会もいただくことができませんで、物足りないような寂しさの中に、二カ月間は歩かせて頂きましたけれども、一月の八日頃でしたでしょうか、先生の奥様に、先生のご容体をお伺い致しましたところが、「おかげさまで点滴も二本から一本に減らされて、今食事も頂けるようになりました。本当にありがとうございます」とそのことを聞かせて頂きました。涙が出て来まして、後はもう言葉になりませんでした。本当に神様がここまで私達この小さい者の祈りも聞いて頂いて、また榎本先生の精神力がここまで支えて、神様の恵みの中に歩か

せて頂いたその賜物であると、感謝しております。いつもお祈りさせて頂きましたことは、本当に祈りの言葉にもならない、ただ涙が後から後から出てくる、もう一度榎本先生を病の中からお救い下さい、そしてもう一度前に立たせて、生きただあなたの御言葉を語らせて下さいとそれだけを一生懸命お祈りさせて頂きました。そうしているうちに、先生がお元氣になられた姿の夢を見させて頂きまして、それが十五日の日の私が受付の御用をさせて頂いている時にお見えになられました。こんなに早く元氣になられたかとびっくり致しました。先生がその時にお祈りしていらっしゃいました時に、感謝の涙を流しておられるのを拝見致しましたけれども、その流す涙が私達の心を注ぎ出した、言葉以上の涙ではないかと思ひまして、本当に感謝致しました。そして神様はこのように仰せになりました。「わたしはあなたの祈りを聞いた。またあなたの涙を見た」と本当に言葉どおり涙をもって私共のために榎本先生をもう一度み前に立たせて下さったことを何よりの感謝でございました。それから聖会が今年流れましたので、神様のなさるすべてのことに時ありとありますように、私は正月の三日間は戸畑に住んでおります孫と子供と一緒に集わせて頂きましたけれども、本当に私は十四年間も子供と別れ別れになっておりましたので、ちょうど子供の別れた時の顔が、今の孫がちょうど同じ年齢でございますので、

目に入れても痛くないようなかわいさを感じまして、夜も全然眠らずに孫が布団をめぐり上げるのをかけてやったり、仕事をした後足で蹴られても涙が出て来て、教えられました、こうして眠りかけて、何かしら眠っている時でも私が孫を目に入れても痛くないようなかわいさを感じているから、私さえも横にいる時でも限らないご愛をもつて、神様愛して下さると、そういうことを身に凍みて感じました。正月も過ごさせて頂きました。マタイの福音書の中に「彼はいたんだ葦をおることなく、くすぶる灯心を消すこともない」とありますけど、このいたんだ葦とは、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、二本の葦ではなくて、この風にそよいでいます葦のことですが、これが本当に弱りかけて、もう折れかかっておるけれども、それを折らずに支えていて下さるといふ、私も病氣のために何回も入院を繰り返して、死の危険の中にさらけだされましたけれども、そこからまた救って下さいました。そしてくすぶる灯心を消すこともないとは、くすぶりがけております灯心を切り揃えて、ちゃんと神様の前に立たせて下さる、そのお恵みに本当に感謝して日々を送らして頂いております。本当に私はこういって病が癒された、そのことよりもっと、死の向こうにある平安、苦しみの中にある平安、それがどのようなものであるかということをはっきりと教えて頂きました。イエス様が十字架におかかりになって、あ

の子は何も知りませんからどうぞ許して下さいと、私がちょうど十二年前でしたが、病院に入院して足を切断しなければならぬ状況の中から、彼は何にも知りませんからどうぞ許して下さいとあの十字架におかかり下さいました。そして私の痛みも和らげて、その時にイエス様の血が私の血管を通して私は血が止まった状態の中からもう一度血が通い始めたものですから、足も切断せずに指の一本がはずれるようだけで終わらせて頂きましたけれども、本当に人にはできないようなことを神様なさる、そして神様はできるといふことを確信しました。そういうわけですが、またヘブル人の手紙にございますように、彼は自分の前に置かれている喜びのゆえに、恥をものので、十字架をしのび、神の右に座するようになりました。本当に喜びにあふれて、十字架をしのんで神の右に座すに至ったんだと、こういう言葉を頂きました。私はこれからそのように、十字架にかかって下さいましたその喜びのゆえに、あなたに感謝します。本当に今日もこの時を与えて下さってありがとうございますと、一時一時を神様に感謝しつつ過ごしていきたいと思っております。ありがとうございます。

(三好兄)

今日は先生からうれしいお言葉を聞きましたから、もう一

言ということで、先生は今先程、前田教会が始まった頃の氣持ちに帰りたいとおっしゃられました。この氣持ちを私はまづは、いつまでも続けて頂きたいと願っておりました者です。本当にこの氣持ちを先生が言い表して下さったことはうれしいことだと思えます。初めの前田教会のようになって、この福音を伝えていきたいという言葉を頂きましたので、これが一番うれしいこととございます。先生付け加えさせて頂きました。

(榎本師)

前田教会は昔も今も前田教会で、ちっとも変わらないと思っていましたけれども、変わっていたんでしょうか。まあ、三好さんのおっしゃられる氣持ちもよく判ります。だから主が教会の頭であって、私ではない。私は僕で、神様が行けと言われる所へ行き、しろとおっしゃることをするだけです。今までは福岡に用事があるから、福岡の御用をさせて頂いたのですけれども、これからは前田教会だけで御用をさせて頂くという意味なんですね。そういう意味では信者さんにとっては、初めの前田教会に帰ったことになります。けれどもそれから先のことは私は知りません。それともう一つ、私が発病した当時、二十五日の夜、急に熱が出て、病室で見て頂いたら、今風邪がはやっているし、熱が高いから、風邪だろう

ということと、点滴して頂いたりして、それから二十八日の日曜の御用はさせて頂ける、もちろん聖会の御用はさせて頂けるかと安心していた訳です。ところが二十七日になってもいっこう熱が下がらない。これでは、明日もだめですよって言われました。それまで時々熱さましを飲むと、熱が下がるもんだから、これで御用ができると思っただけです。けれどもまたポツと上がってしまう。そして二十七日になって、これは明日はだめだ、どうしてもできないということになりました。それなら、聖会だけでもさせて頂けるだろうと、それまでには何とか熱を下げて頂こうと一生懸命お祈りしていたところが、熱が下がるどころではなくて、いよいよ上がるだけ。二十九日の朝、念のためにレントゲンを撮ってみましょうということと、レントゲンを撮ったところが肺炎でした。それで化成病院に入院した訳です。それでもうこれで新年聖会の御用ができない、今まで祈ってきたのに、神様、どうしてこういうこと、なさったんだろうかと、それまでメッセージの為に祈って、この三つのメッセージを与えられていたんですけれども、聖会の御用をさせて頂くことができなくなってしまいました。そして今、皆さんがご存じのような経過をたどって参りました。しかし集会で言葉を通してよりも本当に神様、私を取り扱うことによって、このお言葉どおりに皆さんのうちに、「あなたの信仰があなたを救ったのだ」、皆さん

の祈りが応えられて、このように健康にして下さった、言葉
じゃなくて事実でもって、見えない神様の、声なき声をもっ
て皆さんのうちにこのお言葉を定着して下さったという、こ
れはいつもの聖会と違った聖会をして下さったんだと今は
神様に感謝することができます。だから、そういう意味で私
共は絶えず、この現実の中で主が語って下さっている声を聞
くことの出来る者として頂きたいと思えます。

他にございませんか。

それでしたら、賛美歌の四五三番を歌いましょう。この賛
美歌にありますように、やがて時は来たらん、神のみ光の、
あまねく世をてらす、あしたは来たらん。今の状態、今の問
題がどんなであっても、必ず神様の御言葉に信頼して、御言
葉通りになして下さると待ち望んで行きたいと思えます。四
五三番を賛美して、終わりにしたいと思います。

賛美 四五三番

お祈り



金生伝道師任命感謝会

(一九九七年四月六日)

(司会)

それではただいまより感謝会の本番に入らせて頂きます。

今日のヒーローは金生さんですので、今日は色々と金生さんのことを知りたいと思います。

賛美 賛美歌二一七番賛美

お祈り 広田兄、野村姉

(司会)

それでは入らせて頂きたいと思いますが、総理大臣や市長が就任致しますと、必ず施政方針演説を致します。そして自分がかうやっていきますというのを言われます。それと一緒にというわけではありませんが、神様から遣わされた金生先生のご挨拶をかねて、一つお願いしたいと思います。

(金生師)

皆さん、お祈り頂きまして、またこのように感謝会を開いて下さり、ありがとうございます。施政方針というよりも私自身の証しを通して、また今後のこともいくつかお証しさ

せて頂きたいと思います。

私は今から二十八年前に生まれ、神様から全く離れたところにいました。そんな私が中学一年の時に父を亡くして、その結果、福岡に来るようになりました。ただこういったことを話し出すと、いつまでたっても話切れず、私だけで終わってしまってもいけませんので、そのことは後日に残しておきまして、今日は献身する頃からのことをお証しさせて頂きたいと思います。本当に神様から離れていながら、教会に導かれるようになって、神様を求めようになつたのが、高校三年生の時でした。神様によってすべての恵みが与えられ、道が整えられていきました。そんな私が神様から離れていったのは、大学に入ってからのことでした。大学に入ってからは、あのルカの福音書の放蕩息子のように自分中心になって、まるで自分の力で与えられたかのように歩んでいたことを思い出します。そんな中で大学、社会へと導かれていき、就職するようになりました。二年近くたった時、日曜日に出勤してほしいという問題が起りました。それも選挙の応援なので、自分から、自発的に出てほしいということでした。私はその時にどうしようかと考えました。その年の最初の新年聖会で詩篇一六篇八節の「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」、この御言葉が与えられていましたので、この御言葉にした

がって神様を前にしていきたい、その思いから祈って答えようということ、一日祈るようになりました。その結果神様は不思議なように道を開いて下さって、会社を休んで礼拝を守ることができるようになりました。このことを通して私は神様から私が愛されている、そしてその愛の中を歩ませて頂いているということを感じられました。私はそれからは何とかしてこの神様に応えていきたい、そんな思いを持つようになりまし。しかしそれが献身の道かどうかということばかりありませんでした。ただ、とにかく祈っていいこうと思ひ、祈禱会や各集会に出させて頂くことになりました。その中でその月の最後の礼拝において、ヨハネの福音書の九章二、三節の御言葉が与えられました。「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。」という御言葉でした。私はそれまで自分が人に弱い者であるということに気づいていました。自分のことを大切にしようというか、人の思いをいつも気にして何もできないような者でした。自分の思いを言うよりも嫌われたらいけない、失敗したらいけない、そんな思いがいっつもあったんですね。人に弱く、人の言うままにばかりなっていた私でした。しかしそんな私の人に弱いところも神様にささげていった時に、神様のみわざを現すために用いて下さる、その御言葉で確信しました。そして献身させて頂きたい、

そのように教会へ申し出ました。それから半年間、私にとってさまざまな浮き沈みがありました。自分では確信したと思っ
ていながらも、世に引かれて、神様から離れていこうとした
り、そのようなことが何度もありました。しかしその中で神
様はもう一度御言葉を与えて下さり、その御言葉が使徒行伝
三章六節「金銀はわたしにはない。しかしわたしにあるもの
をあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きな
さい」という御言葉でした。私の名前は「金に生きる」と書
くのですが、金銀はわたしにはないと言われているように、
自分には何もないのですが、その私がイエス様を信じて歩ん
でいく時に、イエス様がすべてのことをなして下さる、信じ
て歩んでいく時に、この私の内にあるもの、つまりキリスト
による恵みが現わされていくのだ、そのように思いました。
そしてその御言葉の通り、金銀は私にはないけれども、この
イエスキリストの名によって歩くということを決心して、四
年前の八月一日に献身の生涯へと入らせて頂きました。大濠
公園教会で献身したのですが、それからの八カ月間はそれま
で自分中心に生きていましたので、毎日葛藤する毎日でした。
おそらく皆さんも和義先生や文子先生からお聞きになられて
いると思いますが、毎日研がれるような日々を過ごさせて頂
きました。自分はそれまで怒ることがないと思っていました
が、そのような中で自分の思うようにならなければ、すぐに

怒ってしまう自分の姿に気づかされて、それではいけないと神様に立ち返っていききたい、そんな機会がどんどん与えられてきました。その後神学校へ行くようになりました。今もお証しさせて頂きましたが、私自身の献身生涯とは、自分ではなく、神様がして下さる、神様の恵みによって生かされていくことであると思います。卒業を前に常に思っていたのは、私自身も神様の証人であるということでした。聖書のいろいろな箇所証人と証人という言葉があり、自分自身がこの証人としてたてられていきたい。そのように思っています。自分には何もなければ、イエス様に従っていくとき、またイエス様のことを見上げていくとき、なされた一つ一つを「神様あなたがして下さったことです」と言っていく時に、神様がこんなものを用いて栄光を現わして下さい、そのように確信しております。これから先もだから同じような歩みになると思っています。失敗したり、自分中心になってしまったり、そんなことも度々あると思いますが、その度毎にこんな者を神が召して下さい、そしてここで神様に立ち返って、これも神様の恵みですと証しする者でありたいと思います。

最後にもう一つお証ししたいと思っただけですが、私にとってこの教会に導かれてきたのは、私にとって不思議なことでした。というのは、神学校の三年になる直前の三月に大濠へ帰ってきました。最終学年です。そこで和義先生と話し

ていた時に、先生は私が開拓の教会へと遣わされたので、「もうそこでやっていけばいいね」と言われたんですね。私はその言葉を聞いて、「ああ、私はもう九州に戻ってくることはないんだ。」と思いました。自分はもうこの基督伝道隊に戻ってくることはないと思いました。そして自分自身でやっていることと思いましたが、そして夏期伝道実習期間に自分の力でやっていることとしたのですが、やっぱりうまくいきませんでした。もう一度神様に立ち返っていかないとはいけません。三日間ほど断食してお祈りする機会なのですが、この時に私は自分の進路について祈っていくことにしました。周りを見ていくと、ほとんどの人が決まっていますね。教会は決まっていなくてもこの団体に入ると決まっていたり、母教会に戻ると決まっていたり、周りをみると、決まっていけないのは私だけのようないや、周りをみると、決まっていけないのは私を信じていこうと、そして神様にこのことを祈り求めていこうと、この断食聖別祈禱会を迎えました。その時に与えられた御言葉がマタイによる福音書の六章三三節「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」という御言葉でした。その御言葉が与えられた時に、もう一度ここに立ち返っていこうと思いました。自分の道に関しても自分で決めていくのではなく、

神様に委ねていく、その時に神様が自分の進むべき道を与えて下さる、そのように思いました。そしてそのように祈りだしました。そして断食聖別祈祷会の最後の日にペテロが船の右に網を下ろす箇所からメッセージが語られました。その時にペテロが「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です。」と語っています。私は今までいろいろな御言葉が与えられていながら、与えられた御言葉を本当に信じて実行していただろうかと思いました。進路のことについてももう一度神様に明け渡して、神様がなして下さる、それを中途半端に信じていたのではないか、それではいけないと思いました。あそこでペテロが最初は恐る恐るであったかもしれません、右の方に網を下ろしてみたところ、たくさんの魚が捕れました。それで自分は中途半端な者であったと悔い改めたのかもしませんが、私も同じように神様の御言葉を中途半端に信じていたと思います、そのことを悔い改めました。そしてその集会が終わってから、私は一人祈祷室に入って祈っていました。二時間ほど祈って、神様が導いて下さると平安が与えられ、ちょうど部屋に戻ろうとした時に、和義先生からの電話がありました。それは「連休中に卒業後の進路について話したいので、一度戻ってこれませんか」ということでした。その話を聞いた時にあまりのタイミングのよさにびっくりしました。私が完全に神様に明け渡した時に、神様が導

いて下さったのです。次の日になると、他に二つの団体からお話がありました。私はこのことを神様に委ねた時神様が道を開いて下さる、そのことを確信しました。御言葉が示されて、その御言葉を単純に信じていった時、和義先生を通して福岡に帰って来ることになりました。その時もまだ前田にいうことは聞いていなかったのですが、この時にもう一度「神の国と神の義を求めなさい」との御言葉で原点に立ち返り、神様だけを頼りにする生涯に自分自身を置いていこうと思いました。そして九月の二十二、二十四日に帰ってきた時に、榎本先生と話して、卒業後は前田教会に遣わされることとなりました。今も一つ一つお証しさせて頂きましたが、本当に神様がなされたことだと思うんですね。もしこの順番がひとつ変わったとしても日付が一日ずれたとしても、私にとってこれが神様の導きだった、そのように確信できるとも思うんですが、しかし悟りの鈍い私に対して、開け放した瞬間に神様が与えて下さり、本当にその通り神様のなされたことだと思えました。今までの生涯を振り返ってみても、その通りなんです。私の受洗の御言葉はエレミヤ書の三三章三節「わたしに呼び求めよ、そうすればわたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない、大きな隠されていることをあなたに示す。」今日の先生のメッセージの中にもありました。信じることの遅い者、悟りの鈍い者ですが、私は神様を信じま

す、そういつて告白して、従っていった瞬間、神様は道を開き、色々な恵みを与えて下さいました。ついつい自分がそのことに背を向けて歩いていくと分からなかったんですが、後ろを振り返ってみるとすべてが神様の恵みであった、そのように証し出来ます。これから先もこの神様を証しする者でありたいと思います。ありがとうございます。

(司会)

本当に神様は不思議なように金生先生を導いて下さり、そしてこの教会に遣わして下さいましたことをお証しして頂きました。本当に神様はすばらしい方だと思います。それでは、これにちなんだ賛美がありましたら、お願いします。

賛美 賛美歌五〇二番

(司会)

では、どうぞ、どなたからでも、歓迎の言葉でも結構ですし、金生先生自身のことでも、趣味は何ですかとか、どんな女性が好きですかとか、何でも結構ですので、どうぞ。

(高木姉)

神様のお恵みによりまして、本当に金生先生をこの教会にお送り下さって心から感謝しております。先生ご夫妻が六十

数年の間、神様をおそれて神様にお仕えし、御用をなさっている姿を見まして、良き器を送って頂きたいという願いをもって祈っております。ところが本当に神様は不思議なようにこうして先生を送って下さったことを心から感謝します。昨夜もちょっと創世記の二二章のところを読んでおりました、本当にアブラハムの信仰を通してアブラハムが一〇〇歳の時に与えられた愛する子供イサクを神様のご命令によって燔祭として捧げるためにモリヤの山に登ってまいりました。その時主があなたが本当に私をおそれることが分かったので、子供に手をかけてはならないと言われたところを読みましてです、そしてアブラハムが目をあげてみると、角をやぶにかけた雄羊が目に入りまして、それを神様の前に捧げたところを読みました。神様はアブラハムの信仰に答えて下さいましたが、今も神様をおそれ、敬っていく人のために御自身の手をもって、万事を備えて下さる方であるということ本当に私自身も信仰を与えられて、神様の前に感謝しております。先生ご夫妻も本当に感謝されていることでございます。けれども、私たち前田教会の信徒が喜んで感謝しております。私が大濠公園教会に牧師先生がおられなくなつて、先生が大濠公園教会に御用に行かれるようになりました時にですね、福岡の藤掛さんがおみえになりました。前田教会の信者さんに本当に感謝しますというお言葉を述べられましたんですよ。

そのことを思い出しまして、本当に私たちは神様には感謝いたしますが、だけど大濠公園教会の榎本先生ご夫妻、そして信徒の皆様は感謝の言葉を述べるべきではないだろうか、そういうことが心の中に思い浮かんでおりました。それはそれとして、こうして感謝会に出席させて頂きまして、本当にすべてを備えて下さる方であるということに信仰を持たせて頂いて、神様を見上げて、恵みに感じてお従いさせて頂きたいと喜んで神様の前に心を新しくして頂きました。ありがとうございます。

(林姉)

感謝をさせて頂きます。本当にすべてをご存じの主が、こうして素晴らしい器を送って下さったことを心から感謝致します。しばらく金生先生がこちらにいられてから、お交わりをさせて頂きました。フレッシュと言いますか、初々しいと言いますが、私自身の信仰を神様がもう一度新しくして下さいなあと本当に感謝しています。もちろん信者さん一同、皆さんそうだと思いますけれども、若い、フレッシュなこのような器を送って下さったことによって、前田教会の皆さんが本当に信仰を新しくして、主にお従いしていくことが出来るようにして下さったんだなあと思います。榎本先生が「後のことは私の知ったことか。神様がすべてである。」と言わ

れておりましたけれど、本当にそのごとく、主が素晴らしい方を送って下さいましたことに心から感謝しております。ありがとうございます。

(司会)

今お話しがあったように、榎本先生のあの「わたしの知ったことか」というあの名言は大変素晴らしいと思っております。そしてそれは信仰の極意だと思わすけれども、そのところをちょっと、神様が備えて下さったのは確かにそうなんですけれども、榎本先生のこの信仰を私は学びたいと思っております。

(榎本師)

私も今日、皆さんと一緒に感謝するわけなんです、皆さんがご心配頂きましたように、私もこの年になりました、先のこととは分かりません。明日かも今日かもわかりません。これは主の導き給うことです。けれども教会のことは私の教会でもありませんし、また私の企業でもありません。神様の教会です。神様がここに建てて、皆さんを私の知らないところから一人一人を集めて下さったのです。だから私はただの僕、水汲む僕であって、水を汲んで行けばブドウ酒に変えて下さるのは明らかかなことなんです。ですからこの教会がどうなる

かと聞かれても、私の教会ではないから分かりませんと言いました。そういう訳で、「私の知ったことか」と申し上げた訳です。今もそうなんです。だからそのように主は責任を持って下さる、この教会の柱は主である、その主の前に私共喜んで感謝してお従いして行けば、彼方様が皆知っておられるから、心配要らないのです。皆さん、どうぞこれをしっかりと肝に銘じて、皆さんこれから死んだらどうなるだろうかなどと考えるので、そんなことはあちら任せでいいのですから、安心して下さい。私はそういう意味で言葉は悪かったかも知れませんが、「私の知ったことか」というのはそういう意味なんです。ですから私共の信仰生活はイエス様を通して、代価を払って買い取って、神様がお前は私のものだとおっしゃって下さっているのだから、安心して行けばいいんです。それをいつの間にか引き戻して、「私が」「私が」としてしまふから、自分で苦しんでいるんだということを私自身も教えられます。

それともう一つ私が感謝したいのは、教会の色々な面で一番大切なのは、信仰の土台に立つことです。この信仰がちょっと狂っていると、上に立っているものは大きな変化をもたらします。こうなると、教会は教会でなくなってしまうて、崩れて瓦礫になってしまう心配があります。それで信仰が同じ聖書を信じるもの、本当にいろいろありますけれども、聖書

のお言葉を神のお言葉と丸のみに信頼していく、信仰がはじめて主の命にあずかる信仰じゃないかと私は思いますので、そのために今日まで御用させて頂いたんだから、後に来て頂く方もこの信仰に立って頂かないと具合が悪い。ですから今までも、伝道者になりたいという方も何人かあったのですけれども、しかしその点で、与えられたこの教会の使命というものを全うするためには、最後まで主を待ち望まなければならぬと思つたんです。幸いにしてこの度、神様が同じ信仰を持って歩もうという金生兄弟を送って頂いて、一緒に命をかけて、お言葉に信頼していくという信仰をここから歩ませて頂けることを私は本当に感謝して、こういう器を神様が備えていらつしゃつたと、本当に一寸先はわからなかつたんですけれども、主が備えて下さつたと感謝しております。どうぞ皆さん、これから私たち一緒に祈って、主を主として、主の声に従う教会でありたいと思つています。

(司会者)

ぜひ私共もこの信仰を受け継いで参りたいと思つています。前田教会の新しい格言、「私の知ったことか」ということで行きましょう。

(野村姉)

ありがとうございます。私はさっき林さんが言われた通り
のことを言おうと思っておりましたから、それはもう先生が
今おっしゃられたように「私の知ったことか」という、それ
で本当にこの教会に先生の信仰を教えて頂くので、私たちも
きつと備えて下さるといふ信仰は持ってもやっぱり、い
つだろうかと半分不信仰で本当に堅く、はっきりと立って「知
ったことか」といふほどの信仰になれないで、ぎくしゃくし
た心があったことを思います時に、俄然このように金生先生
を備えて下さって本当に驚きました。神様のすばらしいみわ
ざ「主の山に備えあり」といふとも言われますけれども、本当
にアブラハムの信仰のように子供に手をかけないで、山羊が
備えられた、それを思い出して、神様は俄然私たちがボーッ
としている時にこのようにして下さるといふのを目に見せて
頂いて、信仰を新しくされて、これからまた希望をもって望
みを持って生かして頂けるから、いよいよ主を崇めていきたく
と思います。

（百合子先生）

私も心配にならないと言ったらウソになります。本当にちょ
っと不安になっては、主に祈って参りました。大濠の時に、
私たちが行ったり来たりするもんですから、「どうする、会
堂はできたけれども、先生おらないよ」、「あなたたちが八

幡と福岡とに泊まりますか」って言われるほどになっていた
んです。その時に私が「エホバ・エレ、主が備え給う」と言っ
て、皆さんに「主が備えて下さるから大丈夫よ」、そう言っ
ていたんです。そうしたら和義が十一月にこちらに來まして、
「もう八幡には帰らないからね、家も買ったし、何もかも備
えられているんだから、もう帰らないよ」と言って、帰った
ものですから、和義は来ないと思っていた矢先に十二月に主
から迫られて迫られて、夜も寝られない、食べるものも食べ
られないというような状態で、私たちが三男の家ができたか
ら、祈ってくれと言っていましたので、そこに行きました。
その時に途中寄ってくれ、用事があるから、途中下車して寄っ
てくれというので、寄りました。何事があったのだろうかと思
って、食べ物も食べられない、涙ばかり出ている、心配し
てノイローゼにでもなったんではないかと思っただけでした。
ところがそういうような話で、「どうしても主に迫られてじっ
としておれない。だからどうしたらいいだろうか」と言った
ので、「それなら神学校に行くかね、それともいろいろな道
があるよ」と言ったところ、自分は下の暗い部屋でいいから、
献身して、お父さんのところで修養させてもらいたい」とい
うことで來ました。そしてその時にちょうど大濠が無牧だっ
たものですから、大濠に留守番でということで行ったのが、
そこに留まり、御用させて頂き、今日に至っているのですが、

その時のことが思い出されて、今度は前田の番になりましたでしょう。まあ、その時と同じように「エホバ・エレ」と思っています、もう一度祈りました。やっぱりこの言葉が私から離れないんです。いくら心配してお祈りしましても、「主は備えたもう」、ありがとうございます。もうあなたにお任せしますと私になった時に、こういう道が開かれて、本当に主が生きていらっしゃる、こういう道を神様が開いて下さって、本当に感謝に絶えません。ありがとうございます。皆さんが祈って下さってありがとうございました。

(司会者)

それでは指名して大変恐縮ですが、大濑公園時代の小さい時をご存じかなあと思っています、津留崎先生にお願い致します。

(津留崎兄)

私はあまり金生先生と深いお交わりはなかったんですね。小さい時に教会に来ていらしたと、そして色々なご家庭の事情についてもちらほら伺ってはありました。あまりお話しをする機会はなかったような気がします。ただ、今伺ってですね、本当に不思議な事を神様がなして下さったなあと思っております。和義先生の時もそうですし、金生先生の時も不

思議なことをして下さったと思います。私は少し話がずれるかも知れませんが、しみじみ私はこの頃、神様から強く示されていることは、前田の教会にせよ、福岡の教会にせよ、戸畑の教会にせよ、神様から格別の顧みを頂いてですね、御聖霊がゴンゴン流れているんだということを感ずるんですね。

今日の先生のお話しは後からお聞きすると、鹿児島からということで、すぐこの間のF E B Cの放送を聞いて先生に電話があったのではないかと、まあ、実際それはわかりませんが、詳しい記事の言葉は覚えませんが、この人の書いていることはよく分かったんです。理屈はどうでもいい。本当の事を知りたいんだということを書いているんですね。F E B Cで色々放送があるけれども、魂に響くお話しというのがない、本当にそういうことを思う時に、私は格別の神様の顧みの中でこうして御聖霊の流れる教会に導かれたというのは、神様の格別の選びだと、そのことをいつも教えられて、そしてどう生きたらいいのかということをお神様から教えられているんですが、そういう流れの中で金生先生をこうして御聖霊に満たされた器として送って頂き、ますます神様がこの教会を、榎本先生のよき助け人を与えることによって、さらにさらに御聖霊の流れを、教会として顧みを深めて下さっているというふうに感じております。己を殺して従って行かなければなら

らないなあという風に思っております。私の証しになってしまつて申し訳ありませんが、神様が御聖霊の流れの中で金生先生をここに遣わしなされたということ、私は深く心に留めていきたいと思っております。今年の聖言も「聖霊をうけよ」という御言葉、私はこれを神様から頂いたメッセージですが、御聖霊によらなければ何もできません。私は何もできませんでした。御聖霊によって一足一足歩ませて頂く時に、本心に神様が生きて働かれるということを教えて頂きました。この御聖霊の流れの中に、金生先生も御聖霊に満たされた器として神様は投げ込んで下さった。そのことを心からお喜び申し上げますと同時に神様に感謝して従っていきたくと思ひます。お迎えのご挨拶になるか分かりませんが、以上です。

(司会者)

他にいらっしゃいませんか。

(河本兄)

榎本先生が、八幡にお遣わされになる前に、私は両親に連れられて、福岡の浜の町の伝道館に、毎週のように行って参りました。集会の間に、今にして思えば、行って参りました。集会の間に私は日当たりのよい広い庭で遊んで過ごしていたんですね。

時々お見かけする先生は大変忙しそうにされてらっしゃる、しかしそれでも楽しそうなお顔をしていらっしゃる。子供心にこんなところで生活出来て、楽しそうでいいなあと思つたんです。この頃、六十年前の経験として、修養生という者は従うことを教えられるんだということを言われるわけですね。あの楽しそうな表情の中ですごい葛藤があったんだなあ。と今にして思うんですね。大変なことだったんだなあ、すみません、気づきません。で、そういうことからですね、先週ですか、先々週ですか、先生が豊川の方にご旅行なさいました。その週の祈祷会のテープを聞いてましてですね、金生先生が詩篇の十六篇の八節、「わたしは常に主を我が前におく。」という御言葉をひいて話されたんですね、主をわが前に置くということはとりもなおさず私を主の前に置くということだということを言われたんです。その時、ああ、この方は神様に愛されているなあと思ひました。この方が来て下さったことは私共にとって、ありがたいこと、福音だと思ひました。どうか私共のために、神様の御言葉を取り次いで伝えて下さい。よろしくお願ひします。

(司会者)

はい、どうぞ。どなたでも。

(林兄)

金生先生をこちらの前田教会の方に送り頂きましたことを本当に心から感謝致します。かねがね、横にいます、息子の仕事の関係で、まだ献身される前の、当時金生さんと言っていましたけれども、「今日、会社に金生さんが来たよ」って帰った時に話して、とにかく金生さんが会社にくると、雰囲気違ってくる、本当に仕事柄、きつい時とか、いらいらする時があっても、本当に金生さんが来て、金生さんの顔を見たら、そんなのはどっかへ飛んで行ってしまおう。そんなとにかくすばらしいという話をかねがね伺っております、ああ、金生さんでどんな方かなあと内心思っておりましたところが、こんなすばらしい好青年で、本当に私たちの前田教会に伝道師として遣わされてくることになって、心から感謝し、また神様の器としてこれから先、私たちを引っ張って行って頂きたいと思っております。まあ、それと、世の中では、あまり親孝行な子供がおると、親の方は少しゆたつとしてですね、ボケてくるとかという話が、現に私のところも、私が親孝行とか兄弟が親孝行というわけではないんですが、まあ、長年働いてきたんで、少し楽しよう、まあ、私たちが少し仕事を手伝うよといった、いい気持ちでしたことが却って逆に親が少しゆたつとすぎて、いっぺんに力が抜けてしまうというところがあって、まあ、先生の場合はそんなことはないと思いま

すが、だけど、あまり先生が色々なことを指図するのを金生先生だったら、ひょっとしたら先生がこう思われたら、思われる時には既に手を出されるような気が付く方だと思いますんで、先生にも現役でどんどん講壇に立って頂きたいと思えますんで、そのところ、祈りつつ、ちょっと手加減して、その位でよろしく願います。これからもよき導き手として、すばらしい働きができますように、私たちも小さなお祈りですがお祈りし、また感謝したいと思います。よろしくお願い致します。

(司会者)

大変いい質問をして頂いて、榎本先生にお尋ねしたかったのは、これから金生先生がどういう役割とおっしゃいますか、用いられ方といますか、そのところについて、施政方針と言いますか、「私の知ったことか」かもしれませんが、何かもしありましたら、信者の役割の問題とか心配されている方もおられるから、お願い致します。

(榎本師)

先程から申します通り、この教会は主の教会です。私たちは主にお従いすることが全部です。だから皆さんにこの世の中の教会でしたら役員会を開いて、協議して、献金を集めて、

ああして、こうしてとありますけれども、これは主の教会で、主の下には何も予算もなければ、決算もありませんし、何もありません。ただ私共が、滅ぶべき中から命が与えられて、こんな神の子とまでして頂いたんだから、恵みに感じて、ちょうど先ほど林さんが言われたように、あまり親を楽させるとボケるから、少々刺激を与えなければと言っているように、孝行息子となって、神様に働いて頂くようにするのが、私たちの神様に仕える道ではなかるうかと思っっているんですね。ですから、私自身も恵みに感じて、ただ主が喜んで下さるなら、何でもやり、どこへでも行く。こういうのが、今まで私が聖書に従って歩ませて頂いた歩みでございます。だから金生さんもこれから主の声に耳を傾け、誰から言われてでなくて、こうしなきゃならんからではなくて、心から喜んで出来ることを何でもやってもらいたいと私は思っております。主の前にやり過ぎるといふことはありません。ただ、それで今秩序があります。順序があるということがあるわけです。一応、私が主の前に責任を負わされていますので、今のところはヘルパーとして、御用をして頂きたいと考えております。ヘルパーが何か主人に代わって独断ではならない。それと同時に私自身も神様の前には責任がある。神様の前に独断ですることは慎んで、恵みに感じて、喜んでさせて頂いているんです。この教会には何も義務はありません。だけれども、

恵みに感じて、従いたければ、いくらして頂いて結構ですから、それは主が喜んで頂けることです。これが教会の命であり、力ではないでしょうかと思います。世に勝ち、悪に勝ち、すべてに勝っていく力は私共が主の贖われた民の恵みに感じて、主を主として、主に従うことが勝利のただ一つの道だと思えます。そういう意味で、先程から、皆さんがどうしていけばということでしたら、皆さんがお祈りして、これがいいことだと思ったら、一応おっしゃって頂いて、恵みに感じてして下さることはどうぞやって下さい。金生さんが私に言われるのに、「先生、この教会は土曜日の会堂掃除は大変ですね」と言うんで、何が大変と聞いたら、「皆さんがいそいそと喜んで掃除していらっしゃる。あれはどうして決めたんですか。」ということだったんで、「決めてはいない。皆さんが恵みに感じて、喜んで、して下さるんですよ」と言ったら、「そうですか」とびっくりしていらっしゃる。やはりこれも皆さんが恵みに感じて、本当に何とかしてと喜びをもって、主に仕えて下さる。それがこうして実を結んでくるんではないか。それが教会の正しい姿ではないか。それと使徒達の足元に置くという意味で、手を放して主の前に献げられたものを用いて、御用をさせて頂く。これが柘植先生が主の前に置いて、歩みをなされたその歩みだと思えます。また聖書通りに歩もうとすると、それが一番大切な事ではないかと思

います。だからある教会の方が礼拝に出ていらっしやって、何回か出た後で、「この教会は会計報告がないが、一体どうなっているんですか」と質問してきました。「それは天国会計で私の会計じゃないから、知りませんよ。私は預かっていただけだから、会計は知りません。あなたのところはどうか」と聞いたところ、「うちは予算をたてて、こうして月定献金をして、そして先生の給料をこれだけあげて、夏期と冬期に特別手当をあげていますが、それが集まらなくて困るんです。だから毎週毎週会計報告を出します。そして休んだ方を訪問します。そして週報を持って行って、献金をもらってきます」と言うから、それは集金に行っているのと同じで、とんでもないと思ったんですけど、その教会の在り方だから私は何も言うことできませんけれども、それは世の中の教会で、教会の教が十を書いて、力を重ねた協会でなかるうかと、そう思うんですね。だから本当に聖書に立ち返って、神様のお言葉通りに恵みに感じて、主に仕えて行く、これが正しい教会の在り方でないかと今もそう思って歩んでいるわけです。だから、皆さんもご存じのように、この教会は会計報告もありませんし、その代わり月定献金も何もありません。けれど恵みに感じてどれだけ献身しても、それこそ真理教ではありませんが、出家してもちっともだれも誉めてくれませんし、くさしてもくれません。しかし天国に於いて、神様が豊かな

恵みを与えて下さることは間違いないと思っっているんですね。ですから、どうぞ皆さん、決してこういうことに対して余分な心配なさらないで、恵みに感じて、皆さんが感謝をもって頂いたらいいんじゃないか、そういう意味で、金生さんも給料が決まっているというわけではなく、神様が食べると言われれば、何でも食べるし、食べるなどおっしゃられれば、食べなくてもいいんです。お互いにそういう気持ちでいっているわけなんです。まあ、皆さんとも、そうなんです。皆さんが苦しんでいるなら、自分の苦しみのように一生懸命祈りし、まあ、お互いに主の家族ですから、他人と違うんだということを私たち心に置いておきたいと思えます。まあ、こういうわけですから、皆さんもお祈りして導かれるままでやって頂いたらいいと思います。

(司会者)

よく分かりました。それでは次に。

(正野姉)

本当に金生先生を神様が一番よい時にこの教会に送って下さって、神様のみわざは時になつてうるわしいなと本当に感謝しております。また、本当に私たちの息子のような年の金生先生ですね。うちにも息子がいますけれども、本当に御

聖霊によって神様が整えて、こうして送って下さって、息子も早くこういう風になってもらいたいと思いました。息子も本当に金生君はとってもいい奴なんだよって日頃聞かされていましたが、本当にこうしてお顔を見るたびに柔和なお顔で、私たちの教会に遣わされて喜んでおります。また先日は母のところに来て頂いたそうで、もう先生が来られて二回も行って頂いて、母が「先生が来られた」と言うんですね。「ウソ」と言って、この前来て頂いたから、その時の事かなと思って、面会簿を見たら、先生と二人で来て下さっていて、本当に母も印象に残ったみたいで、私が言わない先にそう言って、知らせて下さったんですね。先生に来て頂くのは気の毒だと思いましたが、金生先生が連れて来て下さるんで、安心して、何度も来て頂きたいと思えます。皆さんも安心して療養出来るでしょう。

金生先生の施政方針演説をお聞きしまして、私たちも本当に初めに救われた時のですね、信仰に戻らせて頂いて、涙を流して聞かせて頂いたんですけれど、私たちも金生先生と一緒に成長させて頂きたいと思っております。陰にあって祈って行きたいと。なかなかお祈りの少ない者ですけれども、本当に陰にあって、息子のような金生先生のために祈っていかないといけないと思えました。神様は愛する者を訓練すると思えますから、神様が色々ところを通らせると思いますが、

本当にこの救われた御言葉に堅く立って、歩んで行かれるようにとお祈り致します。

(司会者)

前田教会にはお母さん方が一杯おられるような気がしますが、けれども、姑さんかな？確かにあの、今話がありましたように、金生先生が見えられて、ちょうど今春で、若葉が枯れた枝から芽が出て来て、暖かな気持ちになる、なんか金生先生がここにおられるというのが私たち信者がそういう近い思いをするような気がします。教会の大久保彦左衛門ではありませんが、何かございませんか。

(大田兄)

大田でございます。いつもね、先生はね、神様、霊の立場に立って話されますね。しかし私は少し狂った信仰が頭の中にあるもので、どうしてもこの世的に人間的なことに立って、考えることが多いのであります。それでさっき鈴木さんともお話ししたんですがね、本当に神様は不思議なことをされるってね、うまくやられるなあって言ったんです。二年ぐらい前、私が病気を治してからね、先生もだんだん年を取ってこられるし、こりゃいつぱっくり逝かれるかわからん。逝かれたら、一体前田教会はどうなるんだろう。会社の社長たる者は、後

継者を見つけることが一番大きな責任なのにね、先生は「知ったことか」とおっしゃられるし、それでちょっとご忠告申し上げようというわけで、一言申し上げて叱られたことがあるんです。まあ、しかし、和義先生のことといい、金生先生のことといい、本当に神様はびっくりすることをなさいませぬ。これで私にとっても、神様は信用が増えました。本当に先生、安心されました。おめでとうございます。

一つね、私、先程からね、私生まれて二十八年になりますと言われているんですがね、私が二十八の時はね、昭和十八年、家内をもらいましてね、もう今結婚五十四年目になるんですね。その頃、戦争の真っ最中で、私にとってもその頃が一番大変だったの。それはね、私の勤めた会社が、いわしの商売だった。今でも日本全国で一千万トン魚が捕れるんです。そのうち半分は鰯なんです。それが今年には鰯が捕れないんですけど、その年も鰯が捕れなくなつてね、私の会社の缶詰工場とか、鰯を捕る船とか、皆これを処分してすね、立て直さなければいけないというのがちやうど今のあなたと同じくらいの年の時なんです。死に物狂いで突破しましたけれどもね、今考えてみると、その時、クリスチャンでなかった私をやはり昔からこうなることを知って、イエス様が横におって、守っておって下さったんだなあと今、思うわけです。だから感謝しておるわけですが、まあ、私の人生は格別だと

思いますが、本当にどん底ぼっかり行かして下さった。少しばかりいいこともあったけれども、苦しい苦しい人生を歩んできました。まあ、その都度確かに助けられてきたわけですよ。それで金生先生もふらふらと先生のようになれるかどうか、それは分からんと思うんですね。いろんな苦しい悩みがこれからも与えられると思うんです。特に頑固者の先生が横におられるので、俺の言う通りしなければ、気がすまんという方ですからね、大変だと思うんです。まあ、教会ではいい人ばかりおられるから、まあ一つ、詩篇にありますね、「苦しみにあったことは私にとってよいことです。これによってあなたのおきてを知ることができました」と。まあ、どうぞ、これから苦しまれて、まあ、皆さんに相談して、神様に祈って、私たちの先生として成長してほしいなあとお願い致します。

(司会者)

教会には色々なキャラクターの方がおられるので、それがまた楽しいです。

(榎本師)

有名な頑固牧師です。まあ、厳しいですけども、この間、和義が言うには、金生さんは当年とって二十九歳、いわば私

の孫になります。「孫だから、どうせお父さんのことだから、ペロペロだろうって、あんまりペロペロなめていたらだめよ。」こういう事も言われています。けれども孫になるとかわい一方、どうも力が抜けてしまうような感じなんです。まあ、これが皆さんにざっくばらんなお話しで申し訳ないけれど、それだから余計主の前に自分自らをきちっと引き締めなければならぬと思います。まあ、厳しいうえに厳しくなったら困ると思われている方がおられるかもしれないけれど、別に皆さんに厳しくするわけではありません。自分に厳しくするわけです。まあ、そういう気持ちであります。

(司会者)

どうぞ、どなたでも。若い方はどうですか。

(林一孝兄)

若い人を代表して言わせて頂きますが、僕が金生先生と初めて会ったのが、仕事のためにこちらには帰って来れなかったことがあって、大濠公園教会の方に出させて頂いた時に、和義先生と文子先生が「大濠公園教会の青年会にちょっと残ってみない？」と言われたことがあって、「じゃあ、残ろうかな」と思ったんですね。その時に初めて金生先生と交わりを持たせて頂いて、色々話とかするようになって、親しくさせ

てもらいました。仕事柄ちょっと車のお世話などもさせて頂いたんですが、今さっきうちの父が言っていたように、会社に来たら、自分はそう父に言ったかどうか記憶にないんですが、普通のお客さんを相手にするのと何か違うんですね。まあ、金生先生だけではなくて、教会の方が来られたら、やはりなんか違うんですね。特に金生先生を初めて見た時の印象は、同じ年なんですけど、穏やかそうな感じを受けてですね。見ただけで本当に優しい人だなあという印象を受けたんですよ。こうして前田教会に来て頂いて、これから伝道して頂きますが、これから前田教会の若い青年にとっても色々な意味で教えて頂くことになりますので、信仰を強められることになりますので、有難く感謝しています。色々ご指導の方、よろしくお願い致します。

(広田兄)

一言だけ。私は全く心配しておりません。心からおめでとうございます、歓迎申し上げます、と言うのもなんか口はばったいような気がしてですね、主がお遣わしになった、お受けしたい、そして恵まれた教会とは申しませんが、恵まれた先生の下で御用されるといふことで、先生が信仰に徹して命懸けでやっておられますので、四〇年ばかりここでお世話になっています。私は安心して祈っていきたいと思います。どうぞ

よろしく願います。

(司会者)

今日でももちろん終わりという訳ではございませんけれども、何かありましたらどうぞ。

(大田兄)

奥様がいないからという訳ではないんですけど、どなたかがお話し出すかと思って、待っていたんですけど、出ませんので、最後に一言、いいお嫁さんをもらって下さいと申し上げておきたいと思います。

(司会者)

まあ、その点に関しても、神様は備えて下さると思いますけれども。他にはいいですか。それではそろそろ終わりにしましょうか。確か『ペンテコステの前後』の最初の勧めの言葉に、バックストン先生が書かれた言葉だと思うんですが、神様が与えられた最大の恵みは、その教会にいい牧者が与えられることだ、神の器が与えられることだ、そんな趣旨の言葉があったように思います。この教会は榎本先生が遣わされて本当に私たちはよき信仰を持たせて頂きました。そして今度、神の器として金生先生をお迎え出来たということは何と感謝していいかわかりませんが、私たち共々、この与

えられた信仰を持ち続け、神様に従って行きたいという思いを今日強く致しました。それでは、最後の愛歌を歌いまして、榎本先生にお祈りして頂いて終わりにしたいと思います。

賛美 靈感賦一二一番賛美

祈祷 榎本牧師



編集後記

- ◎ 「ぶどうの木」第二十五号をお届けします。
- ◎ 皆さんの感謝のお証しに触れさせていただき、主が恵み深いお方であることを教えていただきました。
- ◎ お証しを残すことによって、主の恵みがさらにはっきりと実を結びます。今後も多くの実が結ばれるようにお祈りいたします。
- ◎ 多くの方々の協力に感謝します。

発行 一九九八年三月

発行者 北九州市八幡東区前田一〇一三

基督伝道隊 八幡前田教会

牧師 榎本 利三郎

発行所 基督伝道隊

八幡前田教会

福岡大濠公園教会

戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社